中村俊定文庫
文庫 18
886
3

增補 俳諧歳時記栞草

江戸 豊亭主人纂輯
藍亭青藍増補

秋

漢書律曆志 少陰者西方西遷也陰氣遷落物於時為秋秋襲也物聚斂乃成熟

少皞 帝禮月令其帝少皞注云少皞白精之君金天氏也

摹收 神月令其神蓐收注云蓐收金官之臣少皞氏之子該也

白藏 尓雅秋為白藏一曰收成注云氣白而收藏萬物故曰白藏

金商 秋五行屬金五音屬商故有金風素商之称唐高宗九日詩云端居臨玉扆初律啓金商

明景 元帝纂要秋景曰朗明景朗明義同

爽 月令

籟 謂秋声也增韻爽清快也尓雅吹物有声曰籟

夷則 廣義

夷傷則法也言金氣始肅萬物于此凋傷猶被刑戮之法

七月

立秋 節 月令廣義 孝經緯云大暑十五日斗指坤為立秋七月節

新秋 韓文 是時新秋七月 初金神按節炎氣除始初也共

孟秋 廣韻 孟勉也始也又謂新秋也

初秋 中院通茂公卿説 和歌うゑ初秋ハ、七月十四日までといふべし、

處暑 中月令廣義 立秋十五日斗指申為處暑瀆暑將退伏而潛處也、處上声止也暑氣止息也是七月中也

文月 清浦奥儀抄 此月七日ふつき七日ふみとふふみとして文どもをひらく故ふ文ひろげ月といふと暑せうゑ藏王 七夕のあふよめ空のうげうえて書ふらべるる文ひろげ月有家○文月を暑〳〵ふつきともいふ、

機棚月 藏王 鵲のよそのそ〳〵ろせよ、なぞ〳〵と月のころ待えらう家隆

女郎花月 藏王 なぞらえちぎりのころふあぐ〳〵ゑ名とえ〳〵月もとそ〳〵〳〵月、顕昭

凉月 月令 孟秋經曰月凉風至

盆秋 毎年七月十五日、為父母設盂蘭盆供十方自恣僧得庚則曰室相

相月 尓雅 七月為相疏云七月相

桐秋 淮南子 一葉落而天下知秋 隨甲書 梧桐立秋之日一葉先墜

蘭月、蘭秋、肇秋 纂要 七月曰首秋上秋肇秋蘭秋 月令廣義提要抄云

親月 和尓雅 此月諸人詣親墳墓故曰親月 蘭月云云

餞月 餞字 彙曰送行燕説文送去也餞と訓ぜ、暑の去を送る意なり、

八月

葉月 此月肅殺の氣と生じ百卉葉と落る故ふ葉落月とゝ今暑〳〵て葉月とゝ

南呂 律 礼記 律中南呂高誘註云南任也言陽氣内藏陰侶干陽任其成功

白露 節 月令廣義 孝經緯云處暑後十五日斗指庚為白露言陰氣漸重露凝而白

秋分 同上 白露後十五日斗指酉為秋分也秋陰生於午極於亥故酉其中分也仲

月之節為秋分秋為陰中陰陽適中故晝夜長短亦均焉

仲秋 月令八月為仲秋

壯月 纂要八月為中商又曰壯月

桂月 同上八月亦曰桂月○桂の花のひらく月

中律 芋環ふ出せり出處未考

難月 芋環ふ出せり唐類函

八月乃儺以達秋氣儺ハ難ハ難月の誤ふ

秋風月 藏王萩の葉ゝ露完

みぐさを音ふるゝや身ふるゝ

月見月 藏王名ふしあらぐ秋の半ゝしあき風の月 定家

の空ゝを見て思ひのゝとあゝ

雁來月 月令仲秋之月鴻雁來

ふる月とゝろふふ長明

九月

無射 律 礼記九月律中無射高誘註云無射陰氣上升陽氣下降

萬物隨陽而藏

寒露 節 月令廣義孝經緯云

無有射出見

秋分後十五日斗指辛為寒露言露冷寒而將欲凝結也

霜降 中 同上寒露後十五日斗指戌為霜降言氣肅露凝結而為霜矣

季秋 月令季秋之月云

紅樹 通俗志ふ出せり

疑らくハ紅樹月の誤ふ藏王ゝ山はゝくゝぐゝ

ゝくゝとゝゝ紅葉の月の色とゝゝふゝん後鳥羽院御製○

朱熹詩云秋山有紅樹忽憶田野中○韓退之

詩云春風紅樹鶯眠處似妬歌章作艶声云

ゝゝゝゝゝゝ紅樹とゝくゝハ

九月の異名ふゝゝゝゝゝ

玄月 范蠡曰王姑待之至于玄月註云玄

月九

長月 夜長月とゝ

月也

素秋 素秋ハ九月ふ限らず秋の總名ふゝ素ハ白義

ふゝ四時と五色ふ配ゝふ秋

菊月 月令季秋月 又菊秋ゝゝふ

白ふ中ゝゝゝふ素秋の名ゝゝ

菊有黃花故曰菊月

晩秋 對早秋曰晩秋

梢の秋 李吟云紅葉もる故ゝ

木深月

紅葉月 證歌紅樹ともいハ

の下ふ出つ

寐覺月 藏王ゝたびゝゝ

ふゝ枕のゝゝめ月秋ふハ

ゝゝぬ長き夜もゝら家隆

小田苅月 藏王ゝゝゝゝ

ハ鳴ゝゝゝゝの

露もげく、袖うち拂ふ　色どる月　梢の秋こい
小田のうの月　頭昭　ふかあおじ、

七月

糸織姫　棚機七姫の内こ　異名分類
旧事紀ふ、令下天棚機姫神織神衣上是の条ふ出

犬飼星　その部二星　**石枕**　仙覚抄
ふよろべし、　ハ真の石ふあらぞ玉こたなむとのにふ夜の玉の枕とえう

芋の葉に露　藻塩草　露
取草と八棚機の歌と書付

曬衣裳　星のうし物　小袖
るふ芋の葉の露を書こ

四民月令　七月七日麪を作り藍丸及び蜀漆丸と合し、經書及び衣裳を曝し、俗ふ習ふと然り　世說　郝隆
七月七日鄰人とうとバ皆衣物と曝も、隆仰さ臥して腹を出す、人其故をとふ、曰腹中の書と曝のこ、○星のつし物、衣裳と曝ども物とうすも七夕ふ巧ことをもん為こ、

貫之家集　世とうこて我うも糸ハ七夕の涙の玉の緒とやあるらん秋さても露ふく袖のせばきはたあこつめふ何とうさまし　舟内侍　荒野集　七夕よ物うもともあれむし

越へ、

池の坊に立花　洛の六角堂前法寺雲林院八三條の南ふあり、三十三所順礼の一箇所也、近世僧專光數品の花枝と一瓶のうちふ一そ山水の景象と模もるとを得こり、和俗ともと立花とふ今ふ至て代さこと玩ぶ僧俗此徒弟とあるも此多し、例年七月七日、立花數瓶砂の物等こあり、人爭ひてこれをこること池の坊の立花とふ是　滑稽雜談
ゆ又二星ふ供もるの意あり、

伊勢踊　いせとうふ
とふむうこより侍るこ

○世ふふ松坂音頭ふ、

生身魂　蓮の飯　閑窓　さし鯖　倭華
本朝の世俗、七月ふおもバ生る二親と供養して生身魂と名づく、こもも盂蘭盆の修行あり、　盆經　願くハ現在の父母とて、壽命百年病なく、一切苦腦の患なうむ、是七月十五日、僧自恣の日、現在の父母、寿命長久と祈る願の文あり、是こ身魂の冬に行ふ、　和漢三才圖会　刻清ふ元の日に祝用こと但こ昔より晋ふ傍て割開きこと紀うて、二枚と一重いふ一こと一刺とふ、○同書云蓮の飯考妣の靈前ふ供し又以て親戚ふ贈ると礼式ともこと称

して生霊祭とゝ人、荷葉の葉と以て蒸せる糯飯と包ミ、稲
観音草と用てゝ結と縛る佛名と以て好とする、

妻 稲つるゝ

和漢三才圖会 秋の夜晴て電ひかり傳ていふ此時稲實る故ふ稲交の
名あり、御傘 稲光ハ雑あり、稲の殿 稲妻ふ對して、
稲の殿とゝ

説文 電ハ陰陽の激躍するゝ、

稲葉の雲 詩云多
稼如雲○

續猿蓑 獨ゝて留守
もゝとゝ〜稲の殿 一束、

秋風ハ田面ふ冬とさゝゝゝ、いなむらの雲の露ぞ〜〜〜

稲
る〜中院通茂公○稲葉のゆひ〜〜のひゝる景色とゝすゞ、

の花 夫木 ゆふぐれハ門田の稲の花の浪よる 後久我内大臣

糸萩 大和

門田の稲の花の浪よる我家の、

本草 糸萩ハ花紅ふ盛ス、

隱元豆 大和本草 近年中華よりゝゝる、
春子と植秋の末ふ實多く花紫
し、蔓生也、嫩きとき莢とゝふ煮食ふ京都ふて隱元豆と云、
筑紫ふて南京豆とゝ人、○此種黄檗隱元禪師、永朝しゝく
諸種と持来ゝる其一種ゝ、
故ゝ隱元豆と名づゝ、

稲蓑虫 和漢三才圖会 蟹
蚤蟲春黍、和名以

祢豆岐、古萬呂 俗云祢宜 按ふ蟹蚤蟲、蚤蟲斯ふ似て小く、
長さ一寸ゝ、青色尖ゝ首、兩眼の間廣〜〜但し蚤蟲斯
ハ兩眼の間狹しとゝと以て異ゝ、
と著ゝる狀ふ似ゝ人、故ふ俗呼て祢宜とゝふ小兒両足と捕ふ
ゝ身と伸して首と俯き仰ぐ稲と春形ふ似ゝ故、

蟲

ふ和名稲春とゝふ古萬呂とハ蚤蟲の類の和訓の總名、

冬蟲 本綱 蟲蚤蟲ハ總名ゝ數種あり、草の上ふ在と草
蚤とゝ人冬ふ至て土穴の中ふ入夷人灸てこゝと食ハ
辛く毒あり其類土中ふ乳む深く其卵と埋む夏ふ至て
始て出づ○按ふ蟹ふ方ある首形莎雞ふ似て小く、
青白の色田の稲ふ生る夜ハ株ふあり、朝ハ梢ふ上り、稲の
露と飲む故ふ稲子と名づゝと取て炙て食ふ味甘
く美ゝ人ふ蝦の如し形同ゝして灰色、

蝗 本草綱目 蟲蚤蟲集解
土冬蟲也、

田野ふ在て地ふ跳る者ゝ人
二五蝗亦蟲ふ類し、方首ふ王字ゝ人令氣ふたゞる所、
天と蔽ひて飛ハ世金の声と畏る、〜〜ふ八十一の子と生
む冬大雪ゝ人ときハ土ふ入て死も、

和名抄 蝗 和名於保 天
祇無之

和本草 管子ふ凶年の五害水旱風厲蟲とゝ人、虫ハ

螢に和俗ふ實盛虫と称もるあり、蟲ふ似て小く青色なり、首ハ兎と著くるゞ如し、稲葉と食ひて大ふ害を、夜松明と燈し鐘鼓ふ入らしてこれを送ふ

芋虫 大和本草 蝎、又菜の葉ふも青虫と生ず、草藤ふ生る、大なる拇指の如く、長さ三四寸あり、芋ひ〜といふ青色又褐色にして、後ふ化して鳳蝶となる、

蟷螂 時珍曰、両臂斧の如く、轍ふ當て避むと、故ふ當郎の名を得たり、又螳蜋、首と驤臂と奮ふ、頸脩し、大腹二千四足、髭と以て鼻ふ代ふ、人の髮と食ひよく葉と齧して蝉と捕ふ、深秋ふ子を乳房と作るふ枝の上ふ粘著を、即螵蛸也、房の長さ寸ばかり、拇指の如し、其内重々として隔房にして、房毎ふ子あり、蛆卵の如し、芒種の節後ふ至て一齊ふ出

滑稽雑談 俗ふ鎌きりといふ、かの両臂、斧の如し、又鎌とめくるもゞとしよそいるちゞ〜、○時珍曰今人疣と病者往々螳螂と捕へこれを食しむ、

寵馬 同上 こゝろぎ二名一物この部蟋蟀の条ふ註を、

兼三秋物

居待月 藻塩草 十八日ゝ、万葉ふ座待月と書り、

絲芒 葉細く絲線のごとし、長三四尺一株ふ數百の莖最生ず、秋莖と抽で花穂とする、

色草 秋の千草あり、

芋 時珍曰、芋花とひらく〜で或ハ七八月の間ひらく者あり、莖と抽で花と生ず、黄色旁ふ長萼あり、これと護る半辺蓮花の状の如し、○粒芋、唐の芋、青芋、螺芋、甘藷ふの種類あり、頭字の部ふもとゞして註しあり、

田舍杼 形四角諸杼ふ大ふして渋し、酬し杼

犬殺梨 和漢三才圖会 北國最多し、奥羽津輕秋田の産、他國ふ倍して大あり、周ア一尺四五寸、俗呼て犬殺と名づく、狗子樹下ふ有ときゞ梨落まゞ撲ふ死ず、故ふ名く、

稲 禹錫食經 尔雅云稲ハ稌ふ、古ハ麥稲の種と乃ふ二ツの小き管とメて跟と通し繫ぎこれと握り持穂と挾み扱近年稲扱と製ず其捷を扱竹ふ十倍を、

稲舟 古今 最上川のわれ〜くる稲舟の、此月をハあらで此月をり ○出羽

稲苅 字彙 刈ハ獲也取也、

稲扱

國寂上川水をはやくして舟を引のわざに舟のうしろのかまへるが人の物をいはずと言てうづもるゝに似たれバいふ又一説に稲をつミたる舟といふ讀方物といはとふ心と、稲舟によせてよむあり 藻塩草 すとえたり

稲莚 御傘

莚とかきたるやうに稲の面の平々とあるを申そふよつて夜分にも居所にもけらふ○又新藁にて織たる莚とも又かゝる稲とて木の枝などに苅いねとかけほしたるとも稲莚とよめり 万葉 王むとの道行つかれ稲莚しきても人をみるよしもがな 人丸 新古今 秋の田のかりねの床の稲むしろ月やどれともしける露かな 定雅○大かた是にかく心得べし

鰯引 裂鱠

和漢三才圖会 鰯 俗字 鰮、和名伊和之、性柔弱故に俗字弱に從ふ、與和之と訓る相通す中略 群行して至る時、海波稍赤し、漁人豫知て網を下しこれを釆る、鯨好て鰯を吮ふ為に逐ふ者数万群となして浪接のごとし、これを取て膾に作る、炙として食ふ又脂を取て燈油とす、○鰯引とハ網と引の義 裂膾とハこれ魚、刀を用ふるに及ばず指を以てさくと解故にいふ 本朝食鑑 一名 御紫或ハ紫といふ本朝宮闈の兒女鰯の賤名を忌て御紫といふ、

鰯雲 秋天 鰯先

鰯の塩糟其内色紫黒故に名つくるか あらんとする時一片の白雲ありその雲段々として波の如し是を鰯雲云

八月 芋名月

つの部月見の条にみえたし

十六夜月 既望

古今 君やこん我やゆかんのいさよひに槙の板戸もさゝでねにけり○いさよふとハためらふ意也十六日の月暮てのちまちかねていづる故也○またくと出ていざよふ月の雲 芭蕉○此句意ハまたくと月ハ出ながらも雲のかゝりてさはりあるといへる曲節なり 蔡氏集傳 日月相望むことを望といふ いハ既に望む十六日之

羊肚菜

和漢三才圖会 羊肚菜今云兎口蕈八月の中濕地にきく生じて其繊の表褐色端曲り捲裏ハ黄白色細刻なくしてあつらうかしてくぼみあり、蜂の巣のごとし、毒なく

稲石蕈

同上 状木耳のごとし繊柄あり黒色裏灰白色、峯の頭巌の上にあり甚得がたし、

小屋

同上 守舎禾と看守あり○田間に建て猪鹿を追ふ処也

稲木、稲掛

稲干

多識篇 喬扞 伊奈加計 ○稲木、俗稲掛とのふ禾と掛る長く竹の長短相等しきの三茎と取一束ふ箋と用てこれと縛り、田時り、田中ふ於て禾と上ふのけて乾さるあり、

稲束

和漢三才圖会 指と刑て束ねて一把二把こすり長ふ束ねて又稲塚あり、刈稲と束ねて後積て堆くこれ恰も塚の如し是を稲塚と云、

稲

負鳥

古今 我門ふいなわせ鳥の鳴ふつけこふく風ふ鳴ふきふ

真淵翁云、稲負鳥いにくこうがきてこそこゑぐとゑぐとを鳴ぢをとるふ或ハ鶺ゑ田夫ゑなどいふハ此哥とよくも心得ぢをゑてこゑ詞をもらめひぐとあて皆いふふ足らぬ庭こきのことをいとふるいあくふり、実ふ秋の半もぎて來鳴ものふり、

綺語抄 いふことを稲負鳥のとゑぐとハ人ハ意路ふまぐハざらまし、○鶺鴒、稲負鳥、庭こきこつふふ也鳥とつぎとゑ鳥ホの諸名ハり、

三才圖会 鶺鴒 雀のこぐひ飛こきハ鳴、行こきハ揺く大さ鶺のこゑ脚長く尾腹の下白し頭の下黒く連銭のごとし、故ふ杜陽の人と連銭とりふ、

色鳥

御傘 いろ〳〵秋こゑる小鳥をとの〻ハ

雪玉 さらふ又わるもかそ〳〵山路ゆく秋やいろるが限りしの色鳥のこゑ改為

桑扈

和漢三才圖会 竊指 青雀 臘嘴雀 伏鳩 より小く頂黒く腹灰青色羽の末黒く白こ斑あり、觜微曲て厚く浅黄色尾短く好て豆粟を食ふ故ふ豆甘美こ名づく、俗以て豆廻しこ名づく常ふ鳴て春月ふく囀る比志利古木利といふがごとし、

伊須加鳥

正字未詳 同上 狀鶺鴒のごとくふ〜て頭蒼く又腹臆最赤く紫あり、觜青くしく翻嚙又とふ也、故ふ事物翻嚙と伊須加の觜とのふ、

九月

生玉祭

九日

神社啓蒙 生玉の社ハ摂津國東成郡天王寺の辺ふあり、祭る神一座、天の生玉の命、

社家註進記 明應年中本願寺の僧こゝふ来りて寺院を創し、神地と以こ境内ふ接も、神其不潔を惡こそ、彼僧と爭こそ僧をそれて神殿と今の旅店の側ふ遁し、こゝ〳〵造営こ其後信長の兵火ふりこと殿社灰燼とあり、繰ふ神筐と別所ふ迂こ、慶長年中、秀吉城廓と築くの日、今の地ふ迂こ、

例祭九月九日、神輿一基、遊行流鏑馬あり、社内

坊ありその内南坊と別當す、

岩倉祭

十五日　八所明神の社八、洛の北、長谷村の西岩倉にあり、王城の四隅ふ岩倉と置ところ其一なり、

拾芥抄　大雲寺岩倉觀音○親長卿記ふ云、文明三年三月廿九日、岩倉長谷の觀音ふ參る、十一面圓融院の御願、日野中納言文範卿草創あり、○鎮守、岩倉大明神、所謂八所と、八幡　加茂　松尾　山王　住吉　春日　新羅　大座是ふ太神宮　貴船　稲荷　平野と加へて、以上十二社なりと十二所明神と称す、是大雲寺の鎮守ふして、土人本居神とす、例祭九月十五日、神輿遊行す、神主八村中の氏子交るゝことを勤む、大雲寺衆徒四人名代として公人法師二人供奉、夜宮ふ大炬火二ツ立、深更ふ及て角力五番あり、

滑稽雜談　俗ふ岩倉の夙くき祭とゝふ、夜ふ入て神供を奉る、一村の内新婦とえらゝて、婚礼の服と着せゝめ、神供の器と頭ふ戴き、神前ふまゝくしむ、一村の老若ちゝさき枝木と持、新婦の尻とうつ、新婦ゝまで、ゝもるゝと、立まわりてうつまり、故ふ尻ゝきとゝふ、

一宮祭

十五日○河内國丹北野郡北枝方村ふあり、祭る神牛頭天王八王子、北野の天神、摂社、帝釈天王、服立寄姫大明神、浅原大明神、鎮座年暦詳ふもゝ例祭九月十五日、今八十六日神輿出て、神楽神湯ふあり氏子八郷坂村小倉村　招提村　田口村　甲斐田村　中宮村　禁野村　濃村是社僧神宮寺及社家岡田氏記す處、又一説ふ一宮平岡大明神八、河内國河内郡ふあり祭る神天の児屋根命姫大神、香取神、鹿島神、若宮の社末社六社、神武天皇の御宇鎮座、例祭九月八日九日社務水足大炊、下祢宜神子五六輩、皆農民ふして、ことゝ兼ねひとゝふ、

社造替毎ふ陣の義ありて、時日と定らる、勅使あり、伊勢大神宮、春日の社廿一年を經るゝときハ、心造り替あり、遷宮の時納る所の神宝、行事官、調進をこの月伊勢參宮の人、多く京師と出て、十六日の御祭會並ふ御遷宮ふあるゝとき、九參宮の人、光霊山の國阿の像ふ詣てその杖履と戴拝す、相傳ふ國阿深く太神宮と信じ、時ゝ木履と普拄杖と携て參詣とゝもゝ、終ふ行路の難なゝ、故ふその福ふ倣ひて以王安と祈るゝ、○二十一年毎ふ遷宮あるゝ故ふ十五年

伊勢御遷宮

紀事　九大

めふ至るとき木引かゝるあり、三年ゐて木引成て又三年木拵のことあり、材木ハ木曽山並紀州大杉山より出ッ○内宮御鎮座ハ垂仁天皇二十五年三月外宮ハ内宮鎮座の後四百八十四年と經て、雄略帝の時垂跡ゝ

色ふ風

九月の風あり 新古今 ものおもふいろふかき風の ゝゝゝゝ身にしむ秋のゝゝゝゝ 久我内大臣

隱君子

菊の異名あり 范至能菊譜序 山林好事者或以菊比君子其說以謂歲華婉娩草木變衰乃獨燁然秀發傲睨風霜此幽人逸士之操雖寂寥荒寒而味道之腴不改其樂也 愛蓮說 菊花隱逸者也

いあて草

菊の異名あり 藻塩草 長月の九日まくいあて草花八重咲丙代ぞ百ん

毬栗

其實苞中に在て未地に墜ざるとゝふ、毬、和名以加 魚花

果

和漢三才圖会 其實材に似て本窄く俗に唐材とゝふ一月ゆゝて熟す故に一熟と名づく、その樹材把に似ゝゝとゝ然らず淺淺ゝて葉苣麻に似て小く昔色淡く潤ゝ文理隆明ゝゝ五痔を治するとゝ識て魚毒を治するとゝ

櫟

ゝくせゝ 櫟に似て花ハ栗の如し實ハ椎より少ゝ大ゝ木硬くゝて多く船の櫓に作る

色見草

藏王 秋もゝ色まづるく實を以て秋とも

くゝき山ゐろへぬまゝろゝのゐろ見草ちらま

色不變松

荀卿曰隆冬と經て凋まゞ、風ぞゝく、雪霜と蒙ゝて變ぜゞ其貞と得とゝゝべし 新拾 いろゝぬゝゝゝ

岩蓮

紅の松君をて千世の友とゝゝゝゝん 入道前内大臣

花

大和本草 岩蓮花倭俗の名之其草の形葉のゐろ恰も蓮花の開るゝ知ゝ異名之或ハ云佛甲草是ゐと非

鰯の黒漬

豫州の産ゐ、宇和鰯と称ゝゝの製両鰓と切削て鮑とゝ、鰯の性腸の中に黒汁あり、塩水に和して其魚黒ゝゝゝを黒漬とゝふ、

道泰

九日 迎鐘 槙賣 建仁寺 異の角よあり、今の建仁寺大昌院管領も藥師堂あゝ是珍寶寺の本尊○ 城国名勝志 六道ハ五條の末北、

七月 六

小堂ニ地蔵ヲ安置セ、世ニ六道ト称シ、傳ヘフ、この所、冥途ニ通ヒ、故ニ小野篁この所より親ら六道ニ行て帰ると也、是ヨリて、毎年七月盂蘭盆前、九日ニ男女参詣ス

紀事

今日諸人六道地蔵ヨリ詣て、男女鐘ヲ撞て聖霊ヲ迎ふるといふ各槙の枝ヲ買て携帰る、又新穀ヲ買て聖霊ニ供ス、是ヲ祖ト称ス○六道参ニまうで槙の枝ヲ買ひて家ニふろう、霊前ニおくハ、俗聖霊槙の巣ニ来りて来るこりふ、是聖霊ヲ迎ふる意あるべし、

古事談

珍皇寺の別當某云、当寺の鐘ハ、慶俊僧都こゝに鋳る、慶俊入唐の時、留主もる僧ニいひくらく、此鐘土中ニ埋三年ヲ経て堀撞べしと衆僧三年ヲ待ニ堪ず、纔ニ一年ヲ過てこゝを堀、撞ヨ掛く、撞ニ其声唐ニ聞ゆ、慶俊日我寺の鐘声きこゆ、予念ずらく三年ヲ待て是ヲ堀撞ふるる時ハ、撞ぞ、て六時ニ声のるべしと歎惜ス、○ほうの所謂ニて、聖霊ヲむかふるもの撞ふ、是ヲ迎鐘ト云ふ○六道ハ桓武天皇延暦十三年長岡ヨリ今の京ニ遷らせ給ふとき、諸人の葬場ト定めるふ

迂都記

ゆ、ゑ、ゑ、本尊薬師架、傳教大師の作、七佛薬師のそのうとそ、

は

七月

初涼

王劉繇詩云、昊天清旦高秋風発、初涼、

墓参　七月朔日より十五日ニ至り、各祖考の墳墓ニ詣ふ、こゝ唐山の人、清明の日上墳祭掃ニ同し○源順家集ニ、七月十五日ごんゆとせて山寺ニまうづる所、ふのうめとれる蓮の葉とひろこ露おく山ニ我いきかゝり、是盆の墓参ニて

和漢文撰

前文略之一家ニ

ニ杖ニ、ちゝ髪の墓まゐり、はゆるこゝろのかゝまゐらふ芭蕉評云、故翁伊賀の西麓庵ニて、例の文稿とあらくひるそ、今思ふニ白髪の亮祭ハ、其日の感情ハ演ざるで、発句ハ、祭る姿にあらぎ、此故ニ参の字と以て歩行の様と形容せしふ、當季の詞も、惜ずぎ、増て切字の入所もなし、此等や有様躰と云て、まゐるこゝろのゝゝまゐらふと下の句と云ひ次て、俳諧の歌ニふるべきもの

蓮の飯　いの部生身魂の条ニ註ス、

花燈籠　花とゆて美しく飾る燈籠なるべし、

初鳥狩、初鷹　貞徳曰、とや出の鷹ニ、はじめてつかふと、初鷹とも、初鳥狩ことゝいふまゐり、鳥屋出の鷹ニ、夏の羽のぬけくると鳥

屋よりあつて羽の出そろいぬると盆の聖灵の箸とりて夜鳥屋より出さふより、箸鷹とも申とりり○小鷹狩の条をも見合もべし、

鳩吹

鳩ぐとりとりて手と合せて、鳩の声のやうふふきふ〳〵もちあり、八雲御抄

歌林良材　藻塩草　袖中抄　ホ説同し

炭俵集　名月や誰が吹おとす袁の鳩　酒堂

花火

和漢三才蒔会

燧燈ふ代ふべきものなり又夏月河辺の遊興とも

御傘　正花と持へ、

萩

和漢三才蒔会　天竺花ハ花史よりる

ふ如し、桜ぎるふ枝葉長く垂地と藤ふ狀糸櫻ふ似て一極三葉棗の葉ふ似て又南天燭の秋ふ似て尖らぎ、糸軟く秋小花と者、淡紫色、俗専ら萩の字と用ふ奥州宮城野方三里ばかり萩生茂さり、山萩あり、白花の者あり、○或書ふ宮城野の萩ハ草ふあらず木萩紫開分の者あり、○或書ふ宮城野の萩ハ草ふあらず木萩くらもどふ作る木あり、梢ふ青き枝生てその枝ふ花さくなり、○ちやくあ〳〵の萩、鹿鳴草、古枝草、糸萩、

萩の錦

錦ふ小萩、さぎ萩ホ其頭字の部ふわちて註を、そこ〳〵ふあり、新後拾

秋もきさの、花のあ〳〵きさの露のたてぬきぬ　法皇御製

萩殿

萩の戸

禁秘抄　萩の戸ハ常の御所ノ方貳間の前　五社百首註　菊戸萩戸同しこと、

萩の戸ハ限らそ色く秋の花ふもとと栽らる唐京殿の西

蓮の實とぶ

稿頌曰其茹秋ふ至て黑くして水ふ沈む石蓮子ともて○山谷詩倒載收蓮蒭ふ

八要抄　萩ふ限

こもも蓮の子の房中より抜出さる穴ど軟と見立し、

初嵐

和漢三才蒔会　山の氣と嵐とふ醫書ふ山嵐不云の氣といふ是あり今初秋以後朝夕山より吹風と俗に嵐と名つく　連哥新式秘抄　初嵐ハ七月まより八月中ごろまての風なり、

絡線虫

こくこくとも　六月の内ふ

ア鳴初て七月中ごろまで、野義の中昼盛ふ鳴く其声ギイ、スとりふゞ如〳〵、一二声の内ふ、チョンと舌打を俗是と蛩と云て小籠ふ入て市ふ賣て小兒の翫ともそ形蟲蟲ふ似て大なり、是もとおりとしギイ、とふハ機躓の音チョンと筬打と音あり又ギスとゆつり　續猿蓑

夏の附合ふ、砌と這ふ蘇の中の絡線のこゑ　沾園

蟄虫

冬虫　蟲蟲の屬長サ三四寸、身もふもこ痩て方ある首両額ふ眼あり、目の上ふ二ツの髭あり、翅灰赤色黑

點あり、腹の下白く、善跳て捕へがたし○今の俗これをおろくといふ、

櫨 【和漢三才図会】櫨以て黄色を染む、天子の御袍黄櫨染と称する是なり、帛を染て上に礬水を用ふ、暑染をハ黒茶色となる、其葉小く浅青色、茎微赤し、三月小白花を開き、細子を結ぶ、秋に至て紅葉す、元山もと【[illegible]】漆の類にして、葉柳の如くにして滑なる木、今世子を採て専ら蠟燭に作る、依て多く平原の地に植て利とせり、

兼三秋物廿

日亥中月 廿日の亥の正刻に出る故なりと、

籏芒 【袖中抄】花芒なびくとあと同じ、ひとさきなり、或ハ万葉裏書に薄とハ穂が出て籏をさゝげたるやうなる薄といふと、能因申しけるとぞ云云、

花野 千草の花の野に咲みだるゝをいふ、野の花とよぶときハ花体となりて野ハ用なり、花野とよぶときハ野体となりて花用なりと心得べし、

芭蕉 【大和本草】本草に濕草に載す、秋の末冬根を地に植て茂り易し、春葉を生じ秋に至て茎枯れて年々発生す、冬を歴て大なり、黄花を開く、極めて稀に東鑑に其ハ花と優曇華といふよし、まゝせり、

葉雞頭 雁来紅をいふなり、かの部見るべし、

薑 【和漢三才図会】生薑音姜、今俗多く姜字を用ゆ、我の音ともに末其處とも云【倭名抄】生薑 久礼乃波之加美 蜀椒 奈留波之加美 蔓椒 以多知波之加美 呉茱萸 加波波之加美 此等をもて考ふるに、往昔波之加美といへるハ辛果の總名なり、

蓮芋 其葉荷葉に似て円く、其根菜の形の如し、味美なり、或ハ呼て栗芋といふ、案ずるに水中に種るものを蓮芋といひ、圃園に種るものを栗芋といへり、

彈 の条に出で、

斑龍 鹿の異名

鯋鉤 【和漢三才図会】彈塗魚 俗 波世 川の末海に近き處に多くこれあり、常に水底に潜行す、鰕を以て餌とし、綸の端鈎を去ること二三寸許の處に小鉛の錘を着、鈎と地に附しむ、微動の響を候て竿を揚ぐ、秋月貴賤以て遊興の一つとす、形色鯒に似て小く、細鱗、體畧滑にして口濶く腮大に眼上に向く、斑點微黒を帯ぶ、尾にも又小斑あり、虎彈魚 納彈魚 飛彈魚等の類多し、

八月

八朔 田の實の節 憑の節供

特怙の節 紀事 凡毎月朔ハ吉日ゆゑ相賀ぶるこ中田面の節 華と同し、今日殊ふ八朔と称し、又特怙の節と称ぶ、又憑の節供といひ、或ハ田實の節と称ぶ、又田面の節と号ぶ、中世農民稲の初穂を 禁裏ふ献ぶ故ふ田の實の節といふ、世ふ又其訓を借用て憑の節供と称ぶ、蓋君臣朋友相依て頼の義ふ取、君臣朋友の間互ふ贈答の義あり、今日貴賤各白帷子を着し互ふ慶と修ぶ、公事根源 八朔の風俗、後嵯峨院潛龍の時、外戚源の通方卿の亭ふ在しふ、近習の男女密ふ斯義を ふして、閑素を慰め奉る、後皇位ふ即くの ふ未嘉事とす、

初月夜

或説ふ四日五日六日迄をさしていふ、さふ害ふるべし、○青藍曰、仲秋の月ふぞ、初月と賞する八三五の月を待ところよりいふ、ゆゑにあるべし、猿蓑集 粟柄とめそくまぬ初月夜 半残

初潮

十五日の潮といふ、一説ふ初潮の初の字ハ葉月の潮といふ、五雜組 海潮八月獨大なるハ何ぞや、潮ハ月ろ鷲ぶるもの故ふ月望に潮盛あり、八月の望に盛ふ、

御傘 伍子胥ろ死靈、八月十五日夜ふ風波をおこすと云ふ

箱崎祭

十九日 神社考 筑前國那珂郡、此社ハ誉田帝の祠ふ、博多ふ近し、○祭る神三座、中ハ應仁天皇、東ハ神功皇后、西ハ武内宿禰ふ、仲哀天皇三韓を討んと欲しまふ神功皇后ふ、筑紫橿日の宮ふ至て給ひ、軍旅を催こ、この時、天皇崩御ありこの時皇后懐妊臨月ふ、ふ、男子の貌とあり、弓鷲爪鉞をとらし、呪して日請、征伐の後降誕ふれと、三韓ふ、平定し、筑紫ふ帰りこ、ふ、男子降誕ふ、ふ應神天皇ふ、その地ふ、亟て宇佐邑とふ、胞衣を宮ふ籠ふて地ふ埋ふ、松を栽て標ふ、ふ、その地を呼て箱崎ふ、醍醐天皇延喜廿一年六月廿一日、託宣ふよりて、宮を筥崎の松原ふ建らる、例祭八月十五日ふ、○古老傳ふていふ、昔この松原ふ我定意三守の麓を埋む、故ふ箱崎と号ぶ、松をその所ふ植て標とす、この松猶在とそ、縁起 昔白幡四流、赤幡四流、虚空ふ降、其所ふ松を栽て標とす、故ふ八幡の号あり、諸説迷ふ異あり、

花畠

貞享式 御傘ふ正花あり、春あり、細ふ穿鑿すれバ種々の理

厨あるとどおの分ゝて置方かよきもうゝ、如何ふる秘事ふ、ちゝぎ、今按ずるふ花檀の花畑も、夫ゝて秋ふ定むべきふく○花畠ハ草花もあるべふ、

初紅葉

初花初櫻といふふ同し

[新拾遺] タかゝ山

木々の梢のまちかちぢけきの

薄荷

[和漢三才圖会] 薄荷、薄荷、薄荷、薄荷、宗長親王もぐるふ、宗長親王

蕃荷菜ホの諸名あり、本綱曰二月宿根より苗と生ず、清明の前こゝと分つ方ふる紫ゝ赤き色其葉對生、初時形長ゝて頭円し長まるふ及て尖る其莖葉茎うゝ似て尖て長し冬を經て根枯ず按ずるふ多く山城ふ出、

花紫

[花彙] 大和地方多く藝春種と下す長じて苗の高さ一尺以来葉ハ謝落金の葉ふ類して小ふ、又俗ふよぶ琉璃草ふ似ゝ、差互して生ず三月花を開く、梢の葉の間ふあり、形状円く瓣五出ゝて内ふ莢鬆ふし又瑠璃草の花ふ異ふるゝゝ、ゝゝゝその色白し、又粉紅及ひ黄色のもけあり下ふ長甘苷あゝて こゝとゝゝ実と結ぶその形円く尖まり、稔ふ類して大ふ、秋ふ至て熟ず黄白色あり、○按ずるふ御傘ホの俳書ふ花紫を秋ゝ、若紫と春ゝず、然るふ本草花彙ホの説三月花を開くゝのゝり、紫草と種て試る人あり て曰、此草秋種るゝのハ春花と開き、春種るゝ花ハ秋花さくと以て、御傘ふ花秋ふりとゝるも、亦據ふきふあらず、

○絹帛を紫ふ染る者此草ふ、

花芒

の条ふ出ル、

濱木綿の花

[大和本草] 和品濱木綿万年青ふ似ゝ、俗濱おもとゝ、海辺ふ生ず、七八月白花とひらく、莖高く延て只梢ふ数花あり、まりひらく、巻丹の花の形ふ似ゝ、好花ゝ あゝ、季秋実を結ぶ花咲る跡ふ数顆ゝある一顆の大さ胡桃の如ゝ、内ふ核ふく白肉あり、中畧 篤信曰今按ふ西土ふもあり、濱芭蕉とゝふ、紀州熊野ふ多し、甚ず雪寒と畏る、宅中ふ植ゝハ冬月藁ゝて厚く包ゝ或ハこゝと以ゝて おゝふゝ、ゝゝ、ゝゝ、ハ枯る、盆ふ植て屋下の暖き処ふおくゝ、海濱ふあゝてハ、潮風温ゝて雪早く消る故 ゝゝ、ゝ二種あり、一種ハ葉柔く薄く其莖の皮多く重まゝ、是一百重ゝゝとゝゝ、一種ハ葉つゝあつゝ、莖の皮重ゝらず

[万葉] 三熊野乃浦乃濱木綿百

重成心者雖思直ホ不相鴨人凡 滑稽雑談 此者
末俳書ホ載ど然ととのくども古奇ホ多くあらり、七花と
以て李ホ用ふ、

針蕈 和漢三才畠会 鼠茸ホ似て纖あり、
長さ二寸ばかり、灰白色平地ホ叢生

初茸 同上 浅山松樹の陰處ホ生、その狀松茸ホ似て
小く、初生より傘たりて、内ホ細き刻あり、内外
赤黄色、立秋の初ホ出づ、柔みして味
甘く、諸茸より先ホ出つ故ホ初茸歟、

白雁 白雁、全体白くして、
翅翮黑く、觜と脚と赤色、其肉脂少し、凡中秋白雁先
來て雁金ちなどホ次、真雁又ちなどホ次て遲し、春ハ真雁
先て歸り白

初鰍 和漢三才畠会 鮭ハ鯉の本字、
雁ちなどホ次ぐ、魚臭あり、正字未詳、狀鱒ホ
似て円く、肥大なるもの二三尺、細鱗青質赤章腹淡
白く肉赤し、細刺あり、脂多く味厚美、頭の枕骨軟
ふて瑪瑙の如し、氷頭と称ス、味亦佳〻 大和本草 本
邦東北州の大河ホ多し、南州ホハ稀なり、和名抄曰鮭
和名佐介俗鮭字 鮭の子〻 同上 其子二胞あり胞
と用ふ非なり、中數千粒明透上ホ一紅點あり、

鮞といふ又筋子
甘子と云ものあり、

放鳥 中の部八幡祭の条ホ詳ス

九月海廻 紀事 この月九日、小兒小石と以て海螺の殼
と穿ち、鉛と鎔して殼の内へ入れ、或ハ洲濱飴
と殼の内へ充て、其力と助け、各緒と以て海螺と纏
ひ勢ホ乘して臺中ホ投入れ運轉せしむ、その力つよ
きものハ其力弱きものを盆外ホ出し互ホ勝負と爭
ふ、これを海蠃擊といふ、席の両端と巻てこれを盆と
いふ、和漢三才畠会 いづれの時より始ることなるべし、田
夫野人の玩ぶ所なり、海螺の殼を用て、頭の尖りと碎
き平げ、尻の尖りと摩て凹め、糸鋸を巻て引てこれ
と席盆の中ホ舞ひ、二三の螺と以て勝負とをそ打出
さるる者と負とをその先ホ入るものを伊加といひ後ホ
入るものを乃宇といふ、もし〻打合て同く出るときハ
張とのふ張のときハ伊加と勝とす、

婆利女祭 九熊野よりいづる海螺厚く堅し、
廿日〇婆利女の社ハ洛陽高辻の北室町の西ホあ
て祭礼昔ハ七月なりしを中ごろより九月廿日とす、

雍州府志 繁昌の社、元針才女と祭る所やとて、實ハ舞才天なり、針才女と繁昌と、和語相近し、依て誤傳ふるなり、宇治拾遺 むかし出雲の前司てふ人のむすめ、此所にそうせしかるに葬てとさめんとて、鳥部山ふ具し行くに、その死骸かとの所ふ入りて後ハさらふ動うごかず、ものあらばせんこと有て、此所ふとどめ侍りしふその塚のもとに六七間ばかり人も住つゝ、荒地ゆえ有るを、後ふ何人ゆらん、社と建つらんと侍りし故有て辯才天と祭れり、

簠簋内傳 牛頭天王 娑竭羅龍王の三女と娶こゆり、その名を婆利女と云、○安藝嚴島の弁才天女、婆竭羅龍王の才三女なるよし、いひつたふ、ふたりの母ハ婆利女を弁天といふるもまこと故なれば、○大閤秀吉ものの社と東山佐女牛の八幡宮の傍ふうつしたるとぞ、其ざ出ずてをるとふ、ふるびかたの所ふ安置をとく、

花の弟

異名分類 花の才とふハかろく の花ふ おくれて咲ゆるふいふとぞ、夫木 ゆ草の をふのゆ〜とありぬとどハ重 時珍曰 榛 樹低く小ふして荆のごとく、みゆる赤〜萸、顯胎

蕤生て冬の末花とひらく、櫟の花の如く、條をふし下ふ垂る、長さ二三寸、二月葉と生ず、初生ハ櫻桃の葉ごとし、皺文多くありて、細き齒及ひ尖アあり、其實苞をふす、三五相粘、一の苞ふ一ツ實々として櫟の實の如く、下壯ふ上鋭し、生ハ青く熟まれば褐、其殼厚くして堅く、其仁白くして圓く大さ杏仁のごとし、亦皮ふ尖アつゝ、然ともゆ空るかの多し、故ふ諺ふ十榛九空、○その葉悉く皺む、依て和訓ハしばみ、実を以て秋季と

柞

くくせ 山木なり、高き者二三丈、葉ハ柏ふ似て秋紅葉し、冬落つ、城州柞の森名所なり、也、奈良の西南ふ祝園とふ所あり、城州の内し、元柞園し、後祝の字ふ改む、祝園の神社春日大明神、此神の森皆柞の木ふして秋甚と紅葉を、他邦ふも稀なる木なり、

番綿、番船

摂州大坂ふあり、江戸へ積出を綿、その廻船ふ一番二番三番ありて、江戸へ着岸の遲速と以て損益を定む、商賣專ら勝負を爭ふ、

初鴨

貞享式 此名ハ全く新撰なり、或ハ賞翫ことも加減ともいえん、今按ずふ

奉膳式ゐと雁鴨と並あげら、賞する処ハ秋冬の差別あり、さまざまども見聞の姿情と論ぜず、初雁といへハ風雅と思ひ、初鴨といへハ凡味と思ふ爰と天眼とも天耳ともいへ、譬バ初雁と音ふ喚とも凡味と先ふ思ふべき色、鴨の冬あるハ勿論ゆく、初の字をそ〳〵秋とあるを色ゑん、肌寒

秋声賦 其氣慓冽砭人肌骨

江次第 乞巧奠ふ御所うゝ箏一張を申下し、

七月

庭の立琴

東北西北の机上の妻ふ置く、註ふ延喜十五年の例和琴と用ふ、裏書ふ云柱と立るふ三様あり、常ふ半呂半律と用ふ、秋の調子あり、公事根源頭書半呂半律とハ、樂書ふ云黄鐘調大食調ハ律呂の調、半律の調也、夫木 あゐぐこのあふ夜の庭ふ初〳〵琴のあらふ引ハさゝふの糸寂蓮

新綿

藻塩草ふ ひゝとハ七月十六日あり、内裏の貢の綿あり、○俳諧ふ ふゆ〳〵とゝろ〳〵、ハ貢おもゝぎらざるバ作者ゆゝろ〳〵、

二百十日

正月の節立春の初日より〳〵て二百十日とゆふ此ゝろ秋の最中ゆて、金氣殺伐の氣憂動ゆる時、故ふ必風雨あり、此時節中稲の花盛ゆて、その花ゆゝこなゆゝんと、ゆゝを農民恐る、續猿蓑 翁草二百十日も恙ふ葛西

廿六夜待

江戸の俗今月廿六日の夜月の出ふ三尊佛の影向と拜むとて高輪ふ群集も、此夜蔭芝居手踊、或ハ音曲八人藝、うゝし繪等と仕組者あり、是と一夜藝者とゆ〳〵酒樽ふ月と待遊客是と招て與ゆゝ、又虫賣菓餡餅いろ〳〵の商人来て賑〳〵、土人幇間虎八云、土人廿六夜祭と称ス其由來を尋るふ審ふ〳〵ず、む〳〵近村の民、此處ゆ来て海岸ふ生ゆる菰と刈取圓座ゆゝて月のいづると待〳〵とゆゝ、今聖天棚ふ敷ゆる菰を敷物ふ賣ハその名残ゆる〳〵とゆゝ此外田安の臺、湯島の社地、群集をゆゝ、高輪の賑ハひふ及ゑど、

兼三秋物

似栃

御所栃ふ似て肥滿あゆゝ、味大ふ劣ゆゝ、

八月

庭たゝき

鶺鴒こせの部

濁酒

醪ハ汁滓の酒ゆゝ

和名毛呂美今俗濁酒とゆゝ、

九月

鬼箭

良安云衛矛和名久曽末由美

其業秋ゑ至て紅葉す、面色丹の如くゐして青赤相
襍錦の如し、故ふ俗錦木とりゝ、子と結ゞ一顆ふし
て尖ゝ小正りて紅ゐり、信州野州の山谷ふあり、

七月

星合、星の契

齋諧記 天の河の東ふ
織女あり、乃天帝の子
ゐり、機梭ふ労役して、容と理るふ遑あらず、天帝其
獨居と憐て、將ふ嫁せんとして、河西の牽牛と夫ふ
與ふ嫁して後竟ふ女工と廢て、天帝怒て責て河東
ふ歸らしめ、惟一年ふ一會せしむ、

星祭、星の手向

周處風土記 七月七日の
夜庭と洒掃して、露ふ几筵と施し、酒脯、時の果と設ゝ、
香粉と河鼓織女ふ散し、云〻注云二星辰会るふ
當て、夜と守る者皆私願と懐く、或云天漢の中と
見るふ爽爽る白氣あり、光曜五色あり、此とりて
徴應とて、見る者拜して願ふふ富と乞ひ、壽と乞ひ、
子ゐさい子と乞ふ、唯一と乞ふゆと得、兼求ることと得
ず、三年ふして是とりゝ、頗る其祚と受る者ゐり、○
牽牛、犬飼星、織女祭河鼓秋ゐり姫薫姫さゝぐふ姫、
百子姫、糸織姫、朝顔姫、梶の葉姫ともゝ妻、梶の葉、
天の川、秋去衣、石枕、九枝燈、庭の立琴、紅葉の帳、
火取香、願の糸、衣裳と曝て、芋の葉の露、素餅、銀
河、銀漢、雲漢、烏鵲の橋、紅葉の橋、年の渡、二星の屋形、
乞巧奠、乞巧針、乞巧瓜、七箇の池、百箇の池、妻迎舟、
妻ふし舟、七種の舟、以上各頭字の部ふ ちて註、

星のかし物

いの部衣裳と曝す

星合の濱

といへる条ふ注て、

増山の井 伊勢ふあ
て星の逢ふ所あり、

本願寺の籠花

七日 紀事 昨六日
の晩、東西の本願寺末流並家礼花數種と以て船の狀
と作て、又槽の形と作て中ふ草花數品と建て、御門主
ふ献ぜらるゝと堂上ふあらぐ、

盆市

草市 荷の葉賣
麻ゐら賣 盆太鼓賣
おく今日七諸人ゐれとゐる、

紀事 凡七月街市ふ太鼓團鼓、大小、加伊羅木、三灵手拭、
奇特頭巾、作鬚金銀箔の紋所ふと賣是盆踊必用
の具、又盆前截子燈籠、臺燈籠、金灯籠、草挑灯、
小行灯と賣是皆中元の夜点ずる所、又素麺、粟

乾瓢、茄子、角小豆、空閑梨、木酢柿、鼠尾草、荷の葉、麻がら、大小の土器、供饗膳、破子、うるけ木を賣是民間聖灵会

穂屋

みの部 御狩山

祭の條ふ出づ

鳳仙花

時珍曰其花ふの處用ゝ、頭翅尾足具まり翅然として鳳の形の如しゝ故ふ名く、二月子と下し五月再ひ植べし、苗の高さ三尺莖ふ紅白の二色あり、大指のごとゝ、中空あり て脆し、葉長くして尖つゝ桃柳の葉ふ似て鋸齒あり、桠の間ふ花とひらく、或ハ雜色亦變易して狀飛禽の如ゝ、夏の初より秋の尽まで開謝相続て実を結ず

木瓜の子

時珍曰其實小瓜の如くして臭あり津潤ふ味不木ふるゝものを木瓜と名て、臭ハ乃チ花の落ゝ處、臍蔕ふあらざ、木瓜灰ふ燒て池中ふ散ず以て魚ふ毒をべし、

和漢三才圖会 世ふ木瓜と称まるもの、本草の註ふ合ず是木桃ふして木瓜ふあらざ、武州江州より多くこれを出す、藥肆以木瓜ふ充近頃唐木瓜とふ者あり人其花を愛も是真の木瓜あらず

穂掛

藻塩草 田舍の稲のとり初め、新らき藁のすりめとふものを人て穂と組合せ、門戸ふと倉庫ふも掛て神ふ奉るを、ほのぼのとのふ、

灯

和漢三才圖会 酸將酒 五月小花を開く、純白其ふ赤白色ありて蒂ハ青ゝ、宿根より自ら出て小児中ふ白子を鑿去空殼ゝて、こゝを舌上ふ含て厭吹ゝ知ハ音あり、○今の世ふ女の童のわらづと吹ふ初花の巻、寛弘五年の所ふ御色白くうるはしうほづゑふとを吹ふらめて云々 源氏物語 野分の巻ふ引くづきとろいふめるゆふふらうあて云やうゝえて いとふるさく事ふあらゝと醒齊ふ、

南瓜

時珍曰南瓜の種、南蛮より出、三月種と下も、沙沃の地ふ宜し、四月苗を生ず蔓と引と甚ぐ繁し、一蔓十余丈延べ、節々ふ根ありて地ふ近て即着其莖中空其葉の狀蜀葵の如く大さ荷の葉の如し、八九月黄花とひらき西瓜の如し、皮の上ふ稜あり、甜瓜の如し、一本ふ數十顆と結ぶべし、其色或ハ緑、或ハ黄、或ハ紅あり、霜を經て收む、暖處ふ置けハ留て春ふ至るべゝ、○一種 南京瓜 一名東埔寨 一名唐茄子 本草南瓜の下ふ所謂 陰瓜

兼三秋物

鬼

是ほらいも形螺ふ似て大
く、螺芋 し、故ふ名つく、ほど鷸 志の部鳴の 星
条ふ出ル、

月夜 つくよ世已 闇ふ星の多くて明るき夜をいふ、
あり只秋季ふあり、東花式 古抄ハ星月夜の名と
あげて只秋ありとぞ云云 云捨て月ふ去嫌の論ふるまでも、
是ハ秋ふして月ふあらぬ、発句脇第三までふ此名目ある
ときハ其三句ハ素秋ゆゑ、七句目の月の座ふ他の季
ふして異名ともべし、こゝらハ例の埒ふ、ものこそまでハ故
翁芭蕉の遺訓ふ、

八月

譽田祭 十五日 河内國長野山護國寺地藏院
の縁起ふ云、當社ハ人皇十六代應神天皇の御陵ふ、
母后神功皇后の御胎内ふ宿り給て、三韓征伐の後、
筑前の國ふ於て降誕、御腕ふ靫の形ある故ふ誉田別
の皇子と号し奉る、是ふ矢の家と守ふあふぐ事、
此時ふ顕まて、治世四十一年仙齢百十一歳の春、大和
国豊浦の宮ふ崩ず、玉躰を瑪瑙の棺ふ納め、河内
国藻伏の岡ふ葬り奉る、三十代欽明天皇の勅ふよ
つて宝殿と營ム、三所の神明と祀る所謂中殿ハ八幡

大菩薩、左ハ仲哀天皇、右ハ神功皇后ふ、世ふ神祠多し
とへども當社ハ玉躰と納め奉るの霊廟ふて、八幡
宮の根源威験深きとも云へし、云云 ○神祭八月十五日
ふ、先ッ十四日の夜、奥の院の御廟前、本堂へ鳳輦と行幸
ふ、翌十五日午の刻還幸、舞樂あり、四月八日若宮祭
申楽、兒舞隔年ふ行ふ放生会ハ當社ふ云ふ
よし、但シ社 放生會 やの部八幡 の条ふ出ル、
説の趣と記ス、

肥前國長崎ふ於て、来舶人船神と祭る、八月廿二日これ
とほさまつりといふ、和漢三才画会 舟の神と媽祖娘々
といふ俗ふ云ふ、唐船長崎ふ来て、往々祭
る所の神是なり、舶中の品物を水揚 ○長崎ふ唐人寺
として四ヶ寺あり、福州ハ石灰町崇福寺、漳州ハ下筑後
町福濟寺、南京ハ寺町奥福寺、この三ヶ寺昔ハ唐僧
住て、今ハ看主持ふ、外ふ目付寺ふて筑後町ふ聖徳寺と
いふあり、昔より和僧持ふ、ほさ祭の日ハ和僧も唐僧
来て法事修行あり、本尊ハ観音なり、此日来舶人を
その寺院へ参詣ス、其異体をいんとそ、諸人群集ス、

り、四箇寺ニ

ふ黄蘂流ふり、**穂芒** 花芒 芒の穂と尾花といふこと 尾花 穂とふ〜こる形獣の尾ふ似こり、故ふ名く

まこと花芒ニもり、**牡丹の根分** 和漢三才畜会 夏月川の圮と採晒し

乾し、古き畑の土と細き沙と以上三品節和八九月紅き

芽と出ると移し栽べしこと培ふふ糞溺と用ふ

らゞ冬月油渣と用ひて少し根の傍ふ入ほう

ふ、或ハ鮮魚の洗ひ汁と灌ぐも亦佳ふり、**頬赤鳥**

正字未詳 和漢三才畜会 状雀より小く背の色も亦

雀のごゝ、其頬赤く胸白くして嶋鶉の文あり、声

青鷄ふ似て細く高し、

常ふ蒿間ふ棲む、**畫眉鳥** 同上 俗頬白鳥と

状ち鶯より大く、

灰赤色眉白く畫くが如し、頬亦白くして間黒し

背上ふ黒點あり、翅尾畧黒く、尾の両端ふ白毛あり、

頤微赤黄色臆下ふ赤き斑あり、其足赤黒く其声

四滑みして多く囀る、小鈴の音ある者其声と謂て

行鈴諸鈴

の名あり、

九月

星見草 菊の異名あり 藏玉 庭のせふさくてゝ

いろやほゝとぐさゆぐくぬ色ともぐ紀あぞこゝる清補○

異名ふちても星ふよせてよむあり 古今 ひさゝとの雲の

うゝふてゝる菊ハわろ 鴨上ア

ほゝ〜ゝぞたやまくれる、**鬼目** 家の垣根ふ自

然みと生ぜ、蔓草ゝ、葉朝顔ふ似て小白花と開き、秋

実と結ぶ、秋李ともるるハ其実と賞して、暮秋その

実甚ざ紅く、鴨好んてこと啄む依て名ふ、

○時珍曰白英ハ其花とりひ鬼目ハ其子の形象

子 校量類珠功徳經 諸陀羅尼及び仏名と念誦する

ものあり、木患子ハ千倍あり、浄土ふ生ぜんこと求め

ゞ、此珠と受よ、水精ハ百万倍あり、菩提子ハ無量倍ゝ

菩提 宝くせ記 昔洛東建仁寺の、千光国師宋ふ入此種と

得て帰朝し、筑前の香椎報恩寺ふ植らゝ〜ゝ

傳ふゝゝ、後其種と京師の寺々ふ傳てこと植、

泉涌寺六角堂叡山の西塔ふあり、宇治の興聖寺ふ

予こゝと見る、一樹ふ巣二色あり、一ッの巣ハ椋ゝ似て厚

く大く、又一ッの巣ハ木犀ふ似こり、其葉ふ莖ありて莖

より嫩まる細枝と出し、そゝふ花さき実と結ぶ、

其実淡黒堅硬〳〵て念珠〳〵て香氣芬芬〳〵、興聖寺の僧曰、是を經ふ說る菩提樹あり、天竺此樹下ふ於て佛成等正覚〳〵ふ人樹ふ〳〵、樹の高さ一丈ばかり、枝極のふり百日紅ふ似て甚だ奇樹〳〵

杜鵑草

大和本草 和品 葉ハ紫葶ふ似て短く小〳〵筋多し、又篠の葉ふ似〳〵、蕾ハ筆の如し、花秋開く六出あり、中より蘂出て又花の形とゑせり、蘂ごとふふ紫の點ありて、杜鵑の羽の形ふ似〳〵、ちゞり染のごゝ〳〵、莖の高さ一二尺ふもきぞ、

へ

兼三秋物

辨慶草

和漢三才畜会 景天和名以岐久佐俗ふいふ辨慶草、本綱ふ景天極めて種易し、枝を折て土中ふ植ゑ、澆灌旬日便チ生ずるゝ、二月苗と生ス、脆き莖微赤黄色と帶ふ、高さ一二尺、ちゞと折ハ汁あり、葉淡緑色ふて光沢あり、柔ふ厚く狀長き匙の頭及び胡豆の葉ふ似て尖り、夏ふ白花と開き実と結ふ連翹のごゝ〳〵て小く、中ふ黒子あり、粟粒の如し、人皆盆ふ盛て屋上ふ養ふとりふ火と辟べし、故ふ慎火草の名あり、按ずるふ景天佛甲草ふ似て大あり、こゝと折取て掖間ふ倒ふ懸ること日を經て凋まざ後地ふ栽るふ亦活ずるを馬歯莧ふ勝れり、蓋辨慶ハ源の義經の家臣ゝて、女童相傳へて强勢の士なりと、故ふ相比して名づく、以岐久佐も亦活の字訓り、

布瓜

時珍曰、六七月黄花をひらく、五出微胡瓜の花ふ似ゝ蕊辨具ふ黄あり、其瓜大さすべく、長さ一二尺甚しきハ三四尺、深緑色、皺の點あり、瓜頭龍の首の如し、嫩ふる時皮を去る、蔬ふ充老るときハ大さ杵のごゝ〳〵、

八月

紅蕈

和漢三才畜会 陰處ふ生ず、其緻紅色裏白く細き刻有て毒あり、

虵蕈

大毒あり、故ふ人近よらず、

虵

穴ふ入 月令 仲秋月雷始收声蟄虫扉戸〇和俗春の彼岸ふ出、秋の彼岸ふ入と云ふ、

七月

とゝ〳〵

妻

とゝ〳〵ハ之の字とよめり、稀少の義、

あゝこゝの稀ふとりき妻ゝ、故ふ織女年ふ一度まれふあゝとゝとり〳〵妻とよゝる哥あり、くゝと

環もぐて活法の書ふ、織女の異名のやうふ、出ずハうろし、かゝらぐ織女のけらひ有べ、年七渡織女の年ふ一度天の川を渡る意ゐり、万葉王、燈葛不絶物可良佐宿者年之渡尓直一夜耳、

籠 一切經音義 燈篭又爐ふ作る、火の居所ゑ允火と盛の器を爐といふ 紀事 凡中元燈篭を用ふるこ、寛喜前後ふ起て、今ふ至て相續て故事とそ定 家卿明月記 近年民間ふ長竿を建てその末梢ふ燈篭を設け、紙を貼し灯を擧て遠近ことりふことと見る、流星ふ似くゝう、五雜俎 宋の初ふ中元下元皆燈を張ることと上元の例の如し、太宗淳和年中始てこゝとやし、○本邦の俗、中元の夜家々燈を張て廿四日乃至晦日ふ至る或ハ朝日より三十日ふ至るもあり、又白き提灯を出そもあり、○高燈籠、折掛燈籠、花燈籠、禁裡御燈籠、キリコ燈籠、以上各頭字の部ふろちて註そ、舟燈籠、影燈籠、舞燈籠、揚燈籠、増山の井ふゝくり其形容未考、

燈籠踊 紀事 洛北岩倉、花園、両村少年の女子、各大灯籠を戴き、八幡の社前ゆ

聚りて、男子大鼓と撃笛と吹踊ともくむ、是を灯籠踊といふ、頭上ふ載く所の灯籠、踊る女子の家々、春の初よりこゝと作て、互ふ其作る所の模様と秘スル、

鳥居の火 せの部施火 燒の条註

鳥屋勝 鷹新毛と生じ羽翼全く備ゑ、鳥屋と出るの時、逸勢特ふ称そべ、これと鳥屋勝といふ、○去年よりハ一ゆまきりそる斤ゑり狩ゆくすゑの秋ぞ、こゝ、定家

蜻蛉 秋津虫 ゑりゑ ヤンマ

邦の形蜻蛉ふ似くゝと以て、秋津州と名づく、和名抄 蜻蛉和名加介呂布 和訓栞 うけろゑのあるゝ ふゝこゝとゝるハ蜻蛉とゝふ、中暑 水辺の木藝ふすゝてその飛良款々と水ふ点し、閃々と電のゆくゝゑれど、陽炎ふ比ていゝるゝり、和漢三才畜会 蜻蛉ハ總名ゑり、大ふて青色ふる者紺蠎、一名天雞、大ふして玄紺ゆゝれ胡黎一名江雞、小ふして黄ふる者馬大頭、最大ふして身緑色、赤卒ハ小ふし、て赤きものゆり、

富草の花 風俗哥 むらくふ あゝるとみくきの

そもてあつと入てゝ〻こへまるる

頼桐 大和本草 倭俗 唐桐といふ、高サ二三尺ゆすぎぞ、夏紅花をひらく、花繁多

ゆゝて盛り久し、美ゝて愛を愛し、

苞麻 已 く

らせと 和名唐荏、又からゞしハ、葉ハ大麻の如し、甚ぞ

大あり、夏冬の間花穂と抽て色黄ゝ、高さ丈余ゝ及

ぶ、實あり大

兼三秋物

番椒 天井守 和漢三才圖会

毒ありとぞ、

番ハ南蛮の義あり、俗ゝ云南蛮胡椒、今唐芥子、二月種

と下し、葉柳の如くゝて小、亦胡椒の木の葉ゝ似て和く

五月小白花をひらき、実と結ぶ、數品大小長短尖りくる

と円きとの種あり、初め青く熟もれハ紅あり、秀吉公

朝鮮と伐ときゝ、彼國より渡る故ゝ俗又高麗胡椒と

いふ、○天井守、番椒の一種、とぐく上とむく故ゝ名く

とぞ、

猿蓑 附 夕てんぐ

唐の芋

是を連禅紫芋と

まりいろゝ色つく、素

いふ、蘇恭曰毒少し、

煮て食ふべし、時珍曰連禅芋甚大ゝて

子少し、○茎紫色と帯ぶ味美く栗のごと、

烏芋

の

部祭山子

の条に出づ

八月

富賀岡八幡祭 十五日 名所記江

戸城南深川ゝあり、祭る所鶴が岡ゝ同じくといふ、別

當大栄山永代寺 台宗 深川寺一の大社、或ハハ神体

ハ菅公の作あり、源三位頼政深くこゝを崇む、其後

千葉家ゝ移り、足利高氏ゝ傳へ、基氏持氏ゝ至り、後

上杉ゝ傳へて、太田道灌ゝくこゝを信仰せ、横石集

寛永元年、長慈法印夢のことありて、永代島ゝ宮居

を建立し、同八年成就せ、○深川の土人本居神とす、

祭礼八月十五日放生会あり、二三十年ゝ一度三祭を行ふ、

豊浦祭 神社啓蒙 長門國豊浦郡亀山ゝあり、

祭る神、中ハ應神天皇左ハ神功皇后、右ハ

仲哀天皇あり、三十二社註式 人皇五十六代、清和天皇貞

觀元年、男山ゝ遷座の時行教和尚、宮を造てこれを

勸請せ、後土御門院文明年中建立せ、○今八月祭ゝ、

三月十四十五日の両日亀山祭あり、こゝを先帝祭といふ、

安德天皇の御祭礼あり、阿弥陀寺ゝ御陵あり、海辺

ゝ宮あり、この祭前後四日の間鳥飛ことを得ぞ、又平

家蟹赤間ヶ関の海辺ふ上る、常ハこのごとくなれ、是先帝の御祢月ゑと里民いへり、又九月十四日十五日、八幡春日社両社と祭る、國主より馬二疋と牽き競馬あり、是ハ幡祭也、

烏頭 藕須曰附子其苗高さ三四尺、莖四稜と作、葉艾ふ似て其花紫碧色、穂ゑ作て其実細小桑椹の如し、黒色本附子、一物と種成熟するふ至て四物あり、天雄 烏頭 側子 附子是ゑ

黄蜀葵 時珍曰、二月種ゑ下し、或ハ宿き子土ふかりて生ぜ、夏ふ至て始て長ぜ、葉の大さ苘麻の葉の如く、深緑色、岐子を開く、五の尖あり、人の爪形の如し、旁ふ小き尖あり、六月花を開く、大さ椀の如し、鵝黄色、紫心六瓣ゑ〜て側てり、且ふ開き午ふ収ゑ暮ふ落、亦呼て側金銭花とす、其莖長きもの六七尺、皮と剥ゑ繩索とあらべ〜、

木賊刈 南錫曰木賊苗の長さ尺ばかり、義生ゑ、根毎ふ一幹花も葉もあ〜、すゝふ節あり、色青く冬と凌て凋ぜ、四月ごまと採、○時珍曰木骨と治る者、是と用て磋擦ゑ以光浄あり、木の賊といふが如〜、

和漢三才畜会物ゑ磋

ゑ砥の如〜、故ふ砥草と称ゑ、○本邦秋月ごまを採る、

胡黄連 千振 和漢

三才畜会苗の高さ五六寸、一根ふ数莖、其莖細くして淡紫色、葉地膚草ふ似て小く、七月花とひらく、桔梗の花ふ似て小く黄色、○千振 大和本草 胡黄連ハ黄連ふ似て大ゑ、黄あらぎで味苦し、此草日本ふかりや未詳、千振とて、秋白花とひらき、葉細ふ味甚ぎ苦き小草山野ふあり、たゝやくとつふ、

酴醾酥 大和本草 酴醾花の條下ふ云、本邦のハ白花千葉菊の如〜、依て筑紫ふて菊ゑぐらとゆふ中花ゑハ黄色ふる者ありと、農政全書ふ記せり、故ふ黄色の酥と酴醾酥とゆふ、

唐黍 江戸の俗あ〜とゆふ 春の日 待意こゝぬ殿と唐黍ゑ〜ゑろさん 荷分

九月 杼の実 藕須曰三四月花をひらく黄色栗の花ふ似ゑ、実ハ栗より少く大ゑ、鮮ふ作て麻として、山羊の食す、実ハ栗より少く大ゑ、鮮ふ作て麻として、山羊の食ゑ、木ハ斑文あ〜て、諸の器ふつくり箱ゑも甚美ゑ、

木曽の山中に多し。是を麪ともいふ。其粉を熱湯にてこね調へ温飩のごとく棒に捲て温なる内に急にこれを伸べて冷れば堅く縮つて伸ず。其手廻し甚急なる故に俗諺に擀麪棒るといふは是なり。

罌子の桐實 〔大和本草〕荏桐とも油桐とも云、ダモと訓ずるは非なり。桐に似たり。其實大毒あり、食ふべからず。實に油多し。民用とたまく此油をぬりて青漆の如くまするの法あり。○時珍曰罌子桐の實と荏桐と名く。罌子は實の狀罌に似たるに因てなり。荏は其油荏の油に似たるなり。〔和漢三才圖会〕濃州江州多くこれを種油としぼりこれを販る。其功荏の油に同じ。煉成て漆に代ふ。桐油漆と名く。五色をぬるべし。常の漆は白色を塗ことあたはず。又松脂とくそへ船槽を塗るに水を漏さゞれば、とチヤンといふ。○年浪草に桐油、ダモ同物といへるは誤ろし

唐椋 無花果の異名也。いの部にあるべし

團栗 擀の子之數種あり、ドンクリは擀の一種、小楢といふ木の實也。椎に似て大なり。味澁く食ふべからず。楢の形狀なの部にあるべし。

ち

七月

中元 十五日 〔修行記〕七月中元は大慶の月、道書に云、七月中元の日、地官下て降り人間の善悪を定む。諸大聖普く宮中に詣、道士その日夜に於て經を誦し、十方の大聖むかへしく其篇を録し餓鬼囚徒をして解脱を得せしむ。〔五雜俎〕道經に正月望を以て上元とし、七月望を中元とし、十月望を下元とす。遂に三元三官大帝の称あり。是俗妄の甚しきなり。

地藏祭 廿四日 〔紀事〕洛外六所の地藏詣あり、加茂御泥池、山科、伏見鳥羽、桂、太秦これなり。一日に六所の行程十四里之、文德天皇仁壽二年、小野篁地藏の像六体を造て、木幡の法雲山大善寺に安置まし、故にこの所を六地藏村といふ。その後保元二年、平清盛六ヶ所に堂を造てこれをわかち置く。七月廿四日供養、西光法師これを與りて行ふ。今に至りて七月廿四日諸人六所に詣まうでこれを地藏祭といふ。洛下の兒童か又各香花と街衢の石地藏に供してこれを祭る。又今日六齋念佛の徒も又六所の堂に詣て、太鼓を撃鉦を鳴し以て踊念佛をなす。俗これを六斎太鼓と

称ス、洛東光福寺千葉寺の一流なり、

ちゝ虫 きちゝ〜もの異名 異名分類 ちゝつゞり〜夜ふく風やさむうなんすれどいやゝよわるる声なり、

兼三秋物 茅 ちゝや 大和 本草 白茅、本艸ニ蘓頌ガ云春茅ヲ生ズ針ノゴトシ、俗ニこもと茅針トいひ小児好テ食フ毒ナシ、血ヲ破シ血ヲ止む

九月 是ニ、

重陽 潛確類書 重陽ハ魏ノ文帝の鍾繇ニ與る書ニ歳往き月来て忽ち復九月九日、九ヲ陽數ニして日月並び應ズ、故ニ重陽トいフ、俗其名ヲ喜ンて長久ナランて宜シクんず、故ニ宴ヲして高会ニ享ス、

重陽宴 公事根源 九月九日ハ節日ニして侍臣ヲ菊の宴、行ハるゝこと、重陽の宴と申、九月九日ハ月と日と九陽の數ニ叶ふゆゑニ重陽トハいフなり、むかしハ天子南殿ニ出御ありて、節会行はるゝ、上達部、御子達より始て、其道のハかせ探韻給リ、文つくり文臺ニ向て講ぜらる、十月の旬のゝふわゝもげふも永魚ゝまゝニ例あり、又羣臣ニ菊酒ヲ賜フる大ゝハ五日の節会ニおなじ〜、御帳の左右ニ茱萸の袋とりけ、御前ニ菊瓶とあゝ、又茱萸の房ヲ折て頭ニ挿めば、悪氣をさるといふ、本文あり、下畧

千代見草 菊の異名あり、慈童八百余歳の後出て、彭祖と名ヲ替へて、長寿の術ヲ魏の文帝ニ傳へ奉リ、文帝百歳の寿と成るあり、和歌ニも菊ニ千とせの秋を詠ぜること珍しゝ、此意ニて名付侍るなり、

契草 菊花の異名ニ、藏王蓬萊國ニ兄弟あるもの世ニあるとびて、弟ハ筑紫ヘ行ル、さびしき名残を惜ミ別れ〻るとき、兄庭前の菊と、一本を二つニ分けて、意〜ゝえとりハさびしき此きくをとてあぐさむ〜〜ゝ、弟筑紫へもちつゝ下向して、此きくとうるるり、この菊二ニ分しまゝふかゝ枝ぞるアふ花咲〻るとなん、

りの調 索隱曰按ずるニ律十二あり、陽六を律ニして、黄鐘 大蔟 姑洗 蕤賓 夷則 無射 陰六を呂ニして、大呂 夾鐘 中呂 林鐘 南呂 應鐘是也、名づけて律ニ〇貞徳曰ゝちれ ちらべ 秋ニ ちるまで

兼三秋物 律

呂の声ハ春よゐるべき道理あるべ共、其さとゐるゐ〻ハ呂々雑わるゝ、

八月

龍膽 草

和漢三才圖会 其葉、笹の葉よ似て厚く、九月ハ花を開く、花柴ふ〜て鈴鐸の形のごと〜、上ふむく、花中ふ蕊子あり、又正白花の者あり、笹龍膽とゐづく、

八雲御抄 えやみ草 云〻云〻○思ひ草

八重垣 龍膽ごとのくまさ露くさとの八通具卿説 道のくの尾花がもとの思ひ草今さらふまで物とおもふ〜ん○くさふ 真淵翁云こハ木丹とをぶきて云字書ふ木丹ハ梔子の花也と出る是こ、源氏をとめの巻ふ四季といへるその夏の方ふ花橘撫子、さうびくさふおどゆりの花くさぐさうゑてとあり、是ゑれ夏こくさふハくちれ〜ゐるとゆらく〜、○尾花ゞゆとの思ひ草ハ龍膽と定家卿の御説なるをこゝ

ぐらく〜ゐ〜くゝにを龍膽と以るハ誤とゐるべ〜、

九月

鯉魚風 九月の風こ 李賀詩 門前流水汪陵道、鯉魚風起芙蓉老、

ぬ

兼三秋物 **零餘子** 野山菜 草蘚と蔓

草蘚の形状混雑〜て分別をゞ〜〜、草蘚亦零餘子あ〜て山菜のゞ〜、故ふ諸説草蘚と以山菜とゐ、山菜ハ其蔓紫色と帯ぶ其葉四く尖あり、其花白色穂とふ〜て下ゞ垂る、草蘚ハ其葉四くして尖り且稜あり、其蔓青色淡黄の小花とひらく、蘰て莢と結ぶ、三稜あり、山菜もまゝこ莢とむをぶ故ふ見易ゝらゞ、

九月

白膠木紅葉 時珍曰楠木、木の形椿のごと〜、五六月青黄色の穂とふす、一枝ふ累々ゝり、七月實と結ぶ鹽膚子と名付く、葉の上ふ虫あり、五倍子と結ぶ成ゝ、

八月

縷紅 蕊葉 如〜、蕊より蔓と出〜、八月小紅花とひらく、形丁子ふ似て長さ六七分の花あり、愛もべし、

瑠璃鳥 碧鳥俗 和漢三才圖会 云留里大さ雀のとくふ〜て、頭背翮上翠色頬頷臆下ふ至て純黒胸腹白く、觜脚尾具ふ蒼色、其声圓滑あ〜て清く囀る、

ね

七月

鬼の洞念佛 七日

滑稽雜談 洞ハ八瀬河の西の山中ゐあり、俗鬼のあで洞といふ、口狹く中闊し、高さ二丈許、深さ三丈、昔酒顛童子、此洞より丹波の大江山へ移るといふ、或る昔叡山ゐ一童あり、僧徒其美きを愛し、勸酒交歡の時時人と齧血ととり、酒ゐ和してことと飲む、一旦魅とゐて此洞ゐ入云云 此話羅山詩集酒顛童子の洞ゐ題すと、序ゐ見えたり、

雍州府志 毎年七月七日より十五日ゐ至る、村中の兒女、此洞ゐ聚まりて鉦と鳴らし、大ゐ弥陀の号を唱ふ云云と先祖祭といふ、

踊

書言故事 王子醇 ぐゝめ憑可と平らげ軍士ふたつへて訝鼓戲とゐし、遂ゐ世ゐ甚ごく行る、子醇西人と對陣せし時、軍士百余人ゐ命じて訝鼓とゐ、隊ゐ軍前ゐ出て、虜見て驚きこ愕く、遂ゐ云云と擊破る、注云訝鼓戲ハ、樂人雜劇とゐして跳躍とゐる、世人皆これゐ效ふ、○本朝の俗、七月十四日より晦日ゐ至て、毎夜大人小兒街頭ゐ踊とふを、○懸踊、念佛踊、題目踊、燈籠踊、伊勢踊、木曽踊、小町踊、七夕踊ゐあり、各其頭字の部ゐつもて註す、

折のけ燈籠

用捨箱 祭ゐむう用ひ、折のけ燈籠と江戸ゐハ絶えり、中略 續

虛栗 貞享四年 附句刻 親ハ鬼子ハ口とき蓑虫よ 其角 折りけるゝ月の文月 野馬中略 竹藪と折りけて、その侘垣よ もるゝと折りけ垣とふ、此燈籠と竹と折りけてつくる故の名ゐ、うつゝ抜ゐて、ハゐく家ゐ、そつくりとたゞ〳〵、よく竹とゐ〳〵ゐるゝ、ゐつと又名のごく折りけて上を、ゞく形のゐゐきてあり、一ッ一ッゐ異ゐ、ゐしとぞ、

麻柯の箸

聖灵祭ゐ供ふる箸と 續猿蓑 ゐ〳〵ゐ麻木の箸もとゐふゐ、惟然 ○時珍曰大麻其稭白うして稜あり、輕虛燭心ともべし、

送火

ひじの部迎へ火の条ゐ注を、

女郎花、荼花

和漢三才圖会 女陪之山麓ゐ生も高さ二三尺莖ゐ稜理あり、蒿の莖ゐ似て、枝兩々對生し、節の間ゐ葉と生じ、其葉三七反前故の葉ゐ似て細く長し、七月穗と生じ花とひらく、最細小正黃色愛もべし、本朝文粹ゐ源順の詩云、如蒸粟俗呼為女郎者是ゐ、隨て子と結ぶ、花白き者男倍之と名づく、

大和本草 敗醬 藻塩草ゐ白花あると俗ゐとゝへし

といへ又オホトチハ女郎花ハ似て花白きあり、とこと、をこなの花ともいへり、敗醤と名づけしハ、此花葉の臭醤の損じたるごとくなるゆへ也、今試るハ然ア、○此花と女子の艶姿ハとこへて讀て歌俳諧とも同じ、古今 名よめでゝとれるぞうぞとこちゝわれ物ちゝきと人ハうゝれ 僧正遍昭 續猿蓑 とゝろゝ〳〵 鵜坂の杖ハうゝぎ

馬莧 **荻** 荻の風 荻の声

大和本草 荻ハときゝゝ〳〵とゝゝ〳〵ゝ淀川其外處々ハ多く山野ハ多く水辺ハ生ず、中実ハよゝしけれ〳〵、少ハ其中ハ葦ハ葦とハ生じ似るもの也、水草ハ、○荻の葉ハ荒ハて音ハ荻の声

翁草 大和本草 麥門冬の一種也、葉ハ大葉の麥門冬ハ葉ハ暮春及び夏の初め純白あり、故ハ翁草といふ、後漸く青くなる、根ハ門冬あり、尤大葉麥門のごとくして異草ハ、滑稽雑談 按ずるハ、和名鈔ハ白頭翁ハ翁草と和らげあり、然ルごとく本草綱目と考ふるハ別種ハ、白頭翁ハ俗ハいハ猫草ハ畧似り、今云翁草ハ、あらず、翁草ハ初生の葉純白あり、秋月紫花とひらく、

穂の如し、猶考ハべし、又菊とも翁草とも、とりハ混ずべからず、九月の部ハ註ス、

弟切草 薬草 吉ゝ

和漢三才圖会 初生地膚子ハ秋ハ以り、両々相對し枝ハ極あり、莖葉ハ毛と按ずるハ汁あり、須臾ハ紫色ハ變ず、六七月小黄花をひらく、單五瓣ハて細き蕊あり、莢と結ぶ、三稜あり、中ハ細子あり、藥ハ用ハ、相傳ハ花山院の朝ハ鷹飼あり、晴頼と名づく、其業ハ精しと神ハ入鷹傷と被ハるこあるハ時ハ、葉と按ずてこれを傅るとき、愈効人草の名を乞ひ問ども秘して言ず、然ハ家弟密ハこれを露洩晴頼大ハ怒てこれを又傷ず、これとり鷹の良業とも、弟切草と名づく、○又藥師草と名づく、慈鎮和尚鷹百首 秋の野ハまこと白ハ青くそりハて鷹ハ、やさ〳〵えなら〳〵ん、

旋覆花 蘇頌曰二月以後苗を生ず、多く水の旁ハ近〳〵、長さ一二尺以来柳葉のごとく莖細し、六月花と開く、菊花の如し深黄色、七八月ハ及ぶ、

秋物

鬼芒 兼三 時珍曰葉茅のごとくして、長さ四五尺甚ず快利ハて、人と傷ること鋒刀の

如と

苧生の浦梨 苧生の浦伊勢あり、和哥ふとへの浦梨を云ふ

古今 とへのらふとへの浦梨をとへさもとへ問わくこゝろ、なりのみてもれらをとねこうらえん、

小田守、晩稲守 山田守 九田を守て稲を守る、人畜の傷殘を防ぐたゝめ、

八月尾花の粥 大内記田原康富日記 文安五年八月朔日甲 云云尾花の粥の事、その由来何事ふるや、自然見及ぶのよし問しめるあいまゞ見及ぶぞ、その子細をえらまれよ！ 返答〜畢る、云云 海人藻芥 八月朔日、小花の粥、内裏仙洞以下令用給、良藥、云云 彼粥調法、薄黒焼ヲ粥二入合也 後水尾院當時年中行事 八朔の条云、夕ゝの御いとひ、初献ふ、

鬼のおこ草 きのくと供云云 そへてとゞふのうゑ、

紫苑の事 紫苑の部らるべし、

白粉の花 正字未詳、春苗と生じ冬枯る、高さ二三尺、叢生して、巣淡青ふて柔く、白雞頭ふ似て微小く四〜、其花朝以後萎し夕陽ふ至て開く、深紅色五出、單巣ふて蕚の長さ一寸余、亦紅花の中ふ紅の蕚と出て、細く糸の如し、蕚の本ふ子と結ぶ、灰黑色、皺胡椒の如くふて中ふ白粉ふ、ふとと採て婦人の面ふ塗、光沢鉛粉ふ優ると、○中華の書ふ云ふ、外國の物ふ〜〜、大和本草ふ〜〜、

車前子 蘇頌圖経 春の初め苗と生ず、巣地ふ布く、匙の面の如し、年と累〜者長さ尺余、中ふ數莖と抽て長き穂と作し、鼠の尾のごと、花甚細密く、青色微赤き実と結ぶ、葶藶のごと、今人五月苗と採て七八月実と採、

滑稽雜談 此者苗或ハ花ごとに、古来より実と以て八月の部ふ載せり、故実ふ准べき、

尾花 ほの部穂芒の条ふ出ッ、

思草 その部龍膽の条ふ出べし、

黄蜀葵 ワウスケ ト呂二 名一物との部ふ出べし、

落穂 詩經 此有滯穂伊寡婦之利、注云滯ハ遺て穂ふ、寡婦ふ利ふ、穂わらしむ、寡婦ふ以て利ふ、と得るし、此豊成餘あふて尽く取らず、又鰥寡ふ、と共ふ、

ことと見えたり、列子 拾穂者行歌

落鮎 渋鮎 下簗

八月最長こ天ふ迫し此時鮎芥子の如き者腹ふ満其背淡斑の文と生ぜ刀刃の鏑くぐ如し故ふ鏑鰌といふ八九月湍の水草の間ふ子と生て後漂泊して流ふ隨ひ下て死そ是落鮎なり其下て落るものを待簗と横て以てこれを捕へ名づけて下簗と云へり九月より肉瘦て味甚劣る

九月

岡崎祭 十五 名勝

日或ハ東天王祭九月十五日洛東岡崎ふあり

十六日 志 九月十六日祭礼元元 紀事 東山岡崎正一位東天王祭神輿一基鮮ヒ本、けり、その内一本の鮮刎下ふ埴と以て鷹二連獵犬一疋と造て彩色を施そ是と犬鷹鮮といふ其傍ふ感神院の三字と彫刻そ蛭らくハ旧感神院の鮮ふ元元當社ハ聖護院の杜ふあり故有て吉田の地ふ移も然るふ同神社亦岡崎ふあり故ふ東西と以てこれとハ村人神宝と称してこれと崇む

豺祭獣 三月令 此記戌月之候祭獣者祭之於天戮禽者殺之食也

弟草、少女草 菊といふ ごとめ草同前 と藻塩草ふ見えり 古寄露ま

梅と花の兄といひ菊と花の弟といふ故ふ也 〇

でとむひおりく少女草あらき風ふも花ハまそ〻ぬ

公羽草 菊とも松ともいふ住吉の里ふ五位の松とて年ふ一度る松あり此松の神やあらけん後ふハ化して翁ふ成て住り常ふ心を傳て琴とをらべ又庭ふ菊とうゑて愛〻〻翁ゞ三の我庭ふきしの松蔭ものぞもむ翁ゞ草の花もさうあん〇此故事ふよりて松とも菊ともこゝふ翁草といふ〻

老母草の實 三四月一莖と抽で淡黄花と開く穂の如し其莖高らぬ隨て実と結ぶ生ハ青く熟すもバ真紅累々として天南星の実ふ似て可愛 三才圖会 万年青葉芭蕉ふ似て隆々として衰へず其多壽と以て万年青と名く 大和本草

落栗 唐ふハ一切祝儀ふ用るよ〻花鏡ふ〻えあり熟せんとして子出て其苞自ら裂けて地ふ墜る物是ふ

遅稲、晩稲 時珍

日稉稲早中晩の三収あり、六七月収る者を早稉と
も、八九月収る者を遅稉ともいふ、時珍
曰十月収る者を晩稉ともいふ、云云是晩稲なり、**落水**節環拾遺田のおもを
ハ所々稲を苅て後田ふ菜種を植るゝ故ふ
両作所といふ田の水を落をハ菜種を植る用意、**おもあ**
すゝくせ己 飲憩の木と旧事紀ふ載るゝ
是なり、秋甚紅葉を、立花を好む者秘蔵して
ゝ、**童相撲**扶桑畧記延喜元年七月廿八日丁丑、童相撲廿番を御覧、綾綺殿
よおいて此事あり、古今著聞集延長六年
七月六日童相撲廿番終りて舞を奏を、**兼三秋**

物

木綿取桃吹 和漢三才畜会其実桃の如
す、こゝを桃吹といふ、綿車を以て中の子を繰り去り、し四ツふ裂て中ふ白綿を出
竹を以て小弓を作り、弦を牽て綿を弾くそれを旨と

七月

早稲時珍曰、六七月収る
者を早稉と云食ふ

い
ふ、**若煙草**和漢三才畜会煙草 相思草 淡婆姑 淡苞菰 羅山文集佗波古
希施婁、皆番語也、云云按ずるふ天正年中、南蛮の商
船始て此種を貢も、以長崎の東の土山ふ植、二月種を
下も、五月移し植、新芽を摘去り虫を除くを、毎日
怠るべからず、高さ三四尺、葉商薩ふ似て長大、七八月
葉を采り、藁莚を覆てこゝとをねさし、盒一宿して取
出し、一葉をふ繩ふ編み、編るゝごとふして晒し乾し、
一夜露宿して、後晒し乾を、黄赤色となる、
敷を擴けこゝを収む、云云若煙草是なり、**八月**

楓菌和漢三才畜会これ
とゝつぐ笑ひて歩ず、**渡鳥**此月諸鳥異国
より群飛して、
山林江湖ふ来る、
是を渡鳥といふ、**九月**

度會新嘗會外宮
十六日、内宮より初稲を伊勢両宮へ奉らせ給
宮十七日 ふゝ大嘗会といふ、即位の後日本國中
の神々へ御饌を奉らせ給ふといふ、**吾亦紅**陶弘
新米を奉る故ふ早稲米の御粥云云

景曰地榆其花子紫黑色、鼓の如し、故ふ又玉鼓と名く云云是花暈ふいふワレモカウ、本名玉鼓一名地榆比叡山鞍馬及び近道ふ生ず、宿根より二月苗を生じ初生地ふもく、独茎直上、高さ三四尺、對し分て葉を出て、榆の葉ふ似て稍狹く、細長くして鋸の齒の狀ふ似て青色、七月花をひらく、椹子の如くふて紫黑色、

か

七月

梶の葉姫

棚機七姫の内ふり

異名分類 梶の葉姫

八八雲御抄ふ梶の葉ふをの書も皆由緒あり、云云溪雲問答ふ芋の葉の露と硯の水とゝ梶の葉七枚ふ歌一首づゝ書よゝとそゝ、是等ふよりて、梶七葉皆二星と祭る具、專要の物と以名付とゝ、

年浪草 和俗七月六日、市中ふ穀の葉を賣、明夜詩哥と書て以て二星ふ供する所あり、又短冊ふ楸の葉と用て詩歌と書く、

和漢三才圖会 和名加知 俗云加宇曽 按ずるゝ楮の皮今多く紙ふ造る、又布ふ織、往昔木綿と称さ、今も亦祭祀の人木綿繼ふ被る、上古の衣服ふ象る歟、今二星ふ供する時、詩哥と穀の葉ふ、ゝて、牛女神と祭るの故ふ、木綿の義ふ象る、○菅章長 高辻家 朗詠抄ニ曰、昔余吾の海ふ天人下て、羽衣を獵師ふ盗まれ、心あらぬ獵師の妻となり、年月を經て羽衣を取得ゝ天上し、再び人界ふ下りて獵師と共ふ天上を、女ハ織女となり、男ハ牽牛となる、其再び天へ上るの時、梶の木の上より糸をゝろし、是ふ取付て登る故ふ二星の手向ふ梶の葉と用ひ、願ひの糸ゝて五色の糸と用ふと、云云 畧ゝて爰ふ記、此事淡海志ゝ云云、

梶の鞠

あの部飛鳥井

鞠の糸ふ出つ

河鼓

ゝの部二星

の条ふ出つ

烏鵲橋

藻塩草 鵜鷺記ニ云史記ふ云瓊ふ夫婦あり、夫ゝ遊子といひ、婦と伯陽といふ、偕老と契て、子ハ二八の候陽ハ三四の旬也と、云云 此文のごとゝハ、遊子十六歳伯陽十二歳より夫婦となる、至ふ志切ゝ、共ふ月と愛まるゝと限りなゝ、夕ふハ月の出るゝを待て里ふ行、曉ハ月の入るゝを惜ゝて高峯ふ上る、伯陽九十九ゝて死ゝ、遊子深く歎て月と形見とゝるほどふ、或夜伯陽鵜ふ来て空と飛やゝくるゝぞ、遊子殊ふ歎きて百三歳ふて

死せり天の星とあらて烏ふ乗て天と飛行て銀河ふ望て川と隔てさりさまでも帝釈毎日此河おこ水とあび給ふ故ふ水けゞを有て渡ることを許さるまで然りしかゝども七月七日ふハ帝釈善法堂へ御参りその日あれハ水とあび給ふ一日一夜あり此とき烏と鵲と羽とあらゞ橋こして彦星織女と通ずと是と鵲のそしりといふあり云云

大和本草

鵲ハ畿内東北の國ふこゝもあり筑紫ふ多し朝鮮より来つるあり高麗烏と云鳶より小く つゞみより大し門羽ふ黒白あり尾長し本草ふ載さる鵲ふ似合り、

茶 せの部 摂待 **懸躍** 紀事 十四日より晦日ふ至て夜ふ入大人小兒街頭ふ躍の条ふ注せ、て催し或ハ又各同列こして相知處の家ふ至て大ふ踊躍とす是を懸踊とハ掛らるゝ所の家再ひ踊躍を催して是ふ酬ゆ、是を返しと称ス、

蜻蛉 うの条ふ注す **螳螂** いぼうり 鎌切同物 こいの部 **柏ちる** 御傘 柏ちるハ夏あり、無言抄ふ秋と有を辟事のかゝりの常なるべし、

盤木の散ハ夏ふ中略今此國の人の申柏ハ初秋ふ紅葉してちるあるといへり此注ふつきて無言抄ふ云ふこと

つとしるべし、

増山井 夏の部ふ貞徳説夏あり又一説秋ふ、

貞享式 此柏ハ御傘ふ説ありて論語の松柏と譬へ

とし畢竟ハ雑しあせれとも爰ふハ散字と結ひて決て秋と定へきこと下略

兼三秋物 **桂** 葉雑頭 時珍曰雁来紅 茎葉

男 とこつの部月の桂と いへる條ふ出づ、

鴈来紅 穂子ともふ雑冠と同し其巣九月鮮紅こること望よ花のごとし故ふ名く呉人呼て老少年とも一種六月巣紅の者あり十様錦とあづく、○雞頭や雁のくる時猶赤し 芭蕉

増山の井 雁来紅一説ハ山の花云云 枕草紙ふ山の花

雁の来と書といへり云云

栃 時珍曰栃高樹大巣圓はて光沢あり、四月花をひらき黄白色實と結ぶ青緑色八九月熟す○烘栃、酥栃、白栃、胡桃栃、樹練栃、木淡栃、似栃、伽羅栃、円座栃、筆栃、田舎栃、君遷栃、樽栃、椿栃、

栃餻 藏器曰栃餻苗栃米粉を和しこ糊

蒸て小兒ゑ與ふ食しうじて下痢下血と止む、

案山子

彈鳥却　和漢三才圖會　僧都添水　会藝類聚

云古者三皇の世ハ人死して未棺槨殯葬ゆらざ畏ふ白茅と以しこ土と中野ゑ投も孝子其禽獸の食ふと視るふ忍びず彈と作りて是と守り鳥獸の害と絶つ按ずるふ俗ふ案山子今田圃の中ふ草偶ふ弓と持せ以鳥雀と防ぐ備中國湯川寺玄賓僧都迹と民間の奴ふ晦まして田ふ入稻と護りて鳥雀と驚ろかして勢ともに今ふ至て鳥雀と懼ち芻靈と僧都ともそ

[續古今] 山田守僧都の身をそうまし秋案山子ありとそう鹿ぶしるべし　玄賓

[和訓栞] 傳燈録ふ云る是ふ信野ふて節分の夜いとり豆らとさすと焼ぶしとふ焼ぶしの義ハ埃裏抄ふ炙串と名くとゝえそうぶしと焚ハ爲懸の畏ると傳ふる意ちゆうと

[增山の井] そらづハ添水と書て水辺ふちろけて水のちらと添て音と出を鹿おどしくゆ畏かしとそらづハ別の物あれども玄賓の山田守そらづと僧都ふそうてよく給

る故ふ鳥おどしの人形と心得て吉哥ふをとゝめるとゝ多し然るとも実ハ別の物ゑ

[石川丈山覆醬集] 竹筩尺餘上短く下脩し桔槔ふ駕方て首と下流ふ矯さ以て故尾尻石と載く旋轉俯仰我巨々の声と発揮ゑ

[蓮心院云我巨巨] 竹筒の雷声声韻九ゆらびゆらまし

鎌帛

[元元] 是添水ゆう

[貞恒秘藏抄] 家の中ふ鎌とらふ物と立て又それゑ鍬とい物と立てて菅笠をきせて立るとハ鹿の田とゑまぬとゝえれと鎌帛とい歌ふ我宿のうゆめ立るちゆうふやわふ

山田ふ鹿のかちゆゑ

鹿火屋

[年山紀聞] 説々あるとゝ山田ゑ猪鹿の

つく所ふ小き家と作りて壁塊何くもとの嗅きものふ火とくゆし烟とそて鹿とやらひやると心得べし或ハ香火屋又置蚊火もゝ字とりて書る所もあるふよりてまゝ人もあるとゝ用ふべらず又火の字濁りてもよりて顕昭ゑ飼屋の説ゑ迷ふべ〳〵し

[五云] かせぎ

鹿の異名ゑ

[玉巢] 山ふ遠ざるほどでちゆうゝとゝとあくとゝえつるハうもぎのちゆうたてるゝ

[赤染家集] 朝ぼらゆ

肩拔鹿

匡房卿哥 かぐ山のそらづかゝ下ふら

とけて肩めく鹿ハ妻こハるをて、日事紀ニ云復命中臣祖天兒屋根命忌部祖天太玉命内抜天香久山之真壮鹿之肩而取天香久山之波波加而令占矣、古事記の説ニもこれをおもひ、神代ハ鹿の肩骨を接てうらなひ、そ、かの木ハ和名抄ニ云櫻桃和名波々加一名尔波佐久良　延喜式ニ云九年中御ト料波々加木皮ハ大和国有封の社ふ仰て採てこれを進らしむ、

片鶏

夫婦相そなぶ離れて居るといふ、

駒鶏

藻塩草鷹狩ニ云ハ馬上ニて鷹を居てうつ立て鳥ふ合するといふ、

八月

菅大臣祭

十六日　雍州府志京四条の南綾の小路西洞院の東ふあり、南北道を隔て是菅公の宅地、その内北ふ菅神の祭あり、是菅神降誕の地ニ故ふ社を建てこれを祭る、神社啓蒙或人云此所昔菅家の舘ニ一夜飛梅の天神ニ成ハ是ニ今ふ飛梅の跡この地ふ存も、又説ふ文子の宅ニて菅神をゞめて迁座の地ニ洛の人阿米神と称も、例祭八月十六日、社辺の氏子是を祭る、神輿一基、童子素袍供奉、社僧ニ〻ふ、

亀戸天神祭

廿四日○江戸本所の末亀戸村ふ建立ニて祭る所筑紫太宰府の神祭礼八月廿四日、本所牛の御前ニ隔年ニ当社の神宝天国の剣ニ成あり、この外後水尾院の宸筆安樂寺の石碑、もみちの文臺大閤秀吉公の文臺ニ連歌の師昭巴ふ送ル紅葉の蒔絵有等神庫ふ藏、祭の日奉幣、貝割菜まの部間引菜の条出、神楽ふ、ハ、近来正祭ふ、

茆萱

大和本草霜草莖葉節穂皆葦の如くして小ニ宿根より春苗を生ず、葉ふ青白のこて筋多くまゞ、て本末ふ通ず、四五月穂を生ず、中華の書ふいまゞ見ず、葦茅の類ニカルカヤともいふ、新撰本草荒地ふ多く岡辺ふ茂るかるかやの上葉の露ハまゞこれなり、衣笠内大臣○萬葉集ふ茆萱とあるハ後世の二種の茆萱ふあらず、秋茆ふうる萱といふ、萱川、萱菅、和訓栞ふ雀麥ニとあるハ誤り、

萱の軒端

倭名抄茅和名萱加夜大和本草芒スキ長短一種あり、短き者をカヤといふ、

御傘草 萱草、萱草、軒端植物よあらぢ、秋ふもふるまでき道理ふぐらかゆうの名草ハ秋の季大切ふる故ふ用ふぐふきくさ

くさせる 御傘編集の時、事甚ご無数よつて、如此了簡多し、屋根ふ葺て何十年ふふるもの秋季植物ふハ用ひ〻ゝし、宜しうらざる式ふりしぞ、蕉門の徒ハそとと用ふべらぐ

桂の花 木犀

南方草木状 江南の桂、八九月花をひらく、子ふ〻此木犀ふり、

本草綱目 菌桂 嶽桂の二種あり、菌桂ハ葉枝の葉の如くふして尖り狹く光沢あり、三縱の文あり、鋸齒ハ其花ハ黄あり、白ハつと、嶽桂ハ其葉ふ鋸齒あり、枇杷の葉の如くふして粗濫める者、俗呼て木犀 蘊須

薰草 日薰

〇木犀の花、香気高く人をして醉ふ、草ハ葉竹ふ似て細く薄し、亦田小ふ、荆襄の人煮て黄色と深ふ、極て鮮好ふ、和漢三才圖会 多く越前ふ出を、以て染家必用の物ふ、按ずるふ倭の薰草竹の葉ふ似ぐ芒の類ふ、江湖大浦の辺山中最も多し、

老鴉瓜 王章

〇時珍曰王瓜一名土瓜、其根土氣と作し、其實瓜ふ似ゝ、故ふ土瓜と名く、上の字、何の義とふ、ふとをらぢ、瓜雹子ふ似て熟するときハ色赤し、鴉喜こゝを食ふ故ふ俗ふ雹老鴉瓜と名く、三月苗を生し、其蔓鬚多し、其葉山くして馬の蹄のごゝ、六七月五出の小き黄花をひらき簇ふ成ふ子と結ぶ、累々ゝり、熟するときハ紅黄の二色あり、

天和本草 其実まるゝ長し、王章と云王瓜の実ハ丈ふむすぐるふ似ふり、故ふ王章といふ、

籬豆 本草を考ふるふ、人家の籬垣の側ふ三月種と下す、其生ゝて延纏ひて籬ふ蔽ふ故ふ沿籬豆ふ名く、又和俗破墻豆ふ、此豆一粒を植ゑハ豆八升を得ると、破墻と八升と音近し、故ふいふ、

芥菜蒔 時珍曰芥數種ふて、皆八九月ふ種と下す、

鴈 月令 仲秋月鴻雁来賓〇時珍曰雁の狀も、鵝ふ似て亦蒼白の三色あり、今人白くして小ふ、ものと以て雁とす、大ふるものと鴻とす、蒼き者を野鵝とす、雁ふ四德あり、飛ときこ序あり、前ふ鳴こ後ふ和ふ、其禮也、寒きときハ北ふり南の衡陽ふ止る、熱きときハ南ふり雁門ふ帰る、其信也、偶ご失ひて再

び配ずも、其節也、夜群宿して一奴巡驚まと畫、蘆と
啣て繒繳を避く、其智多り、捕る者こもと拳て媒とし
て、以其類と誘ふ是一愚と、南ふ来る時、瘠痩て食ふ
べ〻も、北ふむ〻ふ時肥故よ〻もと取べし、白雁、鴻
鴈、海雁、たのむの雁、代つる雁、季鳥、以上頭字の
部ふ〻ちて注す、○ちらはぐらと、一種あり、目ち黄
ゆ〻して其外ハ雁の如し、○

雁の書

漢書 前漢の蘇武字ハ子卿杜陵の人武帝の時節と持て匈奴ふ使て單于こもと降
さんと欲し武と幽し大窖の中ふ置漢武と求し匈奴詭
て言武死もと常惠漢の使者ふ教ていそ〻む天子上林
中ふ射て雁と得さり足ふ帛書と係く武其澤中ふ在り
と是ふ由て還ること得さり、古今 秋風ふ初り〻るそ
きこゆるたゞ玉つさをうけてきけらん 友則 曠野落
著ふ荷分う文や

雁陣

本朝無題詩 雁陣數行
天川雁 其角 微月冷虹橋一道遠天晴
茂 和漢三才圖会 所謂雁金と雁之鳴也

雁金

明 万菓集ふ多く此三字と用ふ然ども又雁

鳴者今者来鳴沼と詠ずるこきハ自ら雁の名こなるふ
ふ似ゝもし遂う雁金の二字と用ひて本意と失ふ云

雁字

山谷詩云雁字一行書絳霄 談林 ゆし
泓発句 阿蘭陀の文字う横ふふ天つ雁

擅

鳥

和漢三才圖会 好て擅樹ふ棲む故俗呼て擅鳥
とい又懸巣鳥と名く形鳩より小さく頭背腹
共ふ灰赤色眼の辺ふ白色あり翮灰黒其小羽ふ青黄
の斑あり啄二寸許稜ありて黒色脛亦黒し能鳴て諸
鳥の声と為ふ又人の言と為す商家除夜
元旦ふ炙て食ふ以て借て取の義と祝ふ

河鹿

俳諧 歳時記 蛙ゝ好ゝて山川ふあり夏の季ふ秋ふ至り
て鳴哥ふかゞとのゝよゝこて加ゝくゝい詠せず俗傳
ふ西行ふ哥ありといふものハ臆説ありて考ふる所
あゝ、その声鹿ふ似ゝもゝ、俗呼て河鹿と言ふ、

鰍

同書云正字ハ黄頷魚杜父魚の舊ゝ水底ふありて鳴魚
あり故ふ此魚と誤ゝて河鹿と称も諸國ふあり、伊豫
越前越後加賀近江山城ふ多しその土地ふよりて
名もうつり形も声も大同小異ゝ石伏 コリ 石ゝヒ 石ミチ

又川オユビ伏見クチナハドンヨ伊与ニル峩ムコ近江アラレ魚節

この外おも猶あり、近ごろ山海名産図会てハ昔よ委しく論じ、まいらふ畧記ま、、青藍云ふ焦門の先哲のよめるこのしうハ蛙ふあ、ま蝦蟇あやまりてきさうなこめる鯖

嵐葉

九月

桂の宮相撲

八日 拾芥抄 六條の北西洞院の西九月八日桂の宮相撲 今昔物語 天暦の御時ふ震旦より渡ア、僧長秀こふんいハく元医師ふあんあり久る桂の宮の前ふ大ある桂の木あり久ハ桂の宮とこそ人いハく長秀唐の桂心ふまゝ、わりといふ 雍州府志 桂の宮一町ニ天○神社

十五日○神社江戸湯島ふあり、祭る所第宅詩ふ云、

神田明神祭

の神二座 神社啓蒙 大己貴尊鎮座ましまし、将門の社ハ本殿と去ること百歩ばかりなり、○大己貴尊ハ人王四十五代聖武天皇天平二年鎮座ゝ将門の霊ハ六十一代朱雀帝天慶三庚子年二月十四日、将門滅亡ましまし、その後怨霊ふ祟あるふ依て延久のころ一遍上人三世真教坊、将門の霊を以て神田の神社ふ合せ祭る當社をもハ今の神田橋の邊ふあり、此所いやゝ芝崎村ゝ今ハ至てゝく祭礼の日、神輿とゞまらく此所ふ留めて奉幣ありく祭礼九月十五日、糀町山王と隔年ゝ神輿二基、引山三十六本、踊屋臺太神楽ふ云ふ従ふこの祭の練物ハ、頼光大江山入の形状を摸して、三間余の鬼神の頭を造て臺ふのせて数人ことゝ荷ふ、引山の外今ハ見られる神事ふ顔るの町内神田、外神田、大傳馬町、濱町辺、日本橋通り町、前後都合三十六町ゝ神幸の町々ハ夜宮より桟鋪を構へ種々の提灯と出して甚賑へり、神輿渡御の町ハ本社より鎌倉町通り、飯田町より田安御門ふ入 上覧所前、常盤橋十軒店通り、筋違御門と過て本社へ還御ゝ大抵祭式山王祭ふ同じくハ神事能あり、今ハなし、

神主芝崎大隅守社家五人巫女ふあり、

上難波祭

廿一日○摂刀西成郡大坂博労町ふあり、祭る神三座、才一稲荷倉稲魂神第二祇園素盞嗚尊才三平野仁徳天皇後三条院延久三年勅請、俗ふ仁徳天皇の祭とい、毎年九月廿一日神事神湯ふあり、氏子醴と醸して互ふ相贈る、社説ふ仁徳帝の社ハ元大江橋の東上

町の内ふあり、是ハ皇居の跡あり、秀吉公の時上難波ふ迄も、桂川の御祓の部野の宮の別と云へる条ハ注も、かんらよもぎ

天和本草 順ハ和名抄ハかからよもぎと訓ず、但野菊なるべし、かさみ草 菊の異名なり、

和名抄 菊 和名加波良乎茂木又云加波良佐波岐

藏王 めうとせぎいつとこまくのうさこ草なるこしも秋とおもひ名残ハ此菊ハ奥州新妻の里ふあり、因縁無常ふ新妻と云へる物語ふあり、業平作、是ハきくとこいふふつきて秋ハ入らぬくゝ、彼物語ハ十月十五日とあり、然るゝ時珍曰、其木文木と名づく、斐然として章米なり、

榧 故ハこれを榧と云ふ、信州玉山懸の者と佳とハ中畧按ずるふ、羅願尔雅翼云、柀ハ杉ふ似て杉ふ異ふ柀ハ美しき實ありて木ふ文采あり、其木桐ハ似て葉杉ふ似ゝり、絶て長ず難し、木牝牡あり、牡ハ華き牝ハ實るふり、棗のごゝ、其枝長くして檝櫓のごゝ、枝ふ尖る者あり、尖らぬものあり、稜ふくして殼薄し、黄白色、其仁生ハて食ふべし、亦焙て収ひへし、一樹数十解ふ下らず 大和本草 其木屑と焼ば蚊退くカヤリの木ハリの字を畧せり、

櫧の實 時珍曰三四月白花を開き、穂をなして、栗の花のごとし、実と結ぶ大サ瓣の子の如し、小苞あり、霜の後苞さけて子墜

雞冠木 和漢三才圖会 本草綱目ハ案ずるふ枫ハ岐あり、三角をなして、霜の後枫の花ハ白色、実大ハて鴨の卵のごゝ、雞冠木の花実と迥ふ異ふ、猶朝鮮の松の子大ハて常ふ異ふるが如し、雞冠木ハ數種あり、高き者二三丈、葉尖ハて岐あり、蝦蟇の手の如し、大低七八岐或ハ九岐、又十三葉の者あり、三月嫩葉紅色なり、満山ふ映ず、五六月青葉ふ復て深秋其葉黄ゝ落つ、歳ゝ經るものハ五月小黄花とひらく、狀飛蛾のごゝ、梢頭ふ実と結ぶ中の子牛房子のごゝ、和州竜田、雍州高雄山最多くこれあり、秋ふ至て葉丹く赫耀ゝ、天下これと賞美ず、凡草木秋紅葉なる者多くあり、蝦手の樹の葉勝ゝ、故ふ只紅葉と称ずるハ即蝦手

の葉あり、**柳紅葉** 八雲御抄 紅葉に詠る木、柳 是柳紅葉あり、一説に実の赤きを柳もぐとしるべし、夫木 秋くれば山の木の川葉のいろふかん園生の柳はもぐちふけり 為家

の紅葉 紅葉の川水まうるとぞ、又うきて流るゝともいふ、**枯草** 枯野枯草八冬にもれども、露とむすびて八秋なり、

よ

九月

淀祭 神社啓蒙 伊勢向の神社八山城國紀伊郡淀の駅小橋の東河中にあり、祭る所の神一座、天逆向津姫尊 宝基文図に云 天照太神なり 石清水社家説 八幡迂幸の縁にて、伊勢向と号し、こゝに祠を、○一説に淀姫の社、祭る所今三座、淀姫の神、千観内供の夷神、天神以上三座、傳云千観法師、肥前国佐賀郡淀姫の神とこの地に勸請を、淀姫の明神八八幡宗苗の叔母、神功皇后の御妹ト云、紀事 淀大荒木の社、祭て廿二日、或八淀水垂淀姫大明神の祭廿三日、何れも是なるや、土人云淀祭と称する者是なり是淀の鎮守と、神輿一基、淀の堤路狭く、神輿還幸の時行列と立ぶくしよりて跡を先へ振ひそりて同じ堤と帰るなり、故に跡を先とし此祭とりおこなひ、

齢草 ちの部千代見 草の条に出、**夜寒** 御歌 夜寒秋に寒き夜夜と寒く夜の寒き皆冬に、

七月

織女祭 牽牛 或書に云牛女の天河に會ことハ此流俗の雑書に出てこれを経史に尋るに未典據なることあらぐ、詩經に皖彼牽牛 跂彼織女とあるを説者以為二星名あるて實に夏小正に言ふ七月初昏織女正向東十月織女正向北 五雑組 牛女の事齊諧に始り、武丁の妄言に成て、博物志に成る、槎に乗の浪説千歳の下に婦人女子傳て口實とまること可ふり、文人墨士乃習て常語とす、天上の列宿をて横に汚蔑と被らしむ亦怪しきの甚しきふあらぐや、云云然ともに詩哥連俳の道、浪説とのべども用ひぬべ有べらべ、**薫姫** 織女の異名ふり 異名分類 公事根源に乞巧奠に机の上に火をともふ、**短冊竹賣** 七月六日市中穀の

葉とうる、明夜詩奇と書て二星ゐ供ゑ、或ハ短尺ゑ掛の葉と用ひて詩奇と書て、今ハ民間の兒女、五色の紙と剪て短冊とし、ともふ古奇と書、さゝれ葉ゐ結ひ高く屋上ゐ出すこゑ竹竿の五絲糸ゐ換るもの、昨今市中短冊竹賣多し、又近来

七夕踊

小町踊 還魂紙料

正保の頃

五色の短冊紙を賣ひゑ

の画巻ゑ、七夕踊の畫と載せる、其詞書ニ云さてこと七月七日ハ中略乞巧奠とて、人々なゑ今宵ハ七夕祭をするもなるまゝの〳〵こゝろ七ツ八ツ〳〵くゝ出ゑ太鼓と手毎ゑ持つゑ、面白くゝゝゑ踊まゝるゆゝ、これ是七夕とゆゝ云七夕踊と別ゑあるゐ、ゆゝらゑゐ小女の人情ゐ盆とまちゝ絵で、七夕よりとゝる故の名あゝ〳〵愚案問答ニ云享保十七年著七月七日七夕と祭る中略面白く歌とゝゝひ、大内ゝと町ゝと小路〳〵友達のゝこへゆ紀踊とかけたり、むゝより小町とゝむゝ、人毎ゐ美人のゆゝゐ思ひ名けて、小町踊と名付ゝり云云○七夕踊と小町踊も〳〵ひ〳〵〳〵小街踊といへる説をわろし、

題目踊

洛北修学寺村の老嫗法華の題目を唱へ踊とゐゝ、是と題目踊と云松崎ゐ同、

高燈籠

用捨箱 昔々物語新見翁著ゐ昔ハ死去して其年より、七月高燈籠とゝゐものとゝゐる七回忌まてとつるもあり、立ゆゝハ六月晦日長さ五六軒の杉九丈、上ゐ三角のひらゝと結ひ、杉の葉ゐて包四手ときゝて付、燈籠ハ辻番の行燈の形ゐちひさく作上ひらき下もはませ、屋根も板ゐてゝゝ〳〵玄関と臺所の間の廣さゐ連て七月朔日より晦日まて、毎夜暮六ツよりゆ明六ツまてとゆて一向宗ゐハゝえず、他宗ハゝれ〳〵のごとし、哀ゐ〳〵ゆゝゝゝ〳〵とゝゝ是享保十八年ゐ記さゝてしあれハ既ゐ當時在家の高燈籠の絶るハ明ゝゆゝとゝゝゝの頃までゝゝゝしゝゝ

靈祭、靈棚、棚經

ちぢ下略○猿蓑集高燈籠千那

ひるハものゝこと柱の郎

瓜、茄子、此類聖灵ゑ祭る意ゐ〳〵〳〵秋〳〵べ〳〵青藍掛索麺麻柯の著、枝豆、枝豆、根芋、青蕎麥、粉米、云む〳〵ハ在家ゐ佛壇と餞〳〵餞〳〵ゆゝ〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵故ゐ、七月十二月二度魂棚と餞〳〵設け、聖灵とむゝ祭り

あり、きたるふ邪宗門御改の砌我家ハ何宗ちくとい
るあつ〜ふ、常ふ佛檀と設くることいふなり 四季物語
魂祭るとハ一年ふ二度あるものゝらゆきて此月の祭を
年のとりよりとも、いやそんてこれ〜ふかゝる 徒然草
十二月晦日の夜のことをとゝるる条ふ亡人の来る夜とて、魂祭
るゝゝさい此頃都ふハあきと、ひつまのゝこふハ猶もゝる
とのあつしらて哀ふまと、 枕草紙 あづう葉と師走の晦
日ふもゝきめ紅てあき人の喰物ふまく、云云 ○ 棚經
菩提寺の僧来ゝて禅前ふ誦經すゝもと棚經
とふ〇うの部 盂蘭盆会の条ふ〜ゝるべい、 大

文字の火

せの部 施火

鷹の塒出

和漢三才圖会 四月羽
の条ふ出つ、毛を易んゝまる時、韋緡と解き去て、鳥屋の内ふ放
つ日と逐て脱落して還新毛と生ずゝ月中旬ふ旧のごとし、
ゝゝと片鳥屋とふ、三歳毛を易るを両鳥屋とふ、三
歳と両片鵶とふ〇鷹ハ〜ゝやゝゝろゝゝとゝろ過ゝゝ
今いくゝゝゝとやゝゝ
ゝゝまゝ〜 定家

鷹の山別

或鷹書曰、鷹の山別
ハ七月廿五日ふ、鷹の

巣と立父母ふ別ゝとふ、 下学集 鷹ハ猛惡の鳥ふ、
子生じて巣ふあり、其子成長するときハ親と食ふの義
あり、父ゝ母と畏て居ふ巣より一尺枝と去て
子と養ふ、ゝゝふ一尺量と呼て鷹秤とふ、 鷹打
九七八月煙と以て鷹と取ると呼て鳥屋待 とふ、鷹
の雛巣と離て飛翔ゝて自食を求る時常ふ絶崖斬
巖の喬樹と度る、其巖窟の辺ふ小茅と結びて居ゝ、
鷹の至ると窺て羅と樹間ふ張死鳥と以て餌ゝて
ゝゝと捕ふ此と阿賀計とふ、 月令 鷹乃
或ハ網掛ふ作る是と鷹打と云、 鷹祭鳥 祭鳥處暑
候七月、

王ゝりき

天和本草 其実ハ梅嫩ふ似と
之中也、花ハふ其葉と去て、其実と ゝ、立花とこのむ人、七月七日
して多く挾む、此時其実粗熟、

兼三秋物

龍田姫

眠江入楚 竜田姫、ゝとと桜ぞろふ春ハ佐保山
の神より事をゝりさわ山の霞の色ふよせて春
とゝゝむる神といい、秋ハ竜田山の神より事をゝりて、紅
葉と詠ぜる故ふ秋とゝむる神とらふく、又共ふ神の名〜

玉兎つの部月の蟾と

いへる条ゝ註を、**立待月** 新撰六帖 我門と

そのこさぞたちまちの月もらるらん 衣笠内大臣○十

七日の月ゝ山の端ゝづる月と、立ゆそらひてまつ心とを、

鷹の羽芒 白き彫あるとて鷹の彫ゝ似とり、**樽拔折** 是醋折あり、

関東の俗ことゝ樽拔といへ、酒樽の中ゝ入置て渋と拔の謂あり、**田の色** 許慎ゝ説文曰

稲二月始めて生じ八月熟す云ゝ云ゝ時ハ七月

ハ青黄半熟する時ゝ、故ゝ田の色と云、**田の庵** 御傘 田を守る時ゝ作りて居る庵なり

ハ秋ゝあるゝ 後撰 秋の田のうてゝの庵のとま

とあらこゝ我衣手ハ露ゝぬれつゝ、

八月

田の實の節、特 昌黎月詩 三

怙九節 九の部八朔の条ゝ出づ、**端正月** 秋端正月今宵

出東溟 事文類聚 前輩中秋の月と名づけて端正の

月とゝ〻〻李吟云端正の月ハ圓満ゝるとゝ

竹の春 竹譜 竹ハ八月を以春とす 筍譜 竹ハ八月

こゝと小春とゝ熟去んと欲し寒來ん

欲ゝ故ゝ

小春とゝ、**檀特花** 吳響集 客又曰、檀特花と

いふものあり、花炬火の如し、

こゝも亦芭蕉の類ゝや、答て曰是亦芭蕉の別種

あらん、和漢三才圖会 高サ三四尺葉芭蕉ゝ似てゝく、

甚柔ゝらぎ、又薏苡ゝ似て大く、甚硬ゝらぎ長サ尺ゝ

餘ゝ潤サ三四寸、冬ゝ枯ゝ春生ぜ、七月莖ゝ抽んぐ

花ゝ開く、深赤色、形穂最も愛ぐべし、子ゝ結ぶ圓く

黒色甚硬く用て念珠ゝ作る、木西南外國の草、性最

寒ゝ畏る、**龍舌草** 多識篇 龍舌草 今按多豆ひゝ之多 大和

本草 水中ゝ生ぜ、葉ハ車前のごと、

水中ゝ花ゝ生ぜ、花白く菱のごくみて大ゝり、處々ゝこ

もあり、本草水草の類ゝ載之、西土の方言ゝこゝ

ゝ水ゝとけく葉枯る、又水葵と云、葵の葉ゝも似

ゝり、花ゝ三出ゝり、八月ゝさく、實ハ三角ゝり細く、**煙草花** 花鏡 烟花一名淡把姑 初て海外ゝ出ゝ後種

と漳泉ゝ傳へ今地ゝ蔓てこゝとゝり、木春不老

ホ似て果菜より大あり、紫白の細花とひらく、和漢三才
畠会八九月茎の頭ホ穂樒とひらく、ホ白花と開く、赤
色と帯ぶ畧紫花の花ホ似くり、かの部王瓜
子と結ぶ内ホ細子あり黄褐色、

王章

の条ホ注ス、

蓼の花、蓼の穂

和漢三才畠会三三月繁
花とひらく紅白色数品あり、花穂と
茂し、秋ホ至て穂とあす、細
なり実と結ぶ、俗ホこれと種蓼と云、

種瓢

凡瓢の
そぐきものハ株収て是と搭の下ホ鉤ふ或ハ火爐の上ホ
鉤て水氣と去て乾き過して褐色とある時、種子とり
出し蓄へおく、

種茄子

時珍曰茄中ホ瓤あり、瓤の中ホ子
あり、諸茄老ホ至て皆黄あり、

茸狩

木の子取 尓雅菌ハ形蓋ホ似くり、木菌土菌
石菌あり、○茸狩や鼻の先ある三のかゝと其角

大根蒔

和漢三才畠会蘿蔔大抵八月
種と下し、彼岸ホ苗と出セ、

丸雁

伊勢物語そうのゝとのむの雁もひさぶくホ君
かゝあぞよるゝとあく気る八雲御抄基俊ハ頼

狩とて東人隣家相ともホ鹿狩事ゝ俊頼ハ田
面の雁ことゝ、諸抄雁と用ホ田の雁の事あり、

太刀魚

時珍曰鮚魚江湖の中ホ生ゼ、魚の形物と刑裂篋
刀の如し、故ホ鱭魚鮚魚の名あり、常ホ三月と竝
始て出づ、狀狹して長し、薄くして削まる木片のごとし、
亦長く薄くして尖る刀の形の如し、細鱗白色吻の上
ホ二の硬き鬚あり、腮の下ホ長き鬣あり、麥芒の如し、
腹の下ホ硬き角刺あり、快利刀のごとし、腹後尾ホ近く
して短き鬣あり、肉中ホ細き刺多し、大和本
草本草綱目ホ載る鮚魚ホ相似て同じからず、

九月

高きホ登る

きの部菊酒 九日○嵯
の条ホ出つ、

醍醐祭

國宇
治郡小野の南、深雪山醍醐寺ホあり、紀事九月九日
醍醐天神祭、能あり、又昨日夜ホ入て清滝權現の社前
ホ於て能三番あり、これと夜宮能とハ、○神輿三基オ
一長尾天神、オ二清滝權現第三勝間明神、以上三社ゝ、
當寺縁起ニ云、祭る所清滝權現ハ沙迦羅竜王の才一女
ゝ、長尾天神ハ延喜帝の御願ホありて、御願寺とある

故ふ勸請あり、勝間明神ハ神縁社說詳ふらず、[系切畫]
例祭九月廿三日ふ記を誤りて、廿三日ハ同所笠取祭あり、
當寺の伽藍ハ、山上山下ふ分りて上醍醐下醍醐といふ、土人長尾天神と以て本居と崇む、

宝の市

すの部住吉相撲廿日、洛東建仁寺の門前ふあり、今ア九月廿日ふ祭る、相傳ふ建仁寺の千光國師栄西帰宋の
会の条ふ出づ

旅夷祭

日、船中暴風の難あり、くまく蛭子の像波濤ふ随て漂ふ日のあり、栄西ことと收めて是と祭る、風ゆゑ波静りて志ゆきことを得たり、栄西寺ふ帰りて社とその会れ夷の宮是あり、今ふ至りて西海ふ赴く人此社ふ詣て風波の難あらんことを祈る、故ふ旅夷と称ず、祭礼の日宮川町辺の居民、邀物造物ホと出ず、菊の異名あり、

大般若

神輿一基持鉾ふ従ふ、黄大般若万重みて花菓凡六百菓、故ふ大般若六百卷、

だもれ實

よりぞらく名づく、白色の者又ハ多し、

大和本草 方土ふよりダモともダモとも云漢名未詳、
桂の類ふ三種あり、一種ハ白タブと云菓ハ桂樹ふ似て香

氣もくはし冬赤き實あり、ツヾノミとりふ鳥好んで食ふ、
其實の大さ木槵子よりやゝ小ふ肉を去れば其内ふ円き
實一ツあり一種クスタブと云其菓白タブふ似て桂の菓ふ似て桂菓とクスタブの菓ハ大ふ異なり最よく
とる凡他木ハ其菓のもぎ中ふ一條あり桂菓ハ三條あり
ア木艸ふと如此いフクスタブの菓も桂菓と同く三ツ
あり、白タブを中のそもぎより又枝もぎ處々ふ有、
クスタブの實ハ冬熟して黑しことも肉と去れば其肉ふ
實あり、クスタブの菓の形ハ桂と同じ味も桂ふ似て香
氣やゝ強く多く白タブよりハ香あり、味辛し、木理クス
の木ふ似て良材ふ、白タブ、クスタブとも大木なり中
白タブクスタブの實ハ共ふ火ふ焼ハよくも油多し
ことを肉と去中の實の油ととりて蠟燭ふ作る、○荏桐とダモと訓ずハ誤り、

橙

秋の部ふ載るハ
黄熟するとい〻正月の部ふ載るハ誤、
嘉祝ふ用ふる故、委しくハ二月の部ふ載る、

荔支

時珍曰錦荔枝本名苦瓜一名癩葡萄
及び莖葉相似ることを以て名と得、五月実と下ル

苗と生じて豊と引、莖葉卷鬚並ふ蔓荀の如くなり小し、七八月小黄花をひらく、五瓣花の形の如し、瓜と結ぶ長者四五寸短者二三寸青色皮の上ふ疵瘢瘢及び荔枝殼の形の如く熟するときハ黄色、自ら裂け内ふ紅の瓤あり、て子を畏む、瓤の味甘くして食ふべし、形扁ふして瓜子の如し、亦疵瘢あり、南人青皮と以て肉及び塩醬ニ煮て蔬ふ充、苦く渋く

連雀

和漢三才画会 今處々ふあるて青氣あり、

形雀の大さのごとし、頭背胸赤色、翅黑し黄白の回文あり、羽尾の端畧紅其尾短くして黑し頂の上ニ毛冠あり、眼領の辺ニ黑く嘴ふ林ふ棲むふ群とふを形美きを以て人こまと樊中ニ畜ふ、或ハ尾と拔き舞ふ、ごとし、畧孔雀の形勢ふ似ゝ、但し声好ゝらず、比伊比伊とふ、

九月

例幣 九

ど、蓋練鵲と字同音ふて物異ふ、

月朔日より十一日ふ至て伊勢例幣の諸家門前ふ注連を引、門外ふ標木と建て、僧尼及び輕重服の輩門内へ入べからずその字とをるをこれと前奇とゝ、十一日の朝幣使発足、

公事根源 例幣とハ伊勢大神宮へ御幣を奉らせ給ふ、毎年のことなれハ例幣とハ申ふ、

續日本紀 孝德天皇天平始て伊勢大神宮へ幣帛使を制定ふ、詔て今より以後中臣朝臣と差して他姓の人を用ふることを得ざるとと命じ給ふ、依て大中臣藤波家祭主として、ふ、

秋そつ

兼三秋物爽氣

連歌式

ふむ、最上所と神祇官代とをる、

漢和の篇ふ云爽ハ秋のとくさやけ〳〵しとゝ、増韻爽ハ清快ゝ、さとやゝハ即ち清く快きの義ゝ、蔡松年詩爽氣染出、

袖の露

袖の時雨ふ涙ゝ袖の露ハ涙ふ限る千林赤、つ瀬ハ涙ゝ袖の露ハ涙ふ限る

添水

かの部案山子の条ふ出、

八月

獻胙

せの部釈奠の条ふ注、

蕎麥の花

時珍曰、蕎麥一名荍麥莖弱く翹然として長〳〵易し、收め易し、麪ふ磨て麥のごとくも、故ふ蕎とゝ、荍とゝふ麥と名と同〳〵ふをる、立秋前後種と下し八九月收め苅ふ世最も稍ど畏る、苗の高さ二三尺赤莖緑葉、葉烏桕樹の如く、白花とひらく繁密粲々然として實と結ぶ累々

羊蹄の實の如ト三稜あり、老る時黑色、

九月

蘓我菊

黃菊といふ、こゝろ、蘓我とゝの小名の說あるもどた〳〵ゝあらぼ、拾遺集雜「かのゝ
る池辺ふさてるそゞ菊のもげこさえごの色のてこうさ」
よこ人もらも○もゞこさえるそゞ繁き小枝、袖の霜
いろのてらさい色のてりてきさゑさいへて、

増山の井 獨醫古 糸衣 ホ出しこう、

この部衣打袖の霜といふる条ふ注を、

つ 七月

机洗ひ

硯あらひ 児童七月六日ふ机硯とあらふこと、

北野の神事ふあらふあるべし北野の社ふおいて六日ふ松風の硯ふ梶の巢と添て供ゑ、兒童の手跡と学ぶもの、專ら北野と崇信て故ふ机硯を洗ひ清め、北野の神ふ梶の巢あゞ手向るあるべし、妻又二星ふ手向るものを書為しいもり前說ふよゞ、

迎舟、妻おくし舟、妻送舟

万葉 ひとりぬぎ出ら〳〵天のゝらふきり〳〵立〳〵ハ新勅 天の川うきふのあらふひとぼ〳〵のつまむゝぶゆ今やこゞらん 新六帖

ひさゝゝの天の川門ハ明ふゝりつまゝゝりぶゆまゝゝい
ゞらん 續猿蓑 舟ありの雲ゞらゝやほ〳〵の影 東湖

辻相撲

公事ふあらぼゞゝゝとあゝとゝゝ蹴
禁裏御神樂ふ付て民間ふあゝゝ里神樂
とゝふゞゞ〳〵、神社ふふある常の相撲ふれ、衝突入
ゞゝゝ、禁裡の相撲ふあらひて秋ゝゝゝあり、
十六日 滑稽雜談 昔ハ諸国ふて法と入とて家々秘藏せ
る異物或ハ其家の嫁娘妻妾まで常ふゝゝゝと思ふ
ものゝ客殿居間ふ限らゞ深く入て恣ふ見〳〵近頃
まゝ[illegible]ふ[illegible]ゞ世人山田のつと入といふ傳ふ、
むゝ〳〵ハ諸国ふあゝしゝゝあり、総て家財の類を畜ふハ、
貪欲の道あるゆゝいこゝと戯悔のゝめふゝ〳〵ゝゝ今
世ハ絶てふ

爪紅

鳳仙花をゝふの部ゝゝべし 大和
きゝてゝあり、 本草 女児鳳仙花と酢漿草の茎
とかゝ合せて爪を染ふ、
紅色とある云云 故ふ名く、

新三秋物

露

露の玉

月令章句 露ハ陰液ゝ釈て露とあり結びて霜とゝ、
○増山の井ふ出せる波の露ハゝゝゝの露の誤ゝ○

白露、櫻の露、上露、露、以上頭字の部ふ注ス、

露の身 露の身とハ、露のごときくろもの紀身といくさろ、

[曠野集]句 露の身ハ泥のつきやうちるこのわりひ荷兮

月 [物理論]月ハ水の精、潮ふ大小あり、月ふ虧盈あり、

[說文]月ハ日の照を処より生ず、故ふ哉生魄ハ日の蔽ふ処より生ス、故ふ又哉生魄ハ日ふ當る時ハ光ア盈ツ日ふ就ときハ明盡○桂男、さくらえ男、照月次、新月、弦月、三日月、王兎、銀兎、玉兎、在明、哉生明、既望、既生魄、いさよひ、哉生魄、暉素、金波、夕月夜、暁月夜、夕月日、朝月日、立待月、居待月、臥待月、くゞゝ月、廿日夜中、更待月、常娥、真如の月、心の月、胸の月、盃の影、まるほし、朔日ごろの月、ねまちの月、以上各頭字の部ふ

月の霜、月の雪 杜甫、仲秋詩、満月飛明鏡、わゝちて註ス、帰心折太刀、轉蓬行地遠、攀桂仰天高、水路疑霜雪、林棲見羽毛、此時聽干兎、直欲敎秋豪、

月の桂の花紅葉 桂男 [西陽雜俎]月中ふ桂あり、高さ五百丈、下ふ一人あり、常ふ斧を斫る、樹創ふ隨ひ合ふ、其人姓ハ吳名ハ剛、仙と学ふ過ありて謫せらる、樹と伐らるゝ、桂男ハ吳剛ふ云

[八雲御抄]月の桂ハ光とりゝ、[古今]久しきの月の桂を秋ふあひうるもぞ思ふてこゝはさるらん 忠岑 [冬]この日月 西南ふ桂の花

月の桂の子 [續詩注]杭州の天竺寺八月十五夜の注ぶ時 羽笠、常ふ桂子ありて落つ、[本草綱經]江東の諸處、多く衙路の間ふて桂の子と捨ひ得、之と破ふ、[本草]泊傳ふ是月中より下る [御傘]桂ハ三五の秋と詩ふと侍ふ、実とハ秋ふ定めさるべし、

月の鼠 [山說譬喻經]黒白の二鼠あり、互ふ樹の根と齧ふ乃至樹根ハ命ふ喩へ、黒白の二鼠ハ晝夜ふ喩ふ、[奥儀抄]無常の喩ふ人虎ふ逐はれて、野中の井ふ陷入んとして、岸の草とりくへ底をとゝんハ毒蛇口と開きてのまんとす、又黒白の二鼠、のそるくとの草の根と食ふせんをぐまくて、毒蛇の為ふ害せらるゝ、是虎ハ平生造惡の罪業、黒白の鼠ハ月日の過ぎゆく、毒蛇ハ地獄ふ

月 鼠と月の鼠とふ、樓炭經の文あり、

の剣 三日月の状と刀劍の形ふるくるるあり、

月の都 月宮殿 太平廣記

羅公遠傳云、中秋の夜時ふ玄宗宮中ふて月と戯ふ公遠奏して曰、陛下臣ふ従ひ月中ふ遊んや、否や乃ち拄杖を取、空ふ向ひ擲つ、化して大橋ふなる、其色銀の如し、帝ふ請て同く登る、約まるふ行ふ数十里、精光目を奪ひ寒気人を侵す、遂ふ大城闕ふ至る、公遠曰、此月宮也、仙女数百皆素練寛裳して廣庭ふ舞ふ、帝問て曰、此何の曲ぞ、曰、霓裳羽衣の曲ぞ、玄宗密ふ其声調を記して回る、顧るに其橋歩ふ随ひて減す、

月の蟾、月の兎 玉兎 五経通義 月中ふ兎と蟾とあり、兎ハ何ぞや、月ハ陰ぞ、蟾蜍ハ陽ぞ、兎と並ひ明ぞ、陰陽ふ係るぞ、○杜甫詩云、搗藥兎長生、○白居易詩云、照地幾許人断腸、金蟾玉兎遠ふ知、○蟾ハ月中三足の蛙ぞと玉蟾とふ、

月の蝕 天経或問 星月皆日の光を借、日ハ月天の上ふあり、月ハ日天の下ふあり、朔日月行て日天の下ふ在て、日の光を掩ふ、人地面の上ふ在てこれを仰き視るときハ、其月の日を掩ふとなる、こゝふあらて日光あるが如し、然も定ふ常と失ざるぞ、人其光くらざる故ふこれを日蝕とふ、月蝕ハ朔より望ふ至る一向八十度ありて日月望む、中間ふ正對まるとき、地球障蔽ぞ、月地影の上ふあり、日地球の下ふありて日光これを蔽ふ故ふ月其光ふし、是ぞ月食云

月讀 拾穂抄 月よみ男、月讀月夜見皆月の名ぞ、日本紀ふこゝ、月ハ男神故ふ男とつふ、

月の男

出潮 性理大全 余襄公安道云、潮の漲退ハ海ふ増減ぞるふあらぞ、蓋月の臨む所ふ則水往てこれふ随ふ、日月ハ右ふ轉り天ハ左ふ轉る、一日一周して西極ふ臨む故ふ月卯酉ふ臨むときハ水東西ふ漲る、月子午ふ臨むときハ潮南北ふ平なり、

月の秋 御傘 月ハ皆月ふ繋ぞ、彼竭きぬ盈て往来絶ぞ、皆月ふ繋ぞ、夜るぞ、花の春ぞて植物ふあるふ同じ、

月の宿 御傘 露水あるふ結ぶぞハ月とる宿の事ぞ、居所あり、

月とあるじ 御傘 人倫ふあらぞ、月のあるじハ人倫ふあり、

の友 御傘 人倫之、但し句体ふるべし、月と友人倫ふあらざる、朔日頃の月

源氏浮舟の巻 ついさちごろの夕月夜云云 炭俵集 細くとついさちごろの宵の月 利牛 ○月のちぶめとつくさちごろこいひ月のをさうとつごとり

ごろこいひ月のをさうとつごとり半月をいふ、月の舟

ごろいひ一日三十日ふぎらむ、

月のこのみ 満月をいふ、 蔦 蔦紅葉 時珍曰蔦ハ松蔦ぞら 柏の上ふ寄生

女蘿ハ是松の上ふ浮蔓も○地錦 大和本草 葉ハ衣の紋ふ付るツタふ似て冬月も葉ぬちぞ、皆本草ふいふ

とし、和俗壁生草といふ、秋ハ紅めく、又常のツタハ是ふ似

さり、冬ハ葉ぬけ、 和漢三才画会 烏蘞莓 俗云豆太 本綱ふ

墻塹の間ふ多し、藤柔ありて接あり、一枝一髻ハ五葉、

葉長くして光あり、疎齒あり、面青く背淡し、白蘞の葉

のごとし、故ふ烏蘞と名づく、七八月苞を結び簇をなす、

青白色、花の大さ粟のごとし、黄色四出實と結ぶ、龍葵

の子の如し、生ハ青く熟すれバ紫く、内ふ細子あり、云云

是大和本草ふ夏蔦ハ秋ふ至て葉深紅愛ぶべし、

甘藷 和漢三才画会 仏掌薯、葉薯、蔊の葉ふ比

根の状仏手柑ふ似て肥り、大く攫搜者の如し、故

ふ名づく、鎮江府志ふ所謂佛掌薯ことなり、

粒芋 其莖ふ紫の理あり、子 白栃 渋栃と以て枝と連

ふく四くして味美し、

ね曝し乾す、或ハ糸ふ繋て晒し乾す、初蕎麥稽

稲藁と用て包宿してよく霜を生ず、豫州西条の産

甘美し、備州ことふ次く、濃州及び 妻梨 軒のつま

尾州の産ハ長さ三四寸ぞこのつ、

也と

八月

いつ、 絲雀 名の部 繪行器 敦賀祭 甘

の条ふ出り、

氣比大明神ハ越前敦賀郡ふあり、祭神仲哀天皇 風土

記氣比の神宮ハ宇佐同体ふ、八幡ハ應神天皇の垂跡気

比ハ仲哀天皇の鎮座ふあり、例祭八月十日〇今月二日よ

ア十日まで、近国廿里四方ハ諸商人、放下師、狂言師等

来ア集ア二日神輿洗あり、敦賀紙屋町とく所ふ、

例年紙細工の家基燈籠と出し、京の祇園囃と模

も、三日神事四日と後宴と称し、町々の氏子東番西番と
こゝも引山と出し、地車をて町中と引廻る、山の上ハ一丈
ばかりの松と立、四方錦繡の幔幕、水引ハ洛の祇園祭の
山の如し、上ハ武者人形と飾る、山の数或ハ五ツ或ハ六ツ祭礼
當日ハこゝも出て、天神の森と
いふ所、御旅所とて神輿遊行、鶴が岡八幡祭 十月
相州鎌倉ハわり、一名ハ雲井う峯、上の宮三座、中ハ應神、東
ハ神功、西ハ姫大神、姉神下の宮四座、仁徳天皇、東ハ久礼
宇礼の二神、西ハ妹比咩、後冷泉帝の御宇、伊豫守源頼
義朝臣、安部貞任と伐時、丹祈の旨ありて、康平六年八
月石清水の神と相州鎌倉郡今の下若宮の地ハ勸請
永保元年二月成就、義家朝臣修繕と加ハ治承四年十月
右大将頼朝卿、小林の郷ハ迄ゝきふこゝまこ今の宮が岡ハ、
毎年八月十五日放生会並ハ祭礼奉幣流鏑馬角力ハ有、

司召

敎隆卿記 司召ハ秋の除目ハ有、京官除目と号
も、春の除目ハ縣召と号も、各拜任の輩こゝ
と召、春ハ大政官の廳、秋ハ外記の廳ハ於てこゝと召、御
司召と称ス、〇司召定考同儀ゝとゝ猶この部定考

の条とも見合こゝ

月見

名月 今宵の月 ハ八月 十五夜 三五の夜 月華
望の月

事文類聚 歐陽修詩序云月之為説久則繁
霜大寒、夏則蒸雲大熱、雲蔽月霜侵人蔽興侵俱
害説秋之於時後夏先冬八月於秋季始孟終十
五之夜又月之中譬於天道寒暑均取月數則
磬兎凹況埃塵不流大空悠々蟬娟徘徊博華上
浮昇東林入西林肌骨與之疎冷神氣與之清冷
○名月 湖東問答 去来云三五十五夜ハ月を以て名月と
いふ、そのうちいづれの月ともらぞ名月といへ故あること
きこゆ、然ども今日名月の詩哥と作らんハおもぐら故
實ハ限るべゝまで尤故實ハよゝべ佳あるべゝ文明の字
と用ることハ和漢とも三五の清光と賞し来る故ハ明
と名と通ひゝるとも通用をべゝ、○今宵の月ハ今
日の月、以上十五夜の月ハ限ることていふとゝむこ且るハ今
宵と賞もるところ旬中ハいらぎればゝゝのこと 續猿蓑
ふゝこあゝぐいさうしやせんゝふの月 智月 ○芋名月
御湯殿記 名月御祝三方ハ芋むりり高盛て 蔵時

拾遺 浪華の俗、十五夜と芋名月とい八、十三夜と栗名月
とい八、○三五の夜、白樂天詩、三五夜中新月色、○月華
五雜組 人々八月望月華あり、或ハ八夜半、或ハ八微雨
後、或ハ八月のこゝあらぬ、秋後の望とも、ふことあり、或ハ
ハ八々の五采鮮明、旁照數十丈、金線の如きもの百餘道、
或ハ但紅雲こゝと冊こゝ繞るのこ、臨川吳比部撝謙小ろし
時一度こゝと見こ、その景象鮮妍千態、月草、露
万媚真ふ人間いまゞこゝと見ざる所の奇、

草 時珍曰、鴨跖草花と碧蝉花とい八、三四月苗と生ぜ、
莖葉ふ〳〵て葉竹ふ似ゝり、嫩き時食ふべ、四五月
花とひらく、蛾の形の如く、兩葉翅のごゝ、碧色愛ぢべ、
巧匠其花を採こ、汁と取て畫色を作も、青碧ふて、黛の
如く、倭名抄 鴨跖草 和名都岐久佐 仙覚抄 鴨跖草、月草と称
も、月草ハ露草、万の花ハ朝日影ふこと咲と、此花ハ八月影
ふ咲けバ、月草といふ、

土菌 和漢三才圖会 月夜茸 大毒ハ
土中ゝ生ぜ、
格物總論 燕春社ふ来り、秋
社ふ去る故ふ是と社燕といふ、

燕歸る

鵜

和漢三才圖会 百舌、反舌、鶯鶯、馬鳥、俗ニ云真豆久見
狀鶯鴿のゝ〳〵て灰黑色、京師除夜毎ふこれを炙て
食ふを祝例とす、

九月

津村祭 廿七日 ○津村の御靈社
ハ、摂及西成郡大
坂津村ふあり、祭神鎌倉權五郎景政ガ霊こいふ、 摂陽
郡談 昔津村何某、專ら武勇を励ま、諸国を巡行して
軍術奥旨を極む、相模の国ふ至て一夕景政の社ふ
詣て神殿ふ通夜ま、時ふ神渠ゝ武勇を感ド、託して
云、摂津の国難波の勝地ふ祝ひ祭ま、我將ふ汝を擁護せ
ん、答云何と以てゝ證ゝ、曰枕上ふ神幣あらん、明旦さ
めてこゝまでばゝ〳〵て神幣あり、みづのらこゝを負ひ、津
村ふ帰て、義祠を造て神幣を納てこゝと祭る、御靈
の宮これ、元禄のころ御靈の大明神と贈号あり、毎年九
月二十七日、神祭、神湯の式あり、津村の土人本居神ゝも、

椿の實 和漢三才圖会 海石榴ゝ實四く無果花
ふ似て、老て枯るときハ殼四ツふ裂ケ中ゝ子
海松子のごゝ、皮と剥仁と取搾て
油と取、但千瓣の者ハ實と結ぶ、露時雨、露

霜、露寒 古今 さふらひうさと申せとゆ紀のく木の下露ハ西ふまさまり」暮秋の露のさくんあるとつゆ時雨とくふ露霜、露寒ふ露の気の凝んそると云あるべし、

七月 願

の糸 公事根源 乞巧とハ七夕祭ととつくふ香花とそ〳〵供具ととゝのへて庭上ふふしとおきてさゝのもゝふ五色の糸とうけて一事と祈るふ三年のうちふ必叶ふとハて此ゆゑふ乞巧と申そゝ 朗詠 憶得少年 念佛踊 洛北川合長乞巧竹竿頭上願糸多 白居易

まち月 新六帖 秋の夜のひとうねまちの月らけふ身と吹〳〵わそ庭の松風 衣笠内大臣 八重垣 ふ〳〵まちの月〳〵十九日の月〳〵一説ふ子待〳〵廿日の月〳〵

八月 和漢三才図会 俗ニ云鼠茸、朽木及び老樹の根上ゝ生ぜ九十月盛ふ出一根座とふ〳〵数十兼生ぜ、織円く泡頭鈴ふ似て長さ一二寸、莖細く紫紫ゆり、織の内外灰白色凡て灰白色ある者と呼て嵐色とそ此物浅嵐色あり、故ふ嵐茸と称ゝ

七月 日本紀 持統天皇五年七月七日、公卿と宴し朝服と賜ふ 紀事 今日武家並地下の良賤各白帷子と着慶修ス家〻索麪と喫又互ふ相贈る、

七日 御節供

七箇池 漢宮七夕ふ百子の池ふ臨ミ五綵と以て相繩そゝ〳〵と相憐愛とい〻〇七箇の池とハ星と祭るふ七つのたらひふ水と入て鏡とつけてほ〳〵の影とうつすとゝう百箇の池ハ天の川ともいふかゝこ姫とハ棚機とい又百の〳〵らひふ水をこ一〳〵ゝ 夫人傳云高祖 百箇池 事林廣記 戒

刀豆 時珍曰莢の形と以て名とるとい〻〳〵もつて、命ぞるゝ、案ぞるふ民成式酉陽雜俎ふ云、果浪ふ挾劒豆あり、莢横ふ斜ふして人の劒と挾めるが如〳〵即此豆あり、三月種と下もそ蔓生し引て一二丈、果豆の巣の如くゆ〳〵て稍長大、五六月繁花とひらく、蛾の形のごゝ、莢と結ぶ長き者尺ふ近し

微卑莢ふ似扁して剣脊三稜宛然たり、**棗の實** 時珍曰按ずるに、陸佃埤雅云大なると棗とらひふもると棘とらふ、[大和本草]夏芽と生ず故ふふつめとらひ○花の形春のふの部棗の花とつくる条ふ註も、

兼三秋物

梨子 時珍曰、梨樹の高さ三四尺、実りて巣光腻あり、細き葉にして二月白花と開く、雪の如し、○大綬紅絨子梨、観音寺梨、妻梨、松尾梨、水梨、四梨、空閑梨、鹿の梨、その浦梨、山梨ふの種類多し、各頭字の部ふ見のちて注も、**鳴子、鳴竿** [駒垣秘抄]棹の先ふ鳴子とつけて、片山里ふ粟といふものと作て猿と追ふ、○秋の田畑ふ鳥獸と驚ろく具、

八月

長き夜 夜の短き至りハ夏至ふ過ぎず、夜の長きいたりハ冬ニ至ふ過ず、然れども秋の夜と以て長夜ともる所以ハ秋分昼夜等しく初て夜の長きとながゆ、夏の短夜ふ對して秋と長夜とをるの、**名の木散** 鹿文曰按ずるふ、楓櫨柞ふのごとくふそ櫨ちる柞ちるといふべきと、略して名の木ちるといふるあらん、然るに未練の俳士ふ、ものせて発句ふもるハとうとうらず、名の字ふよせて假用ふるハのみ、千梅も此事如何のよ〳〵なるり、**滑煤莖** [和漢三才畜会]榎の樹より生ず、大なる者傘すむ、小なる者三四歩、大小最生、浅褐色に帯、内刻あり、甚滑其莖煤黒色、奈女ハ滑に、須々ハ煤色あり、木莖の上[和漢三才畜会]九八九月暑に、**中稲** 苅収るを中稲とて、**中拔大根** [和漢三才畜会]八月ふ種を下し、彼岸の中ふ苗と生ず、稍長くして瓜の尾の如きを中拔大根とつく、霜の後肥太る、**米種蒔** 注ふ不及、**中汲酒** 半清半濁の称あり、

九月

鳴瀧祭 福王子祭 廿八日 鎮守の社洛西仁和寺の西北、鳴瀧うり、[諸神記]王城守護三十番神右白虎八神 高雄の麓、鳴滝川の辺ふ至ると封ず、西朱雀より西洞院ふ至り九町の擁護神、[擁州府志]福王子の宮ハ西山鳴瀧ふあること此辺の地主の神ふ、ここ仁和寺の鎮守とて、西社とあふ土人本居神とて、同日ふ合せ祭るなり[紀事]鳴瀧

福王子祭九月二十八日、神輿一基、鉾五本御室の御所の庭ふ入元五〇福王子の宮祭る所班子皇后ハ皇后ハ桓武帝の孫女ふして、文部尚書仲野親王の女、光孝帝立て皇后とある、宇多帝を生ぬ、此辺の地主神と崇め奉り、仁和寺の鎮守ともこ

滑稽雑談 俗ふ五番洗ひとりふ、是一年中の諸社の祭祀の終ゑ、又當月の外ふ神祭ちき故ゝ、毛吹草ふ鳴滝祭廿八日と記そ、近来の俳書外ふ福王子祭と並べ載こり、同社の祭と謬て再ひ出ぬ、

和漢三才圖会 倭名奈良、俗ふ古奈良樹の高さ丈ゝ、花實擬柞の輩のごゝ、秋月紅葉ちる時人ゝ尚ゝと賞ぬ

大和本草 擬と大奈良とゝ、葉栗の如し、秋冬枯て落ぬ、四五月花ひらく、栗の花ふ似こり、實ハ椎のゝ大ゝ、其苞半づゝ忙又小揷小木あり、材木ともべうゝぬ、其苞あり、半とゝむこゝ即團栗あり、

南天の實 蘋頌曰南燭株、高三五尺、葉苦楝のごゝ、冬ふ入り冬を凌て紅子を生ぬ、穂ともなる、人家多く庭除の間ふ植、俗ふ南天燭とゝ、〇夏のふの部南天花の条

七月 蘭

宗奭曰巣麥門冬のごゝくして潤し、且韌あり、長三二尺四時常ふ青し、花黄緑色中間瓣上ふ紫の點あり、春芳しき者と春蘭ともに色深し、秋芳しき者と秋蘭ともに色淡し、開く時満室尽く香し、他花と又別ゝ山谷曰一幹一花ゝして香餘り、ゝるものを蘭ともゝ、幹數花ゝして香少ゝるものを蕙ともゝ、

大和本草 是世俗ふ花と玩賞もる蘭ゝ、真蘭ふあらぬ今の蘭ハ本草ふこれと出ぬ、蘭草集解正誤ふ載そ、

七月 迎へ火

送り火 七月十三日黄氏日ふ又ゝ

都鄙 とゝふ聖灵ゝ迎ゝる

の義あゝ此時門前ふ於て、必麻柯と焚てこれと迎ゝ火とゝ、

報恩経 十六日午ゝ時ゝ皈ル

五雑俎 七月十四日卯ゝ時来り、次の日十六日午ゝ時ゝ皈ル人是中元と重ぬ、家々猪酒冥衣の具と設け、先人の号ゝ位と列ね祭てこれと燎ゝ、女家則父母の冠服袍笏の類と具ゝ、皆紙ふ為る者ゝ、これと紗箱とゝ、父母の家ふ送る、女死ぬれば壻亦代りて送る、莆中ふ至るとゝハ則清晨陣設ゝ甚

嚴し子孫冠服を具し揖讓盤折して神を尊び迎鐘き以入る祭畢て復送てこゝを出ることゝ云、

ろの部六道

蚕の条に出、虫送

紀事 年ふ依て田蝗害を為ものを時民人鐘鼓を撃野外ふ送る

これを虫送とゝふ凡旱歳ふ五穀の枯萎むを焼ると

ゝふ茄の根の枯るを舞とゝふ瓜の蔓の枯るを上るとゝふ、

是民間の詞〇いの部

蝗の条にみえ〜こゝ

木槿

時珍曰此花朝ふ開き暮ふ落故ふ日及と名づく槿とゝふ蕣とゝふ猶僅栄一瞬の義ふ〇其木李の如く其葉末尖りて揉歯あり其花ふみて艶之或ハ白く或ハ粉紅單葉千葉の者あり五月始てひらく、

室の早ゝせ

古今六帖 津の國の むろの早ゝせいでゝとゝもあるものを

此三の夫木集ふハきの國の室の早ゝせとして入とり紀伊國ふ牟婁郡あるを夫木のゝことふまとゝふべ〜さて牟婁郡の早ゝせとゝふものゝ古説ふさゝぐくゝるハ杜撰なるべし、

兼三秋物

虫、虫籠

爾雅 足ある虫とゝひ足なきを豸とゝふ疏云此文ふ對もるのゝ敢て言ハ足あきも虫と云、

雍州府志 下賀茂の社司の婦人松虫鈴虫を養ふ籠と作る其式纖細竹を刳て篭と造る内ふ一ツの小筒を安き土を盛て苔を敷き露草少しゝ草と種侯俗ふ所謂露草ハ鴨跖草ゝ紫白の糸を以て藤花の形を作り、籠の上より下ふ垂る其躰觀るふ堪ゝ秋ふ至て虫を入檻の下ふ掲或ハ簾外ふ掛く昼ハ目を悦しむ夜ハ虫と聽て耳を娯しむ、

虫合

虫の声のうゝとゝ合せて遊ふとゝふ、

胸の霧

思ひの晴やらぬことゝふ、

胸の月

萩の露 胸の月、胸のうちの曇らで清きまゝるべ〜、猶深意も侍るゝ、

八月

紫花

和漢三才圖会 椋の木の上ふ生ず形状榎茸ふ異るこゝなし、

椋鳥

漢名未詳 和漢三才圖会 椋樹ふ棲故ふ俗呼で椋鳥とゝふ形小鳩の如くして項白く背灰黒色背の下黒白層々眉淡黄頷の以下腹ふ至て俱ふ白し翮の上灰黒色の斑あり翅の本微白し羽黒

白交ぜり、嘴黄色、鼻の辺微黒と帯、脚脛黄、その声鵯ふ似て、喧く、好んで群とす、又小椋鳥あり、状相似て小く、

九月

撰虫

公事根源 是ハあふぐちふ式ゐる事ハあゝぶ殿上の逍遥とて、殿上人ども遊びて、嵯峨野をぐひらひて、虫と竜ふえらこ入て奉る、

木蘂子

藾恭曰、豪華此樹、葉木槿ふ似て、稍長大、子、殼酸漿ふ似て、薄し、細き花黄ふして槐ふ似て、稍長大、子、殼酸漿ふ似て、其中ふ実あり、熟せる豌豆の如く、円く黒く〳〵〳〵堅硬し、数珠ともろふ堪ゑる者是ふり、五六月花収む〳〵、南人以て黄と染、甚ご鮮明あり、

椋の實

時珍曰、無患子樹甚廣大、枝葉こふ椿の如く、特ふ其葉対生して、五六月白花を開き実と結ぶ、大さ弾丸の如し、状銀杏及び苦楝子の如し、生ハ青く熟すれバ黄、老るときハ文皺あり、黄むときハ油煙の形の如し、中、署実中一の核、殼と去て仁とする者、堅く里〳〵して、而珠の如し、

剥栗

搗栗の類ふり、

七月

烏鵲の橋

そのかの部ふ注す、

盂蘭盆

會

日本紀 齊明天皇三年七月、始て盂蘭盆を設け、同五年勅して盂蘭盆会を諸國ふ下し講ぜしむ、

釈氏要覧 盂蘭盆ハ是釈氏の孝と述恩と報い苦と救ふの要さゝ、目蓮の母をそふと以て始とす、梵語ふハ盂蘭ふハ倒懸と云ふ、盆ハ此方の器ゑ、

事文類聚 盂蘭盆経ニ云、目蓮比丘その母の餓鬼中ふ生ずると見て、即鉢と以て飯と盛り、往てその母ふ飼ふ、食いまゞ口ふ入らゞ化〳〵火炭とゐる、終ふ食ふことを得ゞ、目蓮大ふ叫びて馳還り、佛ふ白す、佛の曰、汝が母罪重し、汝一人の力いまとゞまる所ふあらゞ、當ふ十方衆僧の威神力とりてむ、七月十五日ふ至て、當ふ七代の父母、現在の父母、厄難の中ふあるかの為ふ、百味五菓と具へて以て盆中ふ着て十方の大徳ゑ供養をべし、仏衆僧ふ勅して、皆施主のためふ七代の父母と兄願し、禅定の意と行ハしめ、そのとき目蓮の母、一切餓鬼の苦と脱ゐるとゝ得ゝ、目蓮仏ふ白す、永く来世の仏弟子、孝順と行ふ者、又盂蘭会と奉じ、もろもろとと得せしむべし、可ふらんや、仏言く、大ふ善し、故ふ後代の人、これふ因て、廣く華飾とゐる、乃ち木と刻

ミ竹と割飴鍋剪糸花果の形とゝのし工巧の妙と極るふ至る鬱金の花時珍曰鬱鬱金香是花と用ふる根と用ふる者ハ其苗薑の如し其根大小指頭のごとし外黄内赤く人以水ふ浸し色と染し又微香氣あり又曰四月の始め苗と生ぜ薑黄ふ似く花白く質紅あり末秋ふ莖心と出して實ふしゝ嶺南の者ふハ實あり小豆ふ似て啖ふふ堪ぞ、

馬追 【くくせこ】江東の俗スイトとゝ〳〵其声スウイとゝぐごとし〳〵いとふ似て小さゝ色純青し尻ふ剣あり又ふきゝあり雌雄の異あり中元の時夜盛ふ鳴其響紡車と捲ぐごとし、関東の俗言ふ馬追とゝふ、

兼三秋物 【嘉元御百首】凡うゝふ野ゝの草の上露ハ落て下葉ふまゝとむもびゝう頓覚ふ多くこれあり甲州信州下野最多し畿内の産又勝れゝう黄赤ふ白斑の彪あり珍き彪のごきハ人甚これを賞ゝ其声知地快とゝふぐ〳〵数品あり嘩々快と上ゝて毎ふ早且日午夕暮ふ鳴凡春二三月始て鳴苦種ハ至て声を止む六月又更ふ声を発し中秋ふ至て声を止む人是と養ふ其雌ハ小く足卑く嘩ゝぐ呼て阿以布といふ〇片鶉駈鶉ゝう鶉と取る各頭字の部ふわゝちて註ス、

鶉鷹 鶉鷹ゝう

鶉 荀子曰子夏之衣懸結ゝて鶉のごとし、

衣 【御傘】只他人の短き著物とゝふ然ゝと秋の季ゝゆゑ生類ふ二句去ゝ〇一説ふ衣の裾の破ゝて鶉の毛ふ似ゝるとゝふゝ

鶉の床 【御傘新式】ゝふ夜分ふあらざる物い處ふ鶉の床ゝごゝり出ぜゝ此道理ゝ簡ゝゝふ余の鳥とゝりてゝゝふ空ゝ翔らぎゝ書ゝ草のゝちふのゝゝふふゝり此鳥ゝゝゝゝを床ゝゝも夜分ふゝゝらぎゝと定ゝゝゝゝゝゝ

鰻 【和漢三才圖会】鰻鱺此物冬春ハ泥穴ふ蟄し五月ふ至て海ぎ出ッ此時味勝て子と生ぜ纖く長サ三四寸性滑ゝて利く泥中ゝ潜る故捕ゝ江州勢田城州宇治名ゝ得ゝゝ【紀事】秋月鰻鱺流ふ從ひて下る是ゝ落鰻鱺ゝふ流ふ從て簗の中ふ落入故ふ捕ゝ易くして魚店ふ

簗

多くこれを賣る、

八月

宇佐宮祭

十五日○豊前宇佐郡築紫ふ

ひろ、欽明天皇三十一年、豊前國厩の峯菱形の池の上の民家の児ふ託して曰我い是第十六主譽田天皇廣幡八幡く我を護國靈驗威身大自在王菩薩と名く、迹を諸州ふ神明ふ垂る今顕ふ此地ふ在まくいのうてこれを奏さ勅して祠をうつ八方ふ八色の幡と立て故ふ託宣して八幡と号へ社説ふ當社祢宜奏して云大神の託ふ宣く我元量劫よりこのうち三百ふ化生して善行方便を修し諸の衆生を濟度せ我名を大自在王菩薩と名くと帝叡聞ありてこれを許しいるまふ

源八幡八垂跡の号、後ハ豊前國宇佐ふ鎮座の八幡ハ聖武天皇東大寺建立の後巡礼ありこと詔宣ひり依て彼寺ふ勧請申されきさふど勅使ふどハ猶宇佐ふ恭ましり○宇佐宮祭ハ此地を始ともて、

宇治の花園

山城風土記兎道とハ輕島明の宮の御宇天皇の御子、宇道の稚郎子桐原の日桁の宮をつくり宮室とくくふよりて御名と宇道といふ

年浪草

三除奔云兎道の稚郎子崩御の心と新勅撰田日記人のなくさや露あらん世と宇治山の秋の花園ともて思ふふ宇治の花園ハ桐原の日桁の宮の花園ハ故ふ慈鎮和尚を稚郎子崩御のこころをよくくのうへ千梅春耕とのふ頼通卿の花園と記せり、稚郎子の崩御のこころを詠る哥ふ臣下の花園をとり合せて詠る例ふし、殊更慈鎮ハ宇治の関白頼通公より五代後法性寺無実公の子ハその先祖の花園とこころ多ぐらんや、

薄紅葉

薄色のもみぢをいふ

和漢三才圖会梅嫌木 正字未詳 葉四ぐ光り微小き鋸歯あり、野梅の葉ふ似て小く冬凋ハ春芽を生ぜ五月小白花と開く暑南天の花ふ似て子を結ふ初ハ青色十月葉落て子紅ふ熟ス枝幹ふ添て多く美し一種白き者あり異と珍とも然ども赤き者ふ多ども、

漆の花

蕷傅升曰漆樹高サ二三丈餘皮白し葉椿ふ似て花を槐ふ似ていその子ハ午李子ふ似て木心黄ハ六七月刻て滋汁と取ふ

茴香の實

[和漢三才圖会]倭名久礼乃於毛 本綱茴香 宿根より深冬ふ苗を生じ長ごとに高さ三四尺肥ゑる莖葉糸の如し五六月花開く蛇狀の花のごとくして色黄ハ實と結ぶ大さ麥粒のごとし輕く細き稜あり俗呼て大茴香とまこ今惟寧夏より出る者と以て第一とす他處より出る小き者これを小茴香といハ按ずるふ懐香と大茴香とすと雖今唯大茴香と称る者ハ八角茴香〻本朝未有之小茴香と称る者即懐香〻和多くこの色を種て用ふ高さ三四尺肥ゑる莖粉青色細き葉浅緑糸のごとく柔韌夏ふ花をひらく淡黄色子を結ぶ形秕の麥ふ似て小く筋稜あり中の子ハ皮と同色ふ〻こゝ〻〻飛散る処ふ苗を生ず

鶉艸

[ひくうせと]一切の國史草史和名抄ふふ此名あるものをえず草花肆ふ尋るふまちまち或絵師ふ尋ね待るふ粟の異名ありとのふさもいるべきふや、**海雁**[大和本草]海ふ在て其大ふ者常の雁ふ比すれバ微小あり色灰色の如く味及び足黑く其頭ふ環の如き白色ありて短毛有、

九月

太秦の牛祭[十五日]

[紀事]山城国太秦の廣隆寺、常盤村の南山の内村西北よあり桂の宮院内ふ加藍神あり、大辟の神社とそ、祭る所の神秦の始皇帝ふ、つの伽藍と造る、四天寺法隆寺、元興寺、中宮寺、橘寺、蜂岡寺、廣隆寺の別号池後寺、葛城寺、日向寺ふ三[紀事]上宮王院の庭ふおいて牛祭と修む、寺僧各集会す、相傳ふ慈覚大師帰朝の日、順風と肇多羅神ふ祈る、飯山の後此神と叡山の麓ふ勸請す、赤山太秦もまた此社あり、故ふ今宵寺中の神事ハ多羅神と祭る者〻寺中の行者紙衣を着、牛ふ乘て上宮王院の前ふ出、祭文を讀誦す、是悉く懺悔の詞ふて、ひふ〻ハ寺僧ふるゆくとつ〻むとともこの戯謔ふ近きと以て近世行者ふて〻〻修せ〻む、法令畢て門前ふ角力ひく〻〻寺説ふこの会ハ大念仏会と称て十日の暁開闢十三日の暁ふ至ての結願〻〻下暑

雲州掃[大和本草]

温州橘其葉蜜橘ふ似て薄く小〻其実肥蜜橘ふ似ふ〻大きも亦同〻

漆搔漆樹の汁八八月の

部漆の花の条ふらえうい、[ひとくうせる]漆の木の枝捐迫ふ悉く鋸として挽目と附、其挽目より脂を発し是則生漆汁)奥羽及ひ下野和州尤多し中國ふと所々にあり、其脂と掻取諸國皆六七月)ことし、九月ふ出せるハ違ふえ、

裏枯 [御傘] 草巣の外色づきてうら〳〵事)うらがれとでうるとハせも、蘭野邊原庭ふとの文字と入る〳〵植物ふ二句)草の名草の字ハらで植物ふ三句し、連ふ裏枯過て秋草の句ふりうしふ字かたもせざれ

〃俳ふハ今一有べし、元○青藍云木の梢の枯るともうら枯ところうる者あるとわ洩し、御傘の文体ふて草ふ限れることを

梅紅巣 梅の木の巣の紅巣せ〳〵あり、

うれ寒 秋の寒さ

ふ **み** いの部ふ

俳せ出ス

の [七月]

残る蚊、残る蛍、残る蠅 [貞享式] 残るとふ字ハ其季より此季ふ残らぬ、残るといへる道理あり、中略譬へむ残菊ハ重陽ふ残ることを家ハ何ふ残るべきや、残るの字ハ総て其季の次ふ取るべし此論ハ残るの字の例と

志ふもとうひて六月の部ふ出しことも、通俗志ハ椎泊の書ふして蕉門の式ふ違ふ、故ふ今改て秋季とす、

残暑 秋暑 山谷詩西残暑推不去、○梢まて来て凡挽不来、

後の藪入 春の部ニ注ス後の

ある秋のわつさうめ、支考

字断らまとも、秋季ふ連さらむ秋さるべし、発句と秋季のいりらひあるべ後の字ふ及ぶも、

八月

野口念佛 十五日 播州加古郡教信寺ふいろこれと野口念仏といふ清和天皇の御宇教信とふ者あり、姓氏詳ふ〳〵、或ハいふ南都興福寺の住僧永西坊の牙子あり、加古の駅舎の北草庵と結び常ふ西ふ向ひて称名念仏を性仁愛ふて旅人の荷を助け労を救ふ貞観八年八月十五日完粟の郷ふおいて盗賊のうふ殺さるもぬ首ハ教信ふ庵ふ贈ふぬ骸ハ其地ふ葬る、毎年八月十五日僧徒多く教信寺ふ集ふて仏事念仏をし、数書の畧ふ云播州勝尾寺ふ僧あり、勝如と名く、八月望の夜一僧来ふて

門と敲く即迎へ入る客僧い人（吾ハ播州加古の教信）念仏の功力ふりて今宵極楽ふ往生もろ（尊僧ハ必）翌生の今宵往生もべきといひとおりて去る時ふ空中音楽きこえ明年八月十五日の夜果して死せり、

後の彼岸 春秋の彼岸ハ昼夜等分ありて長短ふし、仏道ハ中道と崇ふこの時節まとふ中道の辰こ故ふ仏事と修も提謂経ふ浄土三昧経ふ八王子ハ善と修まるとこえり八王子ハ彼岸ふわるる八王子と八立春、春分、立夏、夏至、立秋、秋分、立冬、冬至是也天神の諸神陰陽交代もる時ここの日梵天帝釈鎮臣三十二人司命司録閻魔大王八王使者悉く出て四方と巡り見人民の善悪を校へ録ととり故ふ善事と修まべきこ

善道寺大師観経紀 念仏して西方往生の願行とおもふハ冬夏の両時と取まこ春秋の二節ととる仲春一月仲秋八月両時ハ正東より日出て真西ふ没る弥陀仏の国真西ふの没所ふあるこ故ふ弥陀の在所と衆生ふ指示して往生ととげもむる

後の出替 紀事 雲橋類要ニ云秦の人本家婢を得て一子と生し妻こと悪こ乞て隣家ふ與ふ都家人ふ富貴あり本家貧し後二月二日と以て取帰こ后復本家富隣マ貧し和俗二月二日と家僕の交代の節ともるこ元此ふ本くる後三月二日八月二日ふ

野分 月令 仲秋月旨風至注ニ旨風疾風也 倭名抄 暴風漢語抄 ハヤテ 和名抄 乃加世 二句こ中暑又枯野も色の字ふ

野山の色 御今 ヒロクモル 秋こ植物ふ

野菊 野原ふ自然と生ぜる菊と云こ花葉とおふ菊ふ似て小こ褐紫の花多し稀ふ黄花ありとて是上古より本邦ふ有る菊こふ毒あり食ふべからずと云り今人家ふ植て翫のぐ

鴉 ふの中ふ唐土より来る上古ハ野菊の外ふ和漢三才品会 按もろふ俗ニ云野雁こ頭頸灰白色背の端黒く其背ふ黄赤紫の紋文あり翩深黒褄正白脚掌蒼黑ふ

九月

後の雛 滑稽雑談 和国の女児雛遊后の趾及璞ふ〻〻〻ととるもの古き物語ふも出り上巳の節ふ拠ありとは今又九月九日ふ賞もる女児多し源氏物語ふハ常も

雛ゐそびもとゝそえくるもの、重陽ふかてあそぶ左もゆゑ
う、俳諧是と名づけて後の雛祭とそ、後とハ上巳ふ對
して謂ふ

後の月

志の部十三の
夜の条に注ス

野の宮ゝ別

桂川の御

後山城国葛野郡小倉山の下椿原ふいわゆ伊勢七
齋宮始此所ふ栖ゐ給ふよりて、伊勢太神宮を勸
請も、此所嵯峨野ゝ故ふ野の宮と称ゝ延喜式ゝ齋
宮の親王定ても畢ても、宮城の内便ゝ所と上して、
初齋院と、後禊て乃ち入ル明年七月ふ至ても此院
ふ齋も、更ふ城外の浄野とトし、野の宮と造ゝ八月
吉日をトして河ふ臨ても後禊して、即チ野の宮ふ入ル云云
○野の宮の別とハ齋宮ゝ爰ふ籠らせのへて、二年めの九
月伊勢へ參ゝ給ふとき、天子へ御暇乞ふ奉内しふゝ、
此時天子御手づゝ、由豆の爪櫛と齋宮の御頭へさし
給ふと云ふ事と別の櫛と申とゝ、是ふよりて伊勢齋
宮ふ移ゝ給ふゝ故ふ野の宮の別と申ゝ（この爪櫛ハ素盞鳥尊稲田姫
ふうつけ給ふ因縁と以て齋宮ふうつけ給ふ）又別の御櫛由豆の爪櫛
皇六年、天照御神と豊鋤入姫の命ふ詣して、大和國笠

日本紀 才四 崇神天

縫の邑ふ祭ても、云云 同書 豆才六 垂仁天皇廿五年三月天照
太神と豊鋤入姫命ふ離ても倭姫の命ふ託ふ給ふ云云 同書
才七 景行天皇二十年、二月五百野の皇女とつかしして天照太
神とまつりも云云 三代ゝくゝのゝくゝまる故ふ代々皇
女と伊勢へ奉ても宮仕させ給ふゝ、天皇即位の後親王の内
處女とえらゝ太神宮の御給仕と定給ふゝれとト定とふ、
内親王ゝきとえハ、諸王の姫君をハ定ゝる例ありゝつれ
ても定め奉ても、二年めの八月ゝより翌年の九月迄野の宮ふ
ゐます、此間三度の神事三度の祓ありゝて土御門院兼
元二年、四十一代の齋宮、後鳥羽院の皇女秉子内親王の後、
此事断絶ゝとゝ、○九齋宮群行ハ九月十七日ゝ、其前
日桂川ふおいて祓禊と修ても、桂川の御祓ゝ云ふ、

残菊

菅家文章 黄花之過重陽世俗謂之残菊

桂川ハ山城國葛野郡ゝ流ゝ、

残草

藏王

菊の異名

ゝ、接ぎるふ万花ふ載
ゝ、残菊の宴八十月
五日ゝ、冬の部ゝるべし、
おくれ残る故の名ゝるべし

野山の錦

くの部草の紅葉
の条ふ倍せ注も

との部ふ

倍せ出を、

く

七月化生

五雜組 歳時記云七夕ふ俗蠟を以て婦人子ふ宜しきの祥とす、こゝを以て襄見と作り、水中ふ浮へ以て婦人子ふ宜しきの祥とす、こゝを以て襄見と化生といふ、王建詩云、水拍銀盤毛井化生、是之今の人泥塑嬰児或ハ銀範を以てもる者、化生と

苦丹

苦丹

ものもとをもりて七夕の戯あるとをもらぶ、

と龍膽といふるハ誤

觀音艸

草花肆ふあるものの巣、蘭ふ

ふり、龍膽の条ふ注へ、似て少く狹く短し、石菖ふ似てものきゝ〳〵、六七月莖と抽でふ花とあらく〳〵穂とるも淡紫其蒼さきさ愛もべ〳〵然るふ大和本草ふ、觀音草ふハ、觀音草無花無穂といへり、京師の俗中元の日此莖を以て蓮の飯と縛ふ觀音草の名義ふ、

常山花

和漢三才圖会 根と常山と名くけ、巣と蜀漆と名く和名久佐ふ似て團く尖て、畧皺て澤あり、巣梓樹の巣紅雜ふて澤あり、其葉甚ど臭し、高さ丈許、六月細花と開く、白攢る、

常山の虫

同上 蟲ハ此木株の中ふあり、蝎木の心と蝕ふ、六七月株と破てれを取用て疳の藥ふ入る、或ハ炙て小児ふ食〳〵む、凡蝎を取の法虫ふある木ハ株ふ必小き穴あり、管を以て水と中ふ入るもべ、虫首と穴より出も、輙木を剪両端と縛りとゞもと探り得る、

粟奴

和漢三才圖会 粟の苗ふ穂と

ふを時、黒き煤と生る者、

鑣蟲

和漢三才圖会 轡虫俗字正字詳ふ〳〵も、按ずるに

類の奴麥の類の如し

ふ此虫莎雞のごゝひ、翅青く腹黄色、前脚長く疾走

て跳る、毎ふ穴ふ出入もる故ふ獲ごゝし、秋鳴声馬の轡

の音ふ似さり、

蛁蟟

時珍曰秋月鳴て青

因て名づく、紫ふる者蟪蛄ともて、

兼三

秋物

降り月

滑稽雜談 即説ふいふぐり月ハ

然るに居待月の頃より、廿一二夜迄の月次第ふ魄と生ぞ十六七夜の既望もぐる月といふ、

ると、望ぐりともぐり月ともいふ〳〵、藻塩草の傾くの

義も捨べらぬ、

葛、同根と堀

真葛ヶ原 和漢三才圖会

真葛 其葉韌薄く

楮の葉ふ似て面青く背白し、凡至ハ〳〵翻る恰も

掌を反もごとし、婆娑〳〵て声とるも、故ふ哥人葛の

葉の裏見と称し人の恨ふあらん、[大和本草]根と冬月或ハ春いとぐ苗と生ぜざるときほりて用ふ長きこ數尺乾し用ふ葛根是〻云、古式八月の季ともて不審、○真葛の真ハ和むる辞〻、真葛ぐ原ハ京師知恩院山門の南ふあり、ら〻ども只、葛の生ふる原といふかる歟し、

花壇

[貞享式]今按ぎるふ花壇を花畠も決して秋ふ定むべきこ、

草の花、草の實

諸草のこぐい春夏ふ花を開く者あまど、秋多き故無名草花と秋とを、實もまこ然て、[古今]みどりふる ひとつ草とぞ春ハ思し秋ハいろ〻くの花ぞ咲りける、

栗

芋

その部蓮芋

觀音寺梨

近江國長浦觀音寺より出ッ微赤く甚ど大ふらず、漿多く味甘〻、口中ふ消るがどとし、

九万疋

鱈一名九万疋とゝ云ふの部鱈の条ふ注を、

八月

桑名祭

十八日、春日大明神の社數州桑名の城下、あり、祭る神四座別當仏眼院説ふ云經津主命ハ、神護景雲元年下総香取の宮より勸請を又武甕槌命ハ、正應二年八月十八日常陸國鹿島の宮より勸請ふ天児屋根命姫大神ハ永正二年八月十八日伊賀の名張より勸請あり、毎年八月十八日と以て祭辰とふすと、元應、永仁の月日とはるとと修をとりつ、○先十七日、社前の南北ふ車一輌つ〻飾夜ふ入て試乐あり、翌十八日祭礼のとき、件の車を南北へ引渡し音楽を奏を明和十年の春回禄以前ハ、両社六座〻、北三崎の神社三坐南春日の神座三坐共ふ往古ハ春日鎮坐の日と以て祭る回禄後祭礼延引を、三崎大明神ハ土地の神〻、鎮座の年月詳ふらず、凝洲寄鳥洲寄泡の州寄合せて三寄といふ、又七月七日の神事あり、氏子貞弁川ふ於て石とゝ来て両社ふ献ぜこれを石取の神事といふ此日囃遠物と出を、○此八月祭と天武天皇の祭礼と記せる書あり、日本紀ふ天武天皇元年九月朔車駕還伊勢國桑名宿てゝ云、今駅中ふ神社あり、ふりて誤

苦参引

時珍曰苦ハ味と以て名く、参ハ功と以て名く、[和漢三才圖会]其記を、

秋

花莖の梢ふ穂とあを、七八月開く、莖根葉とゝふ薬用とを故ふ根と連ねを採る、

藥堀

秋野山ふ出て藥草とゝるゝ状、苓突なと句ふゝりて秋とゝるゝ、虞美人草 和

本草 名花譜云花四瓣色艶罌粟ふ類ゝこふ園史云呉俗呼て虞美人草とゝ云、是ハ四五月花とひらく者〳〵 花彙 美人蕉 紅蕉花 此芭蕉の一種 類說 褒斜山谷の中ふ虞美人草ゝり、形鷄冠のごゝく、大ゝして花ふゝ、葉皆相對て、或ハ虞美人の曲を唱ふれハ兩葉撫掌〳〵く頗る節拍ふかゝうゝ知し、〇鷺水ゞ新式ふ口決ありとゝふもの何しの草をゝ〳〵ゝ、

栗茸

和漢三才圖会 山原ふ生ゞ高ふ過ゞ、織四五分円く卷正白色剥ゝる栗の肉のごゝし、故ふ栗茸と云、

下篠

をの部落鮎の条ふ注ゝ、

九月菜

きの部菊酒の条ふ注ゝ、

栗の節供

きの部菊の節供の条ふ注ゝ、

黄の袋

併せ

九日小袖

菊襲 清最正徹記 九月衣類菊襲面白裏紫ゝ出ゝ縹色の小袖と着し、互ふ相賀ゝ、是と九日小袖と云、〇地下良賤今日

鞍馬祭

九日 諸神記 鞍馬寺由岐の社

天慶年中勸請ゝ、神社答蒙 叡の社ハ山城國愛宕郡鞍馬山ふあり、祭る所の神一座大己貴命 〇此社ハ天子不豫世上騷動の時、叡と此神前ふ懸く、故ふ由木と号ゝ蓋大己貴命少彦名とゝふ疾病と療〳〵、天下と治るの神〳〵とゝを ゝて五條天神及當社ふ叡とゝるの遺法ゝり、或說ふ祭ゝる神素盞烏尊とゝて、例祭九月九日〳〵八日の夜氏子の男女供物と旅所ふ献ゝ、

勸學會

十五日 三月九月十五日 一年両度行ゝ當日神輿本社ふ入、三月の条見合ゝ〳〵、公事根源 勸学院ゝの大学の南ふ此院と立ゝ〳〵ゝハ南曹とゝ申ゝ各嗣大臣遠き慮ゝ ゝかゝ〳〵ゝるゝ、子孫親族の学問ゝ〳〵ゝふ建立云、

呉服祭

あの部穴織祭の条ふ併せ注ゝ、

胡桃

庖厨本草 此木ゝ〳〵ゝふ似て最も大ゝり、其実核円く大く、色淡く皮厚く硬くして破ゝ〳〵ゝ、仁脂多く味最も美し、

槇櫨の實

蘇頌曰槇櫨の木葉花実酷く木瓜ゝ類ゝ、木瓜ゝ比ゝれハ大ゝして黄色ゝ、惟蔕の間とゝるゝ重蔕乳のごゝきものあり、此則槇櫨

大和本草 花ハ林檎又海棠ふ似ておくゝして開く、實ハ秋熟す、

九年母 大和本草 俗ふ九年母とい〳〵名義未詳、木ハ蜜柑より長〳〵やゝ早く実る、

栗 事類合璧 九月霜降て乃ち熟す、其苞おのづから裂て墜者久しく藏むべし、苞裂ざる者腐易し、○落栗、毬栗、焼栗、栖栗、紫栗、剥栗、打栗、出落栗、三度栗、山栗、雖栗、搗栗、各頭字の部ふわらちて洗、

熊栗架と搔 時珍曰熊、石巖枯木ふ在て山中の人ゝとと熊館とゝ、世よく木ふ上り好て栗を食ふ、故ふ攀緣て梢ふ至て、枝を折て並〳〵鋪て居所と設く、是と熊の架とゝふ熊館の類ゝ、

茱萸 和漢三才圖会 胡頽大抵三種あり、其葉と實少〳〵異とあるのゝ、一種春月ュ當て苗と種る時實熟す、大さ小棗のごゝき者ゝと茱萸代胡頽子と名く、一種九月実熟す、大さ棗のごゝく莖長くして下ュ垂ふ、一種九月実熟す、小く其大さ櫻の子の如くして簇り生る、

草牡丹 大和本草 葉ハ牡丹ュ似ゝり、單の白花とひらく、實牡丹ふ似ゝり、宿根よりて生ず、又實とおきて生ず、是又牡丹芍藥の類ゝ、

草の主 菊の異名 堀川百首 うだくの

草の錦 野山の錦 草木の紅葉と錦ふゝ〳〵こいふゝ 新続題林 織いろと錦 秋の匂ひいろ〳〵菊の花うべ草の花ゝ〳〵ゝ生匡房

草の紅葉、草の色、 下ュ簗の破壞ゝ

朋魚簗 とい〳〵魚簗の形狀の野ふゝ〳〵咲ゝ花の千種ハ 邦忠、

暮の秋 暮て行秋とふ秋の暮ふ混ぜゝ、

九月 春の部上り魚簗の条ュ注也、

盡 九月の晦日といふ、

や

七月

柳散 晉史 蒲柳の質秋ふ望て先ヅ零ス、

八幡安居の頭 十五日 紀事 凡安居の頭ハ大経營ゝ故ふ三年以前この頭人と指点も、先前年の十二月朔日ゝり翌年の十二月十五日ュ至ゝて八幡山下の卿家安居の頭と勤む、即家村里中の長とゝふ、その土地の中ふて姓氏あゝ者ゝり、又十二月八日今日石清水安居頭人の宅ふおゝて、

達所小綱の神人長吏の補任を授けこれを指部といふ又十二月九日頭人の宅ふ御家衆を饗應し能拍子ふかりこれこと古那志といふ是小習礼の訛なり又十二月十二日頭人夫婦、杉山不動堂の前ふて垢離を修をこれこと精進入といふ又十二月十三日頭人浄衣を著し七所の社ふ参り奉幣なり、頭人の婦も又これこと従ふ並ふ御家烏帽子浄衣を著し奉供をその行粧甚ご古風あり、放生川ふ橋二ツあり、一ハ安居橋と名く是安居當人の渡る橋ノ常ふ不浄の人を禁ず頭人これを渡ヨバ今日山上相知る所の社僧の坊ふ止宿して精進潔斎をる、この間西班桂の里ハ女子孫夜又白布を以て頭髪をつゝみ未ッて桂飴を捧ぐ是を桂帽子と称ず今京の童謡ふいく桂帽子是ノ十月十五日安居頭人夫婦社参、本社の前ふ大なる松一本建く、白布二疋とその上下の枝ふうけ人をして仮ふ猿のまゝふ〜てその松ふ登せそのうけ布の枝を伐携て頭屋ふ帰ず、後代修頭の紋ともなる

糒米 本朝食鑑 今製もてる焼米ハ青稲を以て稃糠と去り炒り過して食ふ是を春ふ糒米といふ、

此を焼米と称ず甚佳味ノ勢州荘野の市上ふて焼米を造る青麥艸を以て俵子と作りこれを裹ふて四方に送る、

藥師草 弟切草ノ

益母草 めの部をるべし、

灸花 日くくせコ 嫩ある蔓草小白花をひらく内微紅ノ児童其花をとり唾ふて莖付方を上ふて手足或ハ頬ふ貼るふさるぐら灸のごとし、依て名ず○是和産ノ其蔓葉女青ノ似て七月葉の間ふ筒咲の花をひらく五瓣ふて少しく瞿麥の形あり、

やんま との部蜻蛉の条ふ出、

兼三秋物 和漢三才圖会 和名夜万都伊毛、俗ニ夜万乃伊毛今云長芋其根の長さ尺ばかり周ず二三寸灰黄色肉白し、煮て食ふべし、

萩荒本草 葛蕎溪の辺ふ尚と出し時時凡水ふ感じて鰻ふ変ず半変をる者とる人往々あり、○此者葛蕎とハ葛藥とハ又山藥とハ初め唐の太宗諱と蕎とハふ因て辟て葛藥と改む又宋の英宗の諱を葛といふ因て山藥と改む、

焼帛

貞恒秘藏抄 焼あとハ馬ふどの尾髪ときつてたきみてその余りを焼て田ふ立る〉其髪をとりぎて鹿のまゆぬ〉そをと焼

八月

八幡祭

放生會 八月十五日堵国放ち鳥 此をいけりといへども、男山の神夏と以て京師の人八幡祭或ハ放生会とふ、社頭美豆の南八九町ふあり、京と去ること四里余、男山石清水と号、或ハ雄徳山鳩の峯と称も、欽明天皇三十一年冬肥後國菱形の池の辺、民家の兒三才の時、神託して云、我ハ是人皇十六代譽田天皇也と、是ふよりて豊前國ふ鎮座して八幡太神と称も、傳へふ貞觀元年秋七月、八幡太神鳩の峯ふ移る、こゝ迄釈の行教南都大安寺ふ居る、これ僧姓ハ武内大臣の裔〉曾て貞觀の初め、宇佐の神祠ふ詣づ、一夏九旬、昼ハ大乗經と説、夜ハ密咒と誦も、一夕夢中ふ太神告て云、師王城ふ帰らゞ我も又随ひ行、王城ふ居て當ふ皇祚と守るべしと、行教やうやく山城國山崎ふ至る、その夜太神又夢中ふ告て云、師我居る所と見よ、と、覚てこれをとゝ、ハ東南男山鳩の峯ふ光と現も、行教これと奏して宮殿と成る、○正殿三座中ハ八幡宮應神東ハ氣長足姫尊神功西ハ比咩大神主依姫後崇峻天皇源の姓と諸皇子ふ賜ふ時、八幡宮と氏神〉此社と以本朝才二の宗廟〉をとまふ、毎年二月十日初卯の日神祭ありふ、和神楽ふ准ぎらる、八月十五日放生会あり、養老四年九月征夷の事ありふ、大隅日向の両國逆乱をよりて宇佐の宮ふ祈請せしめるふ、その祢宜辛嶋勝婆豆米の神軍と率て、かの國と征し畝と討て利あり、大神詫して曰、合戦の間多く殺生ありき、宜く放生会と修もべしと、諸国の放生会ふ始る、○紀事 今晩神と輦中ふ迂し奉り、神幸を促も、左右の馬寮卿馬三疋と幸、召使、宮掌、外記史左右兵衛の府ふ参詣、上卿左右兵衛府上臈、前駆ふ紺屋殿ふ参ず、向ふ神輿猪の鼻と下り、病院頓宮ふ至りて行列行幸ふ准ぎ、この式後三条院延久二年よ〉始る、當社の祭式甚ぎ繁多〉故ふ略も、

八束穂

豊年の稲の穂のこと

山雀

和漢三才圖会 狀畫眉鳥 ふ似て頭黄白ふ赤色と、もゝのいと長きといふ、帯ふ眼頷の辺ふ黒き條あり、背灰赤色、胸尾とふ黒く腹淡赤く世慧巧ふ〉轉る、好て胡桃を食ふ、

紙撚の輪を作て篭中ふ設くる時ハ飛て其輪と潜り別ふ箱と篭の隅ふ安て宿處とす○此鳥藝とよくしへて故ち鳥乙由

敗荷

注不及ハ

九月

中巳午ノ日 周防国吉鋪郡仁壁の神社、九月中巳午日祭礼を行ふこれを山口祭といふ山口の古名ハ仁壁の庄故ふ仁壁の神社と号ス祭る神住吉三神と以く本社とし、合廿祭る神二神味鉏高彦命下照姫の命各一社以上王殿三社もぐ〳〵仁壁の神社と号して又織機大明神とも又稲宮とも称も衣食のことと主りるふ神ふるふりて此号あり祭礼のうゞを織機の神夏あり次の日神幸神輿三座本社の西神幸の地ふ出し奉る流鏑馬ハり、皆国主ありこと執行ちらる有司ありて国主の拝礼あり又六月御田の祭ハり鎮守の年月詳ならず人王十一代垂仁天皇の御宇、勅幣と奉らるその傳記失散も、

八幡花の頭

廿日紀 東

山城国八幡山の社僧九月廿日花の頭と修も先六月ハり撰ちゞめて花臺と造ること地盤剥とふ我俗板と割と序とふ又剥とふ是板を剥て臺と製るの義ありり花の頭とハ社僧の弟子髪と剃衆僧の列ふかるのとき、社僧と饗もふ彩箋と以て草花と製し臺と神前の廻廊ふ飾り酒宴の興を催も故ふ花の頭と称も、

山路草

菊の異名〇すゑとをき山路のきく〳〵爺の柄のくちぬるのちも猶やおらん 前内大臣實

焼栗

焼くる栗ふ、

山粧ふ

即遊録 秋山明淨して粧ふ如し、

破蕉

芭蕉 芭蕉翁移芭蕉詞ニ云唯この蔭ふ遊ひて凡両ふ破と安きと愛するのこと云

漸寒

次第ふ寒きとふくこと

ふて秋の末の寒さを云、

ま

七月

槙賣

ろの部 六道恭

の条ふ出、

曼珠沙華

大和本草 金燈花、鐵色箭とも云、月令廣義ニ曰冬春葉茂り夏月花と生して葉死る花葉相衛らざる此花下品ふ其葉石蒜ふ似ること一類ふ此花を國俗曼珠沙華と云翻譯名義ニ曰曼珠沙ハ此ふ柔軟又赤華とふ酉陽雜俎曰金燈草俗人家ふこと種ることと悪ふ一名無義草と云、

花ひらくときハ葉おし、葉ひらける時ハ花ゑ〳〵、○俳書ふを曼珠沙華、石蒜同物ともといへども、篤信翁の説ふ従ひ石蒜ハ草の部ふ入て注を、

松虫

和漢三才圖会 蟋蟀の類、褐色ふして長き鬚、腹黄ゑ、野草及び松杉の籬ふ在り、夜羽を振て鳴声知呂林、古呂林といふごとし、甚だ優美ゑ、凡松虫鈴虫昼ハ得がたし、夜燈火を照す時ハ光りて慕ひて来ると捕へて籠中ふ畜ふ、○今俗うりんくと鳴と鈴虫といふハ、ちろし、是松虫ゑといふり、鈴虫ゑ、チンチロリと鳴といふと、

兼三秋物

眞夜中月

廿三夜ゑ、子の刻ふ出て午の

十寸穂の芒

無名抄 穂の長さ一尺ばかりなるをいふ、彼ますかがゝと万葉ふ十寸鏡と書るふてゝろ得べし、

真蘓宇の芒

同上 真の蘓枋ゑと、といふ心ゑ、真蘓枋の芒といふべきを、詞を畧しゝるゑ、色深き芒の名ゑ、

麻苧穂の芒

同上 真麻の心ゑ、是ゑ俊頼朝臣の哥ふよみて侍る、ますかの糸をとりうけてと侍る、糸ゑ、の乱れるゆゑ〳〵 堀川百首 花もてきまをかの糸をとりうけて たえぬと人とおりかゆるゆゑ 俊頼 ○まそかの芒とハ穂の赤きをいふ、ますかゝまそかゝまそかゝまどいつるいとゑ詞の轉じゝるゆゑかをハ赤赫の意ゑ、そして各別種ふ注するハ誤ゑ、

松尾梨

清水濱臣の考ふり、形観音寺梨ふ似て雪のごく紫少く甘し、奥州會津の中、松尾の産ゑ、今洛の人家所々ふ接得て、頂妙寺杼と一双ともといふ、

圓梨

青梨の種類ふて大きく、皮薄く色青くして甘美ゑ、

八月待宵

八月十四日夜孫明復詩云、銀河無声露暗垂、玉蟾初上欲四時、情樽素瑟宜先賞、明夜陰晴未可知○待宵とハ翌の夜の晴曇りはかりがけもゑ、先今宵月を賞するゑ、

松茸

和漢三才圖会 凡松待とハ翌の夜の月を待義ゑ、尊ハ山城の北山の産最佳ゑ、赤松の陰所秋の雨湿の為ふ醸さるゑて生ず、初め落葉を戴きて見ずゝ、漸く長ずる者三寸、頭四く柄あり、鼓の槌の如ゝ、其大さる者尺ふ近し、日を經て傘と発く、外の色黄白紫を帯内白く

細く深く刻ミあり其柄太き者柔かし 舞蕈 [同上] 湿處或
て味良し八九月の交盛なりかくて、
ハ朽木ふ生ず、繖柄あり一株片々と叢生す、
火炎茸の如くして上黒く元白く味脆く甘し、

間引菜
貝割菜 摘菜
小菜

[和漢三才図会] 凡蕪菁蘿菔の類、大抵
八月種を下し彼岸中ふ苗を生ず、其嫩葉
を抜て煮食ふ摘菜間引菜是也云々又曰苗を生じ地と出
るを一二寸、漸く茁て二葉あるを蔬と号す是を貝割菜と号

猿子鳥 [和漢三才図会] 正字未詳状大さ雀のごとし
全体灰黒胸腹淡赤し羽灰黒色ふして
黒き彪あり尾の下両端ふ白き者二つ其觜短くして赤黒
く脚黒く頂灰黒頭より胸ふ至て淡赤ふして白き圏あ
り千葉菊花の紋の如し、
猿ましこ照ましこ大ましこあり、

豆鳥 [豆甘美] 豆廻 いの部桑扈鳥の条とみるべし、

[九月]

豆名月 八月十五日の月と芋名月といふふ
對して十三夜の月と豆名月といふ、

升市 すの部住吉相撲会の条ふ出ッ

鞠花 菊の異名也 [蔵玉] ふ云えより、龜文曰按ずるり
菊の字本蘜ゟ作る、蘜ふ従ふ、蘜ハ
音キク訓マリ又鞠の如き形とふ云也、

榲桲 蔵器曰樹林檎の如く、花
白緑色 [まるめろ] 此種蕃邦より渡りて此訓ハ則蛮語
なり、今京師ふ多し、梨子の如く風味も又梨子ふ似て
少しうるし、せいことゝいふ菓子ハ
ミ是ふ砂糖と和して製しある也

豆引 [和漢三才図会] 菽 俗作荳 角
を莢といひ、葉を藿といふ、茎を萁といふ、本綱ふ載ある穀
の總名皆菽といふ、大豆ふ黒白黄褐青斑の数色あり、
大抵夏至十日以前種を下し、
七月花をひらき九月莢を結ぶ、

正木の蔓 真淵翁云まさき
のかづらハかと常磐なるかづらをいふべし、ちれバ
いとうつくしく神社ふよりて用ひられしハ、さまぐ゙なるつぎ
中ふ、襷とりし鬘とせしハ一種有りん、古今集ふ深山ふハ
あられふるらし外山なるまさきのかづらいろづきにけり、
とよみしハかでて常磐なる草木も冬のはじめふハ去
年の古葉色づきて落るものなるが、山の岩木などふ這ふる
ところのかづら、其葉ハ南天燭ふ似て黒ミあるが冬のはじ
めふ、えもいはずもみづるなり、是ぞ山行時もそら目て

つきてこゝろとバ右のごとくハよみつべし云く〇真淵翁の説ふよるときハ定家葛よ似たり、俳諧よ秋季と定めたるハ古哥ふ色づくとよめるあるべし、

冬青の實 [和漢三才圖會] 冬青其葉冬もとのごと正青く光澤あり、四長やして尖らず、軟なる鋸歯あり、夏小白花をひらき、秋実を結ぶ、生ハ青く熟すれバ紅ゐ、おのづから裂て中ふ白子あり、枝をさして活易し、藩籬とするに堪ふ、

ゆてバなひ [大和本草] 櫧の一種之、葉ハ櫧ふ似て厚く大之、色深青、面ふ光沢あり、屋材とし器を作り舟の櫓とし、其用櫧と同じ、一類別種之実ハ櫧より大之、餻ともて民用を助く〇実を以て秋とし、

櫧 [和漢三才圖會] 其実棟の子の如くふして小く簇りなる、生ハ青く熟すれバ淡赤し、裂て内紅子三ッ四ッ粒あり、其葉秋ふ至て紅なり、

松の實 志の部松子の条ふ注を、

け

七月

今朝の秋 立秋をいふ、

牽牛 志の部二星の条ふ出、

夏解、夏書納 夏ハ四月十六日入七月十六日解、是を夏解といふ、一夏九旬の間、他の化益の為ふ聖經及び名号題目を書寫し夏終るの後是を堂塔伽藍ふ納め、三界万霊ふ回向す是を夏書納といふ、在家も亦此ふ效ふ、

夏解草 [釈氏要覧] 僧尼解夏の日蘇を以て節と束ねて檀越ふ遺る、是を夏解草といふ今この草を詳ふせざるふ已ふ五分法身の座とす故ふ吉祥草と名づく、[漳州府志] 四時一色泉石の中ふ生じ山村の人瓶ふ挿みて先を祀る陰字ふありとふ亦と葱翠ふして凋まず家ふ吉事あれバおのづから花開く故ふ吉祥草と名づく、[字彙] 茆ハ伊叉反音印、草の名之、[大和本草] 夏解草ハ麥門冬の大なるもの之、

[兼三秋物]

玄兎 月の異名之〇謝荘月賦ニ云引玄兎帝臺〇つの部月の兎の条ふまよしるべし、

月宮殿 つの部月の都の条ふ出、

雞頭花 時珍曰雞冠花の形を以て名ふく、春苗を生じ夏ふ入て高さ者五六尺、短き者纔ふ數寸、中略六七月梢の間ふ花をひらく、紅白黄の三色あり、中略花最久ふ耐ゆ、霜の

後始てけいも 鎮江府志 草も蔓も花も實も山菜焦る、黄獨 ふ類も、葉大ふ〜てゐ〜田く根ハ芋ゝ如くゝして髭あり味微苦し○正字白石子 蓋俗ふ何首烏王とゝ者是ゝ 枳根 枳根ハ実の名のゝ、その実大さ大豆の如し、こゝと喰へハ少しく梨の味あり、小兒疱瘡皇穴閉ゝるもの、こゝと以て其鼻穴を穿つ、

八月 けふの月

つの部月見の条ゝるべし、毛見 紀事 土民年の貢と納る凡秋米収納をるの法晩秋ふ縣吏先て田地の立毛の善悪を巡検を是と毛見とゝふ草と毛ゝ〜ふ故ふ稲未ダ穫さる亦立毛とゝ〜、罌粟子蒔 月令廣義八月十五夜罌粟子を種まバ花盛ゝて繁し、

七月 舟形の火

部施火焼の条ふ出る、古枝草 萩の異名ゝ 藏王 宮城野露も色ある古枝草ことしの秋も花ハ藤袴 和漢三才圖会 高さ二三尺巣女郎花の巣ゝ似て切叉あ〜、ささゝゝり西行

六七月細き白花を開く古今云藤袴是ゝ 俗名抄 蘭和名本草云布知波加萬新撰万葉集別用藤袴三字 大和本草 真蘭和名藤袴又ハラ、キ〜とゝふ古哥ふらふとよめり八雲御抄ふ真蘭を ふぢむらまとゝふと書ふ葉ハ麻ふ似て両岐あり香ふし、乾て弥香し是真蘭ゝ野ふあり秋紫白の花ゝ〜ふく若葉ハ胡麻きて食をべし其芳香美味凡菜ふそまさり詩經楚詞ふどふ詠ぜ〜蘭是ゝ 和訓栞 花の色をそ藤と称し其瓣の筈をとゝ〜ふ袴と称す、○袴ふ同じ古今 何人ゝきてぬぎうけし藤袴ゝる哥俳諧とゝふ同し 秋ぶどふ野べとふ名ます 曠野 藤袴ゝれ弱窟ふのそつらゝ蕚

筆津虫

〜〜蟋蟀の異名 異名分類 古き筆の化〜とゝふるといとり〜ふそつむ〜秋も今いと浅芽生ふそつむ〜ちゝる声ゝきゝれゝ

兼三秋物 臥待月

八雲御抄 子待 卧待 廿日月ゝ 桂明抄 永徳の頃為重卿廿日月とゝふ題ゝて八ぞゝまこゝつの月の卧待ゝ猶宵の間ハをきて出ゝき臥待月ハ雲ふ廿日月と遊さゝとゝ〜ぞ望月ふよりて廿日月ふ詠八八ふ審ふくゝども月の百首ふ〜ぶふ八十九日の月ゝ〜〇一説ふ卧待

月八十九夜の月〻
又寐待月ともいふ、更まち月 日の月まり、藻塩草 筆柳
形ふう〜 蒲萄拵 俗柳 本朝食鑑 俗蒲萄拵と称
て長し、 或い蔕拵といふ味佳すこと
いへとも用
とふまじ、

八月

匏 ゆの部 夕顔の
実の条を注せ、 木芙蓉 桑
者之也と草芙蓉といふ荷の花是也陸ふ出る者ニまと
木芙蓉といふ時珍曰此花豔〻〻荷の花の如し故芙蓉
木蓮の名あり、八九月始めて開く故拒霜と名く、中 冬
凋て夏茂ると秋の半始て花と著く花牡丹芍薬ふ類
紅白黄千葉の者あり、最も 蒲萄 時珍曰春月萌
寒ふ耐て落ぢ實と結ぶ、 芭を生じ巣頭
る 括樓の巣ふ似て五の尖りあり、鬚を生じ蔓延繁
丈と引、三月ふ花とひらき穂とあまと黄白色実連り着く
ニ星の如し、七八月 蒲萄酒 時珍曰蒲萄酒ふ造
熟せ紫日の二色有、 るべしそもと酺飲もし
ハ陶然として醉ふ、
故ふこの名あり、 袋洗 山海名産畫会 伊丹あて新
酒成就の後猪名川の流ふ

袋を濯ふとのころと待て近郷の賤民この洗瀝をこ其風味
薄き醴の如し是又他ふ異あり、 賤の女や袋洗ひの水の汁
鬼貫〇青藍云鬼貫の先吟も
あれ、秋季ふて子細ふ云へり、 二季鳥 雉の異名 藏玉
と古里とて二季鳥ふ云
ふ云へ行ふ〜〜ん 忠岑

九月

不堪田奏 江次 述不
堪佃田の申文 九月七日 或八五日 公事根源 是八諸国の田の損亡ふる
所々の目録として奉ふ色ふつきて組税と三分二ふ免し
ふ云へとあり、ふ云ふ諸国より坪付帳と奉れ、大臣庫ふつき
てちぶ申て、諸国ふ施行あり、〜作ふ堪ざる田と云ふ、
ろふて不堪田と申あり、 二夜の月 志の部 十三
夜の条ふ注せ、 福王寺祭 ふの部
鳴滝祭の
条ふ〜〜し、 佛手柑 和漢三才畫会 其樹柚ふ似て刺ふ
全く柚柑の葉ふ似ぢ、稍大く淡
青色筋理顯然として畧多羅の葉ふ似て夫 緑豆引
らも 大和本草 昔本邦ふ色ふし近世来る、
大和本草 緑豆一年の内ふ二度実る故ふ
八重生とて八〇苅收ると引といへ、 佛甲草 大和本草

京都及び諸州ふ一夏草といふの是ゝ又根あり一豆と云、根鬚あり葉ハ細長くして尖さり莖さ折て上ふ挾めば能生ス滑稽雑談或説ふその葉の形指の爪ふ似さり故ふ仏甲草とも仏指甲の名あり此草の葉生ひ出て石地ふある形蓮花の如く故ふ岩蓮花といふ篤信ハ此ゝ多ゝ〇岩蓮花ふあらざるもバ佛甲草ゝ雑物ふ

冬之部

七月

待冬と隣 注不及

夕踊の条 御霊七御出 十八日御昊の社ハ上ハ京都の北西ふあり下ハ京下ふ出、

極大炎御門の北ふあり雍州府志此社始ハ近衛通新町ふあり上御霊ハ京極の西出雲寺の北ふあり上下御昊の社毎年七月十八日御出八月十八日祭礼あり神輿二基ゝ御昊ハ所ハ崇道天王伊予親王吉備の聖天藤原夫人廣継藤原夫人橘逮麻文屋宮田丸火雷神ゝ世ふ火雷神と謂て菅家の昊ともる者ハ誤ゝ傳云御霊ハ所の内四所ハ桓武天皇の御時ゝ勅と勅請を下の四所ハ仁明天皇の御宇ゝ勅請ゝ〇上出雲寺と上御昊の神宮寺

小町踊 たの部七

とゝ下出雲寺と下の御霊の神宮寺とす傳教大師の草創て今西寺ゝ〇小絶ゝり寛文年中慈眼大師の遺誡ふよりて久遠寿院の准后山城国宇治郡山科の郷ふ於て出雲寺と再興ハ一のひ毘沙門天を安置ゝ〇御天の社あり是古と存もの遺意ふあり上御昊の御旅所ハ京極通り中御昊ふあり下御昊の御旅所ハ年々この所と定めぞその年神事頭屋の家内ふ安置ゝ

おとうと使 御旅所ふ在もの間と以て御旅と称す、

すの部相撲

条ふ所、

小鷹狩 滑稽雑談初鳥狩小鷹狩少しゝりめなりといへども、

万葉新点ふよるバ差別ふ一小鷹と秋とするハ鶉雲雀その外秋の小鳥狩ふり大鷹ハ冬ゝ〇鶴雁鴨の類と狩ゝ

ゝくうせゝ 凡て鷹ハ冬ふて小鷹の分ハ秋ゝその種類多し刺羽といハ小隼ゝ朝鮮より来る雀鷂雀賊、（ミの雄ゝ兄鷂鷂 このりの雌ゝ鶻くちゝ巣このりくらふ）ハ秋巣より取をいゝ凡て鷹ハたゝの捻名みれども別てハ大ゝ鷹ハ小たゝ捻名く、

紅梅草 仙翁花ゝせ

浮蕾 一名沢桔梗

[ひくらせる] 葉ハ葵の形ふ似て滑ある らこうの那岐ふ似ゑ
夏の末より秋碧花をひらく花こまゆぎと云 水草ゆ
是と水葵とおなじくらんこる輩多し水葵ハ莽〻
花黄ゆり○腥し小ふぎの上の鮠の腸芭蕉 **寵馬**
[酉陽雜俎] 寵馬 狀促織の如し俗ふい寵ふ馬あれバ食ふ
足の兆 [大和本草] 蟋蟀ふ似てひげ足ふ多くせい高く頭尾
さゞりてよるゝ〻寵のあくりふ穴居を筑紫の方言ふ
井にゝ○海士ゝ家ハ小蝦ふ海ゝ〻ゝ芭蕉 [兼]

三秋物

心の月

[萩の枝折] 心の月 とい清き心とゆふ、

氷の輪

月と見立て云 [東坡詩] 氷輪横海闊

氷の鏡

同じく月とゆふ、

牛蒡引

注まゆ

胡盧柳

一名豆柳即乾柳し、淡霜を生ず

樹練柳

形鳥の卵の如し摂津丹波ふ多し、所謂鶏の子柳歟、京師

御所柳

大和の御所村ふて御所柳を以水楝柳といふ、

紅瓶子梨

瓶子の形ゆて赤く其肉白

空閑

うう出ゆ樹淡の上品ふ物、

梨

肥前の産微赤色極りて大ゆり其味甘梨小亞、

小瀑江鮒

[和漢三才圖会] 小瀑江鮒者と江鮒と名く或ハ名吉或ハ伊勢鯉或ハ[illegible]ハ別
走小瀑江鮒とハ中畧八九月稍長じ大さ六七寸
交ふあり此時泥味ふく脂多くして愈ゝ美色
黑と成して瀑し洗ふが如し故ふ小瀑江鮒とゆふ、

八月

小望月

十四日のこと月とゆふ、

今宵の月

つの部月見の条ふいつ、

駒牽、駒迎

[望月の駒] [江次第] 本八月十五日ふゆ、朱雀院御国忌ハ依て十六日ふ改
[きゝ原の駒] 雀院御国忌ハ依て十六日ふ改
め用ふ云〻頭書云信濃勅旨の牧十五ヶ所必言式ふ載る
所の一〻天皇南殿ふ出御ありて御馬と分ち取らむ出御
ちきこゝ〻ゝ建礼門の前の大庭ふ於てこれを掌分〻ゝ裏
書ふ云上野九牧延喜式ふ廿八日ト云、七日甲辰文の勅旨の牧、
十七日甲辰文穂坂の牧廿三日信濃望月の牧廿五日武蔵勅旨
の牧又十九日信濃勅旨の牧廿八日上野九牧以上六ヶ日 延
喜式ニ云えとりこの外兼平官府十三日武蔵秩父の牧廿
八日同小野の牧の御馬こゝ〻と言ふ [公事根源] ハ卿以下次第

ふ御馬と給る馬の差縄どりて御前ふまゝ二疋を、取残
しこの馬とハ引分の使として、次将と以て院東宮おはしま
べき所々へまゐらせる八、新葉 秋の田の穂坂の駒と引つれて
とこ波ゆる世のうへも有るり 御村上御製 金葉 東路とは
るゝふ出るかち月の駒ふこよひやたゝ坂の関仲公 拾遺
相坂の関の山ちゝ踏あらし山さちいづるきりゝの駒 馬遠
後葉 のゝゝ衣 駒むかへ 去来

御霊祭 十八日

八所の御霊祭ハ呼神の名七月の部御灵の御出といふ条ふ注せ見合せべ

紀事 午後ふ神輿二基中の御灵の離宮と出て上辛の鉾八本、凡鉾と床上ふ建て棒二本四人と以てこれと荷ハ
と幸の鉾らふ神宝の内特ふこれと尊敬そ又勢力の人
鉾と帯の間ふ立、両手を以てこれと捧げ行、これと祭鉾といふ
又一人竿の先ふ道祖神の假面とうけて神輿ふ先ゞつ、此
仮面の鼻長大、俗これと王の鼻といふ別當及び氏子供奉、
御旅所より西のゝ今出川下烏丸と歴て長者町より室町
と過り本社ふ入、上御灵の社八京極通筋道橋の乾二町条ふ
あり、下御灵の神輿も同時ふ鉾殿と立ツ鉾九本別當氏子
供奉上御灵の行列の如し神幸の路次京極と出、椹木町

の西より東洞院の西と歴て出水ふ行、室町と下り二条と
過り油の小路の下立賣と上り東へ行、京極より本社ふ入、
下御灵の社八京極通大炊御門東 北の方ふあり、例祭八月十八日ふあり、

定考

十一日 名目抄 定考逸

ふ讃例之 公事根源 是八むゝ六位以下の加階とゝ八、
かの藝能行跡格勤とえらゝて栄爵と給ふるゝ、上卿
官の東の廳ふつきて事と行ふ次ふ朝所ふついて三献
の儀式あり、次ふ安穏の座ふつく、又三献あり、挿頭の花
と上卿以下の冠ふさゝて、大臣八白菊、納言八黄菊、参議
八龍脳、其外八皆時の花とさゝて、造花ふあらず、大うこと
二月の列見ふ同じ、式兵の両省より、諸司の輩の旨ど選
成さうと列見といふそゝと書あつめて奏さるを擬階の
奏とゝふ、此人々を擇出し
て定めらゝを定考とふ、

衣うつ

きの部祐の条下ふ出、

金

つふぎ

剛草

和漢三才圖会 山野處々ふあり、高さ三又莖
枝花葉並ふ萩ふ似て小く、七月花を開き莢
とふまゝふ豆の莢のごとし、中の実黒く其根甚ど強し故
ふ菊人牛馬と繋ぐべし、俗呼て駒繋とゝふ、○陶隠居曰

狼茅、其根獸の齒牙のごとし故ふ諸名あり　**草蔕草**　和漢三才圖会　山の麓ふ木の葉と戴生ず、狀松茸ふ似て纖の外黑く、粒々の皺あり、晒し乾せば黑ふして染革のごとし裏黃赤ゐて毛糸の如きものあり、柄ふ鱗甲あるて味微苦し、

五十雀　志の部四十雀の条ふ注を、

小雀　正字未詳　和漢三才畫会　俗ふ云古加良、狀山雀ふ似て小〻ふ故ふ俗呼で小雀といふ山林ふ多し頭黑く頰白くして四き紋の如く背腹白く翅尾黑し其声滑ふて多く轉る捷輕ふして上下こえざるに同し其条ふ注し〻あり、

九月

御灯　三月

御香宮祭　九日　神社啓蒙　山城国伏見京町の東ふ

あり、祭神一座狀神功皇后、○古老云鎮座年紀分明ふらず昔より垂跡此地ふ移し奉るとゐども、神の祟りあり秀吉城を築くの日東の丘ふ移し奉るとゐども、神の祟りあり故復旧地ふ遷し奉るとゐふ乃チ今の社地なり、○一書ニ云この地紀伊郡ふ屬せ例祭九月九日ゐ朔日ゐ御出とゐふ十日神事能あり、はじめ祭る所の神九座ゐ神輿も又九基あり、土人本居神と

せ今ハ神輿一基造り山二基、遠物ふを出ゐ、○當社ハ延喜式ふ載せる所の御諸の神社ゐ屬ゐ鎮坐年月未考、一書ふ貞觀二年勸請のよし〻記せり、

後日の菊　紀事　九月十日或ハ十一日禁裏ふ殘菊の宴あ

御難の餅　十日　文永八年九月十一日蒙古人刑ゐ鍬倉龍の口ふ於て危難あり、白刃の下僅ふ一命を全うせ、今日宗門の徒餐を作りて像前ふ供せ、ゐ、と御難の餅とゐふ、

小倉祭　十五日　豊前国到津の社ハ企救郡今村の庄到津村ふあり祭る神中ハ應神天皇左ハ神功皇后、右ハ玉依姫ゐ草創年月詳ふらず、後鳥羽院文治四年、宇佐八幡ゐその地ふ勸請しゐその神秩と分て四時の祭祀ゐ備ふ尔してより宇佐太祝の子族世々祝史とゐるゐその後清末駿河守といふ人到津の城ふ居して常ふ奉祝せ、天正の季九國乱ゐて神社灰燼ゐとなりゐ祝史の家族ゐ四方ふ流離して到る所をゐらずゐ、ふ於て里民一宇の祠ゐ立て僅ふ古跡を存ゐ慶長年中細川侯宇佐の社ゐ造営し又到津の社をゐ宝暦更辰の年小笠原侯更ふ祠壇謁殿ゐ立て祭事のゐ益旧

きふ加ふ、九月十四日晡後神輿仮殿ふ遊ぶ、流鏑馬あり、夜ふ入禊を修し舞楽を奏し、神湯の祝あり、當日十五日國主家臣をして幣を奉らしめ又流鏑馬あり、晡後本社ふ還御、一説ふ小倉祭或ハ巨掠ふ作る、山城國宇治の近隣に例祭九月十五日といふ、もろもろども増山の井その外の書々、豊前の小倉と記せる多し、

木幡祭

廿日、神社山城国宇治郡木幡ふあり、[雍州府志]祭る所の神、正哉吾勝速日天忍骨尊、是地神第二の神ふして、又ハ素盞烏尊、後ふ天照太神取て御子とす、ふこの神下土ふ降ませる故ふ山陵あり、してその夷と祭て木幡の神社と号す、○例祭九月廿四日 今九日 神輿二基内一基田中明神、田中の社ハ同所地主の神、祭る神詳あらず、或説ふ柳大明神是木幡の神、

金草 菊の異名、[藻塩草]名ふ、もろもろきの數ふ法る〳〵、

金菊 花濃黄ものを中ゝ、故名く、

蒟蒻の花 時珍曰春苗と生ず、五月ふ至て莖と移ず、長一二尺、宿根より自ず[illegible]根の大さ芋魁のごとし、○藻頌曰莖斑ふして花紫、

木の實 菓物秋多し故ふ名とさく、ぶ秋あり、

柑子 [和漢三才図会]

按ずるふ柑子ハ柑類の總名、

衣打袖の霜 増山の井 再校流布本 九

月の部ふ衣打袖の霜、別条の如く認め出せり、青藍按ずるふ衣打きぬ、このごとくいまだ八月の部ふ出せる、再び九月の部ふ衣打とのべ出せる理あり、全く衣打者の袖ふ付く霜と云ふ時ハ九月の季なり、ふるふ心あり、出せると別条に如く書さるハ書写の誤、[芋環]元禄十年 [枝葉集]元禄十六年 ふ衣打袖の霜と一条ふ認めくる證とも云ふ足らざるを深くも考へず、[獨誓古]ゆゑ別条のごとく認め、又[糸衣]ふを衣打と云ふ文字さ、省きて出せる皆誤、[濱の真砂]搗衣の条云露霜と袖ふ重て打ともあり、

七月

閻魔王 十六日 釈氏要覧 [閻羅王]此ふハ遮と云ふ謂く遮りて悪を造らざらむ、[倶舍論]閻羅王ハ地獄の主鬼官の總司なり、[翻譯名義集]琰魔或ハ琰羅とも、此ふ静息と翻ず、業を静息まるとなす、故ふ或ハ遮と云ふ、○七月十六日と大

齋日とゐひて善事を修し奴僕ゐを暇
ととらせこ閻魔堂へ詣でまゐるゐ、

紫葛

和漢三才 啇会紫葛の葉蒲萄ふ似て実と結ぶ又一種野蒲萄あり、懐く故ふ三公とふ位を、○蘡薁曰槐木極りこ大ある者あり、按ずるふ尓雅ニ云槐數種あり、葉大ゐ〳〵く黒きあり、槐と名づく、晝合し夜開くゆえこ守宮槐と名づく、葉細ゐ〳〵て青緑ちるゐのゑれと槐とゐへ四月五月黄花とひらく、六月七月実を結、和漢三才 啇会其花未開時米粒の如く、其実莢ふく連珠を、中ふ黒子あり、○槐の花本草ふ四五月開花とゐへ然ふ増山の井毛吹草等秋と称るふこのりて、ちぞ〳〵〳〵爰ふ出も、

槐の花

三安石譯ニ云槐黄中ふ其美を

狼尾

時珍曰狼尾其穂の象形〳〵秀てゐ〳〵ぞ嶷然と〳〵を粟の如く、田ふあり故ふ守田翁の称あり莖葉穂粒とも〳〵を粟の如く、色紫黒毛あり、

燕尾香

開宝本草 蘭草の葉馬蘭ふ似ゑり故ふ蘭草と名く其葉岐あり、俗ふ燕尾香と呼、

兼三秋物

犬子草

時珍曰穂の象狗尾故ふ俗狗尾と名く、原野垣墻ふ多く生ぜ苗葉粟ふ似て穂も〳〵粟ふ似ゑり色黄白ふして実あり、和漢三才 啇会小児ゑとと用て蛙と釣て戯る、ゑくゑせと、ものこ草おのれと種のあるものをまものあるとハ誰ゑつゐりゑ、俗云阿波国鳴門例ゐらぜ鳴動して止ぜ、和泉式部此哥と詠じて止ぜ、

圓座栃

形大ゐて附の處肉起て庾と〳〵を肥円く蕃ものゑ所謂著蓋栃歟、

青芋

蘡恭曰子多し細長くして毒多〳〵

八月

繪行器

紀事 京俗八月朝日ゐ家々の乳母その保養所の女子ゑ行器一双と贈ゐ、その行器の中ふ生稻ゑ藤の花と盛、藤の花ハ白糸餅ふ赤小豆と点じゑ、此餅の形度る白糸ふ似ゑり故ふ白糸と称又深更と名く、稻俗亦小豆と称ゑ、ものゑ豆と点ゑる是ものゑきの義ととりて深更と名くとゐへ今日童の戯ふ松笠と以て雉子と作て、或ハ烏賊の甲と以て鶯雀鳥と作て、或ハ糸絮と以て金灯篭艸の実を括ゑ、瓢の形とゐ又挑仁と刻ゑて松虫を制衣を是ふの

類ことと玩び或ハ互ふ相贈るこれを類合といふ、〇[紙番]と雉子鶉の類と同じく又意以仁と枝ぐら折て行器とゝもふ相贈ふ京師の俗

ゑん今日嘉祝の物ゝ

えゆゝ草

龍膽の和名なり、

榎

[和漢三才画会] 榎の根上ハ叢生を繊一二寸灰黑色裏白し細き刻あり、微香ありゝ味い美なりゝ

夢中

[大和本草] 榎木草ハ楸の類とゝ、

九月

榎の實

今按ずるハ楸の類ハわゝ也、榎を葉桑ハ似て筋多し、冬落葉を、実ハ胡椒の大さ秋熟ゝて黄ゝ味甘し小児好で食ふ、

七

月兼三秋物

天井守

との部番椒の照

条下ハ出さゝ

月次

[拾遺] 水の面ふてる月なゝとゝぞ宵ぞ今宵ぞ

秋の最中ありける 源順〇てる月と月次ふのけてよ

八月

天中節

[拾芥抄] 八月朔日の日の出より以前、天中節

めるゝ、

赤口白古隨節減と書て門戸ハ押陰陽秘法むゝし大国の三石天中様ハおゝて事あり其人素懐と遂ずるふゝ

忽ち火神とありて天中樓と燒ゝ時ハ后兒ゝて曰八月乃至隨節減云ゝ傳ゝ凶惡の日ゝ陰陽家天中の札とゝそ良賤の門戸ゝ

天狗茸

大毒あり故ハ人ちゝよゝもゝ、

木啄鳥ゝ、

てらつゝき

きの部

天王寺一乘會

十四日 摂州大坂四天王寺一乘会八九月十四日

ゝゝゝし、

或ハ十五日六時堂ハおゝてゝゝと修ゝ此堂傳教大師草創ゝ且本尊某師如来日光月光の三尊大師手造ゝり

とゝゝ寺説ニ云九月十五日未刻衆僧三綱堂の司楽人沙汰人堂住公人出仕ゝ先ッ時刻ゝ三綱及ひ一和尚ハ告て出仕の鐘一番二番と撞諸役人太子堂ゝ出仕ゝ太子の像ゝ奉鞏ふゝ次ゝその式二月十五日の如し廻廊の下ゝ六時堂ゝ渡御ゝ法事の次第振鉾阿弥陀經傳供万歳楽迦吉楽陵王納曽利悉ゝ終ゝ酉の刻還御

天滿流鏑馬

廿五日 摂州西成郡天満ふゝ祭る所の神北野ハ同じ九月十五日流鏑馬ゝ、社家ゝゝと動ゝ鳥居の辺ゝ天満掃ふゝゝて馬と馳て的と射ゝ、

出落栗

紀夏 土俗

譯ふるゝ古へ不孝の子あり、此栗と以又ふ投てるゝこと傷る、因てゝゝこゝち栗とふ和俗又と称してゝゝとふ○一説此栗自ら毬と脱してゝ地ふちゝ故ふ出落栗とふ、

あ

七月

秋の初風

秋の末

秋のうちゝとのうゝふるむべし、秋さらと姫、朝顔、姫

棚機七姫の内〉

秋さらと

し夏と、秋さらと

等ゝゝと注釈見えぞ、

異名分類 秋去衣 八雲御抄 秋去衣とハ

棚機の布〉御傘 棚機の具〉云云 万葉拾穂抄 天の川

只秋の衣ゝ、秋さりハ秋の末るといふとゝ、

銀河 銀漢 雲漢 字彙 天河、箕斗二星の間ふあり、其

星河 河漢 長きゝ天ふ竟も、 揚泉物理論 漢

水の精〉氣発ゝて升り、精華上ふ淳ふ究轉して 飛

流る名づけゝ天河とふ〉一ふ雲漢と云衆星ゝふ出、

鳥井の鞠

梶の鞠 紀事 棚機ふ飛鳥井家並ふ難

波家蹴鞠の会恒例〉上加茂松下

露拂 並ニ枝鞠上足ふの義あり、堂上及び地下の門多

く集る、 滑稽雑談 楮の鞠の事を毎年七日飛鳥井家

ふて行〉〉〉式〉鞠の露拂ふ當家門弟の上足

の者、坪の内へ持参る是二星〈手向る心ふ〉、

荒鷹

鷹の雛已ふ巣と離ゝ自ら食る時、羅と以て捕ふ是と

網掛といひ又あら鷹といふ、新ふ捕ゝ人ふ馴さると荒鷹と

いふ、

愛宕宮火

廿四日 紀事 伊丹池田の愛宕火七月廿三日

より廿四日至る云々 摂陽群談 摂豊

島郡池田村ふあり、愛宕山ハ古三のふ所謂五月山ふりとぞ、山

上ふ愛宕権現の社あり、毎年七月廿四日の夜種々の灯籠ふ火

を点して愛宕火と名く、大坂北の町ゝゝまとより望ミ見れば星

の如し、又愛宕の神社有馬郡道場河原新町口ふあり、祭る所

火産霊尊毎年七月廿四日祭礼

あり、世俗ゝゝを愛宕火と称も、

扇置

太平新録詩

人皆稟

秋扇

朝茶の湯

貞享式 風炉を夏ゝとゝ〉炉びら

とふせれハ朝茶の湯ハ朝顔の例と假て秋の用とちびぎゝ

きと冬ゝとゝ〉木地の炉縁と春

茶人の家ふ尋ぬべし、○朝茶の湯ハ日中の暑といふ故も

青藥

との部弟切草

の条ゝるべし、

牽牛花

和訓栞 朝顔の異

〉朝ごとふ花ゝゝ

そて名く、**あらくぎ** 蘭をいふしふの部 藤袴の条ふ注を、**ありのひ兒** 桔梗をいふしき あとづうん ひの部 瓢簞 の条ふ注を、**栗穂** 和漢 三才圖会 種類凡て數十青赤黄白黑の色あり早中晩あり皇栗米賓晩栗ハ皮厚く米少し○秫、狼尾草 栗奴各頭字の部 **秋津虫** この部ろ〳〵べし、**秋の蝶、秋の蚊、秋の蛍、秋の蠅、秋の蟬** 注釈ふ及むを中ゑ秋の蟬ハ〳〵ゆく 秋のてふハおとろ〳〵るさゑふよゑそ、

兼三秋物

朝月夜、朝の月 黑双紙 朝の月八十七日より二十八日まであり、**暁月夜** 源氏初音巻 影きよ まゝきのろきつくよ、**有明** 八雲御抄 十五日以後の由匡房往生傳 ゝあり云々 青藍云空ふ有て明るといふる義ゑりとそ、**秋月** 清光と賞もてるところをふくて句作もべし、

〇〳〵人の昼寝の種や秋の月 貞徳 **秋天** 上ゆくと下ゆく雲や秋の天 凡兆 **秋風** 楊子物理論 秋氣動 其風清、 **秋野** 続虚栗 秋の野やゝ〳〵る小鳥ゆく小鳥虚谷、 **秋水** 荘子 秋水時ふ至て百川河ふ灌ぐ逕流之大両ふ涘渚涯の間牛馬を辨ず 炭俵 熊ゝ谷の堤きれゝる秋の水 岱水 **秋聲** 歐陽永叔ゝ秋声の賦あり、畧之 続猿蓑 **秋の七草** 万葉 松の葉や細きゑも仰ま秋の声 風国 秋野ふ咲有花乎指折可伎數者七種花 芽之花乎花葛花瞿麥之花姫部志又藤袴朝貌之花○是を秋の七種ゝ称ま、撫子の一種ハ連俳ゝ押出ゝてハ夏ゝも、然ゝとも此ゝのゝ久しゝ盛ゝて冬ゝ迄も有ゝのゝ霜ゝ雨ゝ霜ゝ結べハ冬ゝもあるゝ 源氏蓬生 草枯の籬ふさるゝもてゝこそをゝ〳〵秋のゝこゝふでゝ〳〵 ○霜の後撫子咲る 秋の山 四機活法秋色詩 秋山如畫更分明、 **秋夜** 物哀なる余情ふ作るべし○秋の夜と打ゝゝ〳〵るゝ〳〵れ芭蕉 **ありすみ**

相模集 さうもぎてうもぐる梨とをさきもき人のもふやるとて おきうしつゆぐりうある梨あれど千代あるのこと人はいまうの梨らふと忌てありのことらふもぐし

八月 安濃津祭 十五日

社説曰伊勢國安濃郡津城の南ふ八幡宮鎮座 往古高良の二神殿中ふ寄坐も相傳へ建武中足利高氏卿一国毎ふ八幡一社と置んと欲し伊勢と以て始とも乃チ宮殿と千歳山の上ふ造り石清水の神と勧請し源家の興隆と祈る旧記ふ云ふ永正年中當国兵乱ふよりて神殿荒廃も僧願海募りて国中と化して再興も時ふ享禄二年ゑ又数十年の後頽廃して僅ふ存も寛永壬申年城主田獺ゑてこふ至りて小祠と林樹の間ふ見る左右何れの神ゑるとも知る者ふ村老とめてこと問ふ言ふ足利將軍の建る所ゑり即心願と発して土木とあつめ正殿拜殿神庫華表と造る寛永十二年初めて祭儀と行ふる同廿一年垂水藤浮の二村三百石の地とつけて昌泉院と以て別當も今寒松院と云いまゑ山上よありて千歳山八幡宮と称せり今の地ふ迁してより安濃津の城と守と以て安濃津八幡宮と号も乃チ一志郡垂水村よ属も蓋津の城の街坊ハ奄藝安濃一志の三郡ふ跨ふ云ふ

秋の宮 春の宮 東宮と

とつひ石宮と

綾巻 きの部砧

秋の宮ふ云ふ

藍の花 葉蓼ふ似て七八月咲

紅花と同ひらく

蘆の花 説文曰其花風ふ遇て吹揚れば雪ゑる

のごと地ふ聚もハ絮ゑ

茜 時珍曰此草東方ふ在て少し西方の多ふもつもと則

堀 西草と以て茜ともも十二月苗と生ず蔓延ること数尺

方茎ゑて中空し筋あり外ふ細き刺あり数寸一節節毎ふ五葉面青し背緑り七八月花とひらき実と結ぶ

漢三才図会 茜ハ赤根之以絳を染べし近世蘇方木と以て茜ゑ代ふ

通草 蕪須曰通草の実長さ三四寸核黒く瓤白し乳と食へハ甘美南人謂て燕覆子ともも或ハ鳥覆子と名く七月と過てこと采ふ○時珍曰通草ハ茎ふ細き孔あり両頭ふ皆通ず故ふ名く

栗引 取収と引と云

八月の溢ふ蚊肉と割と云

溢蚊 滑稽雑談

世話ふ云ふ近来秋ふ許用も

鶺子鳥 和漢三才図会 倭名阿止里此鳥常

ふ山林ふ棲不時ふ群飛して寺院の叢林ふ出る事ありて、百千群と成して天と蔽ふ状ち雀ふ似て大く背太し頭頭灰蒼ありて拆色の斑あり、頷黄赤ふして背白し、背蒼ふ赤と帶ふ黑き斑あり、日本紀天武天皇七年鴆子鳥天と蔽ひて西南より東北ふ飛ぶ、

江鮭 鱆 鯊 草魚 鯇 鱆 和名阿米 コくう せゝ 琵琶湖の名産ふ、大きなる者三尺ふき者尺ふ満ざるものあり、儼鰯魚のごと、江鮭ふハ則江湖の鮭ふ、河鰒魚よりハ臓多く、湖水あその佳品ふ、秋八月雨水河ふより、湖中ふ流れ入るとき多く川り上る、築と構へ或ハ大なる攬網ふ以これと取る、

新走 新酒の尤早きを新走と云、

秋の暮 湖東問答去来著 問云春の暮ふ對して暮秋と心得る作者多しと云り、尤秋の暮ハ秋の夕間暮あり春の暮ハ暮春の事ふ侍るあや答云春の暮ハ暮春ふ又一片ふ限るべきぞ一句の趣あるよるべし、○秋の夕暮とらふべきと文字の数ゆもくちなきこと句あれバ畧して秋の暮とらふべし、近ころ下五文字ふ秋の夕といふる句あり、秋のゆふべといふねバてゝぞ見べし作者心得べし、

九月

温酒 御光明寺殿下御抄 九月九日ハ寒温のさゝひ身肉ふ時ふ此温酒と飲めぞ病と得ぞそゝふより酒と温め用ふるよし、

栗田口祭 十五日 増山の井白川橋の東世諺問答ふと引かり、八大天王の祭ふ祇園牛頭天王娑竭羅龍王の女頗梨女とめとりてうとめる八王子ありこれ暦ふ入る八將神ふ、

穴織祭 十七日 摂州豊嶋郡池田村民家の北ふある山上ふあり、摂陽羣談 穴織呉服の両社其間僅十町ばかり、日本紀 應神天皇十四年春二月百濟王縫衣の二女を貢ぐ、真毛津といふ、同三十七年春二月戊午朔阿知の使主都加の使主と呉ふつかわして縫工女と求めむ、阿知の使主ふ高麗国ふ至りて更ふ道路と迷ひ道と知る者と高麗ふ乞ふ高麗王乃チ久礼波久礼志二人と副て導者とせしふよりて呉ふ通ぶることを得たり呉の王工女兄媛弟媛呉織穴織と号ふ、同四十一年春二月午朔阿知の使主ふ呉より筑紫ふ至るの時胷形大神工女を乞ふ故ふ兄媛と以て胷形大明神ふ奉る今筑紫ふ坐る御使君の祖ゝ既りてその二女と率て摂津国ふ至

る武庫ふ来て天皇崩ぜ、ゆくふ及ぶと大鷦鷯の尊仁徳ふ献る、この二人ホの後今呉の衣縫蚊屋の衣縫是〻ゐる、○仁徳天皇七十六年戊子九月十七日ふ縫媛二人とも去のひてつへふこまと祝ひ祭て、縫寮の神とまつる、毎年九月十七日十八日と穴織呉織両社の祭礼〻、和衣荒布の神供と備てこまと神衣祭と称ち、社家の説ふ應神天皇春二月、縫媛を呉ふ

秋の花 菊のことゝ、とゐるき物ふあり、求むとゐり、不審、毒の体ふゐるべきの〻〻藻塩草ふいゐり、

秋〻久の花 菊の異名といゐり、異名分類 藻塩草ふ「ゆきぢふ」を菊のことゝ枯るまで、野ふ残てゐり秋〻くの花、是古き物ふあり、或説ふ菊と秋〻くとよむと、今按ゐるふ埃嚢抄ニ云聖一國師重陽の佛事の時、ゆき草の花と北の籬ふ植てノントくくと南の山と見るとゐるをしら〻ゐるゐり是ハ古文前集ふ陶淵明う採菊東籬下悠然見南山とゐる詩ふて東と北〻採と植と〻〻傳寫の誤あるべ〻、埃嚢抄ふゐるふ藻塩草 あづきひくの秋〻くの花も誤てふく秋草の花の、

赤小豆引

大抵土用の中種とあ〻蒔九月ふれと収む、

芦の穂絮 孝子傳 閔損う後母ふ綿絮を以し損ふ芦花の絮と以て父子と出さんとす、損う曰母在せバ一子單ゐり、母去ら〻三子寒しと、遂ふ止、生處の子ふハ衣まゐる

烏柳 本草別録 烏柳ゐて毒ゐり〻 多識論 烏柳今按阿末保憂 秋む、

秋の葉 御今 ゆうぎのゐろゐり、

秋の霜 初霜ハ冬ゐり、

朝寒 御今 朝寒秋しさむき朝寒きけつと、朝氣さむ〻ゐれも冬ゐ、

網代打 藻塩草 網代ハ各ゐく然もとも九月九日の前ふ打初て宇治の網代人供御ふ奉るふや、

秋過て、秋暮て、秋そ隅る、秋ふ後る、秋より後、秋の別、秋の名残、秋の限て、秋と惜、秋深き、秋の湊 注ふ不及、

さ

七月

さゝがふ姫 棚機の異名七

姫の内〻ちゝがふとい蜘のこと〻 異名分類 開元遺事ふ、蜘蛛と以こゑとふき金盒の中ふ納め曉ふ至て開きて蜘蛛の糸の稀密ふると視以て巧の多少を得ることを云長明四季物語ふ、姫蜘蛛とてさゝやかなるもの、其つくるもと或ハねゝびの糸ぬいを引ゆると暈うて私のねゝびゝちよつてゝとまるとあるべしゝ云これらふよれるあるべし、

索餅 先代田事記 七月七日織女とまつる又牽牛神あり、その祭供ふい索麪と以す是糸織の象ふ表す、蘇恕麪と以て、これ鋤耕の象ふ表を 十節記 昔高辛氏の女子七月七日ふ死もその灵鬼神とあつて人ふ瘧を病しむ其存まる日麥餅と好めり、故ふその死まる日ふ至て索餅と以こゑと祭る、後人〻索餅をくゝて瘧疾と患ひ、

刺鯖 いの部生身魂の条ふ出ツ、

澤桔梗 大和本草 莖大ゆて葉ちゞく、卷丹の葉ハ莖ふ付るが如し、花ハ桔梗ふ似て淡碧色桔梗より小ふ水辺ふ生ず秋花をひらく根まゝ桔梗のごし又浮蕾の花をも沢桔梗と いふ同名異物ゝ

五味子 本草 五味子皮肉甘く酸く核辛く苦く、都て鹹き味あつて五味具る故ふ名く、春苗を生じ赤き蔓高木ふ引く其長さ六七尺葉尖て円く杏の葉ふ似ゝ三四月黄白花を開く蓮花の状ふ類ず七月實ゆる莖の端ふ叢生ず豌豆許の大さのごゝ生ハ青く熟ス紅紫

さゝれ萩 葉の細ゆるを さゝれ萩とふ、 兼三秋物 哉生明 二日三日の月とふ哉、哉、前の月大ふ成ハ二日ふ明と生ず、哉明と生ず前の月小ふ成ハ三日ふ明と生ず、

生魄 十六日の月とゝ 尚書 望後月明死て魄と生ず、〇月の照さる所を魄とゝ八、

佐々良衣 月の別名ゝ 萬葉 山乃葉乃佐々良衣 牡士天原門渡光見良久之好藻、

盃の光、盃の影 御仆 盃の光ず月ふよゝ秋ゝるごし面の月とゝ

さゝけきこと 秋の月とゝ八、 君遷子 ふの部蒲萄折の条下ふ出ツ、

狭牡鹿 和名抄 牡鹿和名佐乎之加 和名正濫要略 顕宗天皇紀ふ牡鹿此ふ云左鳴子加和訓の

狭雄鹿ゐて狭ハ狭山狭野もゞろ〳〵ていふ詞あり○萬葉ふ小牡鹿と書るハちひさき鹿といふゐわ〳〵ていふ、猿酒

猿酒　猿菓と取て山中樹木の虚或ハ巌腹の四あるゑ所ふ貯へ置き數日の後熟し〳〵酒の如く味甚甘美〳〵これと猿酒といふ獵者往々見て竊に食ス、

八月　堺天神

祭　三日　泉州府志　泉州堺常楽寺天神の像ハ菅神太宰府ふ在せし日自ら作ましまし七軀の像の内也こゝにひとつゝふ長徳二年或ハ延喜年中正月海濱ふ漂ひ来るゝより此所ふ安置ス或ハいふ昔塩穴の郷湊村ふあり故ふ塩穴天神と称ス中世北の荘ふゝるゝと勸請ス文明二年菅原為長郷の記ニ云、知泉国毛須深井草部土師向井塩穴高石ハ菅家の氏神天の穂日の命以来の旧領ゆゑ為長卿の真跡九条殿ふあり今按るふ塩穴天神ハ天穂日命ふて後ふ菅丞相と合せ祭るゝ○例祭六月十三日と夏神楽ゝ八月三日と秋神楽ゝ此ゝこの日参詣多し神輿堺七道濱ふなゝく夷島へ渡御即日還幸ス先祝の諸抄四日とゝるゝ、今ハ三日ゝゝとゝゝ

三五の夜

つの部月月の条ふ出ス、

西院祭　廿八日　春日の神社ハ洛西葛野郡ふあり四条通西の土手四町計り云云西院村の西平林村の中ふあり名跡志按るふ西院の号中頃此所の西ふ齋院居ゆゑ故ふ此辺の名ゝて齋院と書ゝを後誤ゝて西院ふ作る歟○例祭八月廿八日神輿二基あり其一ハ住吉神輿ゝ住吉の社八司紀事村の西ふあり時珍曰榴ハ瘤ゝ此賢西院八幡祭とゝふ未詳

拓榴　事類合璧　榴大ゝくゝて盃の如し赤色ふ黒き斑の點あり皮中蜂の巣の如し黄膜ありてこゝと瓣子人の歯の如ゝ淡紅色亦潔白ゝて雪の如き者あり潘岳賦ニ云榴ハ天下の奇樹九州の名果千房同蔕千子一の如ゝ飢ゝ渴ゝ渴ゝ療し醒ゝ解し酔ゝ止む　北史李祖收傳　元魏宣武徳王妃宗李祖收ゝ納て妃ゝ後ふ帝李ゝ宮ふ幸ゝ妃ゝ母ゝ二の石榴ゝ帝の前ふ落ゝ人世意ゝ知ゝ祖收ゝ云子孫多ゝ云ゝ欲ゝ今是子母神ゝ祭ゝ人ゝ備ふゝ榴ゝ以ゝ千子多ゝ子の義ふゝ花の形ハ夏のさの部ゝ

三七

の花 本草 三七春苗と生じ、夏高サ三四尺葉菊艾に似て頗る厚く岐尖あり、莖に赤き稜あり、夏秋黄花をひらく、蕊金糸の盤紐のごとし、愛すべし、氣香らず花乾くと雖ども絮を紡て苦貫絮のごとし、

烏鳳

和漢三才圖会 今云三光鳥近年こゝもあり、緋碧色、背の上に赤き帶、腹白く羽黑くして微赤く、項の毛乱起て頂上に冠あり、眼大にして瞼青く、其尾長き者一尺半計り、その週轉せ、其声清越、日月星と言ふ如し、今三光鳥と称せ、其雌雄に似て、浅く尾短く、倶に性男悍、雛を育る時かしゝ鳥鴉の来るときハ羽を振ひ、とゝと拒む、或ハ其眼を啄く、其巣鞠の如く、澁両端に口あり、表より入裏に出、尾の長きを以然り、

鮎

鮎の部落 鮎の条に出、

九月

坐摩祭

廿三日 坐摩の傳記に見ゆ

の部、坐摩の御板の条に注したれば爰に略す、例祭九月廿二日、ゝを相嘗八十島祭と号して、新嘗の神事なり、

逆髪祭

廿四日 社説に云、江州滋賀郡琵琶湖の南、逢坂山関の清水大明神ハ延喜廿四の皇子蟬丸の社、蟬丸双眼盲ゆへ故に勅して延喜廿二年壬午春三月、公卿大夫蟬丸と供奉して逢坂山に左遷し奉て、各涙雨を滴て帰京せ、残て留る人白川の紀則長、基經古屋の美女師輔、云々爰に於て姉の宮深く蟬丸をもてなし、密に禁闕を出て相坂山に来て蟬丸と共に花月を清賞し、旅駅の山岩川陸を徧歩して、雲鬢緑髪顛倒せ、國人御名を逆髪と号く、天慶九年廿四日逝去しぬ、故に毎年九月廿四日の祭祀今に至て怠ることなし、姉薨去の後蟬丸とこゝに一社に合せ祭る、云く青盛云蟬丸と延喜才四の皇子及び盲人とゝ、さハ云ふ説あるハ、後撰集のゆゑものゝるもとゝあるる哥の詞書に、ゆきゝの人とゝとゝと有ゆゑ、諸書に論ありゝ、ことゝ、なるべし、水戸學士の一説に唐の南朝元帝の諱と延基とをもて、延基の三男極楽の時より癡にして、其上瞽ゝれハ遂に是と相関とゝ、所に捨ゝ、此子の名と彈児とゝ、ハいはんとゝ、ハ幼年より琵琶とゝく彈ぜり、故に付ゝ、今此事より日本の蟬丸の変と考ふに、延喜と延基とキの音同じ、彈と蟬と字の形相似ゝ、又相関と相坂の関も相似ゝ、又延

喜の御子と捨ゝ〳〵と彼是同意ゝ彈児の事ハ古史考巻の三十一ふゝえゝうゝと云、俳諧歳時記按ずるふ逆上ハ坂上の誤あるべゝ寺門の説ニ云江州相坂山関の明神二所一所ハ坂上ふあり一所ハ坂下ふありと云元坂上の社をゞいひと誤りて種々の説と設けゝるあゝ又云二所ゝるふ道祖神と祭りて以て関所の鎮守ともゝ朱雀院の御宇蟬丸の霊と當社ふ合せ祭る依て土俗蟬丸の社と称を下の社の前ふ井あり関の清水と名く清水明神と号祭礼九月廿四日上下の社同日ゝ

皂角

時珍曰皂莢樹神興二基ニ云この説穏ゝ皂ゝ故ふ名とも廣志ふゝとと鵜桙子とゝ樹の高さ大ゝ巣槐の葉の如ゝ瘦長ゝて尖ゝ枝の間ふ刺多ゝ夏細き黄花と開く実と結ぶる三種あり一種ハ小ゝて猪の牙のごとゝ一種ハ長くゝて瘦薄く拮燥て粘ゝ其樹刺多くして上りかゝ櫻のもち

櫻紅葉

ゝし

珊瑚

仙蓼 珊瑚仙蓼ニ名

同物 園史 巣山茶の如く小ゝ夏白花と開く秋紅の実と結ぶ珊瑚の如く累々ゝゝ 大和本草 珊瑚巣ハ橘の如く刻ミ欽あり藍長く節あり寒と日と長ゝ陰地ふ宜く本草綱目雜草の部百両金巛ぐハ此と同物ゝ 和漢三才畜会 仙霊草 正字未詳云、

栃栗

江東小き栗と呼て栃栗云

七月

北野御手水

六日 山城國葛野郡北野天満宮ふ在

ゝこの處むゝじめ朝日寺の地ゝ帝闕ゝり北ふあるゝゝ以て北野と名く 紀事 七月六日北野松梅院御手洗と神前ふ供を松風の硯ふ穀の菜と添てゝゝと供を松梅院の幼年或ハ故障あゝときハこの義ゝりゝとを、

北野煤拂

七日 雍州府志 毎年七月七日北野社内外の陣ふある所の神宝と西の間及び幣殿会所ふ出しゝゝと曝をその間ふ宮仕内外の陣の煤と拂ふゝ、

乞巧奠

名目抄 今の俗キッカウテント云ハ不足言ゝ ゝくゝせゝ

乞巧奠とハ人々其業ふ巧ゝあらんゝとを願ふ意ゝりゝ

開元遺事 七夕ふ蜘蛛を以て金盒の中ふ納暁ふ開て蛛絲の稀密と視巧の多少と得ゝりゝとも、

乞巧針、乞巧瓜

荊楚歳時記 ゝ

夕ふ婦人七孔ふ針と穿ち或ハ金銀鍮石と針こと瓜菓を庭中ふ陳ね巧ミを凝ふ蟷子ありて瓜の上ふ網を張時ハ巧と得

九枝燈

漢武内傳 七月七日帝宮掖の内と掃除し雲錦の帷と張九華の燈と燃き西王母降

公事根源 燈臺九本おのく灯あり云

禁裏御燈籠

滑稽雑談 當世ふおいて禁裏へ御家門方より燈籠と献ぜらるる奇巧金銀を鏤め花鳥人形ふの美と尽せり是と南殿ふならべらるるのころより始てるるあや尋ぬべし十四日ふハ禁門を敲て賤の男女と庭上ふ入て是と拜せむ

切子燈籠

和漢三才圖会 一種岐里古燈籠聖昊祭ふこれと用ふ飾る所紙繒甚華美

逆の峯入

紀支 七月の初大峯の修験道山伏の客僧大峯より京師ふ出て大なる法螺と吹き自ら金剛杖と拏戸々と遍歴して奇料と乞ふ或ハ前鬼木鉢或奈良碗黄ふの物と且那の家ふ贈る凡峯入の法本山派熊野より大峯ふ是と順の峯入とふ當山派大峯より熊野ふ出是と逆の峯入といふ○春の部順の峯入の条かよく〳〵ふるべし

○貞享式 峯入の類も順逆とひて春と秋と之断れあ今の俳諧の省法ふよらば秋季ふつれていきそもいとでハ春とあひべく

木曽踊

名秋くゝ春季ふつれてハ春とあひべく

清水千日詣

十日七月九日より十日ふ至て京師清水觀音ふ諸人参詣と夜ふ入て参詣殊ふ多し今日の参詣平日の千度ふあたるとふ江戸浅草の觀音と同日ふして参詣多し

俗四万六千日とふ

經木流

十六日 摂州四天王寺北東僧坊の前ふ亀井の水ふ引ふ白石巳手の水と号をむ〳〵白川法皇の上東門院當寺ふ詣し時其水盤ふ亀の形あると見て白石玉手の水と以て亀井の水と詠ぜこれ其ゆへの起る

新古今 濁ぞるき亀井の水とむすびけて心のちりともくぎつるかな○七月十六日世俗經書堂ふおいて經木の表ふ法名と記し此水と手向て霊魂と弔と摂陽群談ふもみえたり昔ハ八月毎ふ六斎の日講堂ふおいて經と誦し参詣の戒名と名帳ふ記し回向せとふ和

泉式部 恭詣のとき名と名簿ふちらして詠ぜる哥 梓弓
經木ハこの名 **桔梗** 時珍曰桔ハ結ぶ其草の根結實
簿の遺意歟、 桔梗 和名阿里乃比布木 和漢三才圖会 山野及ひ人家ふ多くこれを
種ル紫碧の者と桔梗の正色とす又白花あり紫白相
交る者あり單葉あり八重あり 古今 物名 秋ちくさ野
ハふりふりもくさのおけるくさ葉もいろいろゆく友則
今俗つくきぐさハ蒲雞 家持集 きりぎすもつくりさせ
とハ鳴ふをどむらきぬかくる我いきくいをぞ○華つ虫ちぐ
ろむしすげの庭鳥ホの異名あり頭字の部ふわくちて浅、

蟋蟀 大和本草 本草四十一巻寵馬の附録よりも一名
蟋蟀又蛬とつくる立秋の後夜鳴くイナゴふ似く
黒し翅あり角あり頭ハ切るる如く光あり俗ほうぐさせ
とあくとつくる西土の方言名ッとつくる古哥ふきりぐもや
よめるハ是こ秋の末まで有く故ふ古哥ふ霜夜よめり○
今俗つくきぐもハ蒲雞 家持集 きりぐもつくりさせ
とハ鳴ふをどむらきぬかくる我いきくいをぞ○華つ虫ちぐ
ろむしすげの庭鳥ホの異名あり頭字の部ふわくちて浅、

兼三秋物

銀鬼 月とつくる隋煬帝云、清露冷侵銀鬼影 **既望** 月の部い

蟋蟀も寵馬も今俗混じてこれをろぎいとつくる

さよひの条ふ併せ註ス、 **既生魄** 既ふ魄と生ぜる十七日の月
こ、月の照ざる所を魄とつくる、 **暉**
素 文選註 月光こ、 **金波** 前漢書 月光こ、 **霧** 尔雅孫炎註 天気
下り地ふ應せざる
と雰とつくる地気天ふ発して應せざると霧とつくる 和漢三才
会 雰霧の三種皆露の変ずる者、秋月盛んなりて其降
や朝と夕とふあり甚ぐ多きを紀ハ菜蔬草木凋え枯ろく
て霜雪より烈し 藻塩草 霧ハ春夏も詠ぜ秋ふ
限るべからずとつくる連俳ふ霧とむりハ秋こ八雲御抄
の如く春山の霧ふまとつくる篤又夏霧とも万葉ふあり
と云、俳諧とても春夏の季ふ結ぐ春夏ふわくる
べし、朝霧夕霧別義あり、 **霧の笆** 霧の立てごてる
とはぐきとつくる、 **霧の海** 野原ふ下てる霧
の渺々とそ海の
ごくくもと
るとつくる、 **霧の香** 御千 霧ふ白ひのあるものこ草
きものこふり物ふも撫ふ霧の香
とつくひて別ふこき物あるふいあらぞ霧不断
の香とあきと詩ふを作るハ只秋霧のこと、 **霧立**

人 八雲御抄 面さてくる人をいふ、

霧雨 霧の深き所ハ雨の降やうにこれをて、

木淡 樹上ハ熟して美しき材を木淡といふ、

伽羅材 一名透徹材形長く四く微尖り、肉中沈香の理の如くふして味脆く美し、

錦馬 鹿の異名あり、

八月

北野祭 四日

二十二社註式 一条院永延元年八月五日祭礼をゝめて官幣あり、後冷泉帝永兼元年八月四日ハ定らる、五日ハ毋后の国忌ゆへなりて、拾芥抄 北野祭今ハ四日ゑハ五日先例大臣より始て納言参議ゑ至て、大頭と称を催し申あり、料米六十石、○祭神三座中ハ天満天神東ハ中将殿、菅三品吉祥女、菅家の北の方、都の西南吉祥院ハ住ゆへ名あり、鷺水記曰、此祭甚さ美麗ふして神輿下立賣の西御旅所ハ移し奉る、其間廿余町の地ハ蜀錦と敷き、供奉の輩綾羅の袂とつらゝ、管絃の声雲井ハひゞく

礎 四手打 綾巻 宇林直衣打 ちゝろ打 ハ巻と持

よりて、當社の古記ハあり、といふ、古人衣と持ハ両女相對して一杵と執て米と舂ぐ如し、然るハ今易ゑ卧杵を作る、對座してゝ持つ、其便を取り和名抄 唐韻云礎和名岐沼伊太 持衣石ゝ作杵 亦持衣杵 和名都知○綾巻衣と巻末ゝその緒と巻て打ゝ○四手打八雲御抄 ちゝろうハ打ちゝろうハ打ゝ衣ゝて打ともよめり、

銀杏實 ○ちゝろうハ槌の名ゝ槌ゝて打とゝ、時珍曰銀杏其葉鴨の掌ハ似ゝり、因て鴨脚と名づく、宋の初始て貢ゝ改て銀杏ゝ呼其形小杏ハ似て核の色白きハ肉て今白果と名く、

木の子取 たの部茸狩の条ハ出ツ、

秋 き

啄木鳥 一名てらつき 時珍曰此鳥樹を劉裂て蟲と取食ふ故ハ名く、禽經三云ハ小ゝる者雀の如く大ゝる者鴉の如し面桃花の如く、啄足皆青色爪剛く觜利く錐のごゝし、長さ数寸舌味り長し其端ハ針刺ゝて蟲を啄ゝ得るとき八舌を以て釣出しゝゝと食ふ、○昔王造ハ天王寺を建し時、此鳥群来て寺の軒と啄き損ぜ故ハ寺啄と名く、守屋ゝ怨ゝ夷鳥とゝりしとゝふ、

菊戴鳥 和漢三才 圖会 状眼白鳥ハ似て背翅青緑色頂の上ハ黄毛花の如き者と戴く故ハ名く、

九月

菊

花の宴

九日 青藍云、俳諧歳時記ニ周の穆王ニ就て崑山
ニて、法花の秘文と秋尊より受て慈童
ニ傳へ、慈童八百歳とゆゑ、貌少年のごとし、魏の文帝
の時名を彭祖と更て文帝ニ此術を授け奉る、文帝この
術を受て壽七十歳今の重陽の宴是ニ此説ニ安談の甚
しきいへべし、列仙傳ニ彭祖ハ帝顓頊の玄孫姓ハ錢名ハ鏗、
周ニ至テ八百歳ヲ経て衰老せず、穆王召して大夫ニせんと
す、病と称して與らず、後遂ニ流沙の西ニ往、彭祖の傳か
くの如し、慈童より事と以て附會するもの元野史ニ
説の詩語より出ず、菊花の宵ハ秦漢以来より既ニあり、云
論いくり實ニ妄談附會の甚しきいへべし、まろはあるべ
本朝文醉ニ視賜群臣菊花詩序云、紀納言採故事於
漢武則赤萸挿宮人之衣尋舊跡於魏文亦黄花助
彭祖云々、又世諺問答ニ魏文の説と引まされば、古くより
いひつたへる妄談ニ、九風雅の道ハ事の虚實ニかゝ
はらず、其趣のもとづきニ隨ひ、ときにあくまでよ〳〵と
もまた、附會の説とゝもにいらふ捨べきニ
もあらず、

菊枕

公事根源 御前

ニ菊枕とおく云云 全文ちの部重陽の宴の条ニ云云、

菊花の酒

高ニ登る 続諸記 汝南の桓景費長房ニ隨ひて遊學もること累年、
長房謂曰、九月九日汝ぞ家中災あらん、急ニ去べし、家人各
絳袋を作て茱萸を盛り以て臂ニ繫て高きニ登れ、
菊花の酒を飲しめば此禍ひ除くべし、景言の如くし、舉
家山ニ登る、還て見れば雞犬牛羊一時ニ暴死ス、長房
これを聞て曰、此ものゝ代ると、今世の人九日高きニ登り、
酒と飲、婦人茱萸の嚢と帶、蓋此ニ始る、

茱萸の袋 夜

菊の節句

栗の節句 菊酒を飲栗ご

親戚朋友互ニ贈る、故ニ菊の節句と栗と称、

菊花著綿

御湯殿記九日の夜ニ入て御殿の南階ニ小菊を多く植其菊ニ赤白黄の深ゆきを
丸め菊花ニ作て枝々ニ付る、今日葵と菊ニ取ゆ
らゆらとゆり、云々○青藍按ずるニ菊ニ著まるこゝ
くハ菊の露をもてゝ移しとり、面をぬぐひ、そゝ老せぬ
薬とせしなり、後撰集 ゆるりニまこゝ侍る時九月八日
伊勢ぞ家の菊ニもとを著ニ
ふるゝ〳〵ころ〳〵ばハ又のゆゝと

とちとせうまとて、伊勢數ちぐ君がよはひとのぶつふなぐ
る宿のつゆとなられん、かくし藤原雅正、露ぐふるちぐる宿
の菊ふ〜ぐ、花のいろぐやいくよまふるらん、紫式部日記九日菊
はさくことを兵部のおもとのとてきてこと殿のうへのとうわきそこと
よう老のそひ捨ぬくとのくまなくせつるしあるとば、菊のつゆ
わくゆむうふ袖ふまとて、花のいろぐふ千代いはつらん、○此外
源氏枕の草紙などもそえさう、今禁中ゆそいろくく菊
の綿をつくりてはのるるいいくのちのことあるべし、

龍 くの部九日小 袖の条ふ注ス、**菊花** 時珍曰陸佃埤雅云菊本
云九月菊黄華あり、華事此ふ至て窮り盡く故ふこれを
鞠よりの作る、鞠ハ窮より、月令
鞠 和名抄 菊 和名加波良与毛木 一云加波ヨ 於波木 和漢三才圖会本綱
よ菊九百種宿根より自生ま、其莖葉花の品々同らぶ、
千葉、單葉、心あるなり、心なきあり、黄白紅紫間色浅深大
小の別あり、其莖株蔓紫赤青緑の殘あり、其葉大小厚薄
尖丸の異あり、又夏菊秋菊冬菊の分あり、○百夜草、星
見草、金草、くこ草、千貫草、齡草、山路草、少女草、弟
草、草の主、殘草、爭花、花の兄、百菊、猩々菊、醉楊菊、大

白大槃若、翁草、隱君子、女花、鞠花、秋の正花、秋〜くの花、契
草、蘇我菊、承和の色、殘菊、野菊、ぐらあわび、各頭字の部
ふわちて注ス、

鬪菊 古今著聞集 延喜十三年十月十三日
御記云仰侍臣令新菊花入三番
相爭勝負以甲時各方領花參入一番合自仙華
立庭中一番種花以各洲形二番裁次取立御前次第進花
候御前傳作勝負十番勝方簾中左衛門督藤原朝臣
拜舞選進菊中各四本裁西方庭、

菊の淵 古今 宿の菊丸
ちらつのけふごふ幾世
つもりて淵ちちるらん、

金目貫 百菊の内より黄、
みて万重ふこそ

秋

牡丹 大和本草 秋牡丹外品 農圃六書ふこと嗅バ臭〜〜
云今試るふ然ア春分移し植九月中菊ふ先ア開く、
紫菊ふ似さう、初め深紅ちて後浅紅ム中 畧 鞍馬貴布禰
摂州箕面又西州諸山ふ有り、本邦ふ昔よりある草ふ〜〜
○京都の俗ちる菊こき ふ

貴船祭 九日 神社啓蒙 山城國愛宕郡鞍
称ま所説のごと〜、
馬の北一里むりふ有り、祭る所の神二座、高龍の神是水德
の神ちて、別當の神宮寺二の堰社さう 神代巻 伊弉諾尊

訶遇突智と斬て三段とす、其一段ハ高靈龍とす、[二十二社註式]貴船の社ハ船玉命と高靈龍とす、[改暦雜事記]九月九日小兒咳逆疫して死亡まること多し仍て相者をして卜せしむ云貴船の神の祟なり所くとゝふ於て弘仁二年百六代淳和天皇弘仁九月九日疫と追しむ、今貴船の神輿と称して洛中と振るかの是この遺意なり○小〻てより以来毎年九月九日小児相集て小さき神輿と作て、貴船祭と称して市中を振るゝと狹小輿とらくとて、北山祭 廿日六所の社ハ洛北鹿苑寺の西南衣笠の岳の良平林の中ふたつ〻祭神詳ならず、例祭九月廿七日名勝志の説ふ同し北山天神祭九月廿六日、この拜殿ふ於て三番叟あり、正月廿七日六所明神ふ猿楽のつ、[管見記]九月廿七日等持院村祭、松尾社等持院鹿苑寺ふ相隣る故ふまゝ〻北山祭と称す、[類聚國史]北山の神社ハ大北山村ふあり、天長五年八月天地変災あらんとす、丁丑ふ北山の神ふ祈る、[名勝志]北山ハ高橋の西北四五町ふあり、高橋ハ北野平野の間紙屋川の橋く洛陽より戌亥のゝ北方ふ当りて、とゝとゝ、古より北山と称す、疑らくふ村名ふあらん、○毛吹草ふ北山祭廿五日と記諸説迭ふ異し、金柑

時珍曰金橘実と結ぶ秋冬より黄熟す、**枳殼** [本草綱經]枳ハ橘の如くして小く高さ五七尺葉橙の如く刺多し春白花を生ず [大和本草]枸橘今案ずるに和名カラタチといふものゝ其木より多き故ふ人家植て籬とす盗ふ備ふ昔より國俗誤りて是と枳殼枳實とす〻〻薬ふ用ふ非ず、

寺千部

十五日より 明顯山祐天寺ハ江戸驪黒ふあり、廿五日まで 開山ハ祐天大僧正例年七月十五日より廿五日まで阿弥陀經千口修行この節赤詣多し、

夕顔の實

品類多し、○瓠、長きと越瓜の如し、首尾一のゝ〻○懸瓠瓠の一頭ふて腹あり長き柄ある者、○柄ふくして円大、形ち扁き者、○壺 匏の短き柄有て大腹ある者、○蒲蘆壺の短き腰の者、○其形状各同じからずといへども、苗葉皮子性味ハ一ちなり、右本草時珍の説し、○乾瓢ハ瓠畜と云生ずると日ふ注又塩とひ〻おりとうけおきて日ふほまゝはし、

秋 きゆ

七月 葉

兼三秋物

夕月夜 [精胥]

の大小ふようして朔二日の夕より出現ある事分明〳〵十日あまりの頃までも、暮ゐ出るわゞの月と夕月夜と讀ふらそ

弓張月 釈名 弦ハ月半の名〳〵其形一旁ハ曲し、一旁ハ直くして弓の弦と張が如き

夢野の鹿 摂津国風土記云、雄伴郡ゐ夢野あり、父老傳てゝふ、昔刀我野ゐ牡鹿ゐ、その嫡と此野ゐ居るその妾の北鹿淡路国野島ゐ居る、彼牡鹿屢野島ゐ往て妾と相愛て既〳〵く牡鹿来りて嫡の所ゐ宿る明且牡鹿その嫡ゐ語りて云、今夜吾背ゐ雪ふりおけりと見き、又もゝき草生ゝりとき、此夢何の祥ぞ、その嫡まゝ夫の妾の所ゐ向往ぎを悪ミ乃詐て相〳〵て云、背の上ゐ草生るハ矢背の上ゐ射るの祥、又雪ふるハ白塩穴ゐ塗の祥、波淡路ゐ渡らぞ、必船人ゐ射られて海中ゐ死ん、謹て復往事ふるとそ、その牡鹿感意ゐ勝ぞ、復野島ゐ渡る海中行船ゐあひて終ゐ射殺さる、故ゐ此野と名づけて夢野とふ、俗説ゐ刀我野ゐ立る真牡鹿も夢相のまゝふ、云云 河社 契仲大人云、仁徳記ゐ菟餓野の鹿の夢のこゝ、あもどゝそとゝ夢野とゝゝいをぞ、こゝゝふ

よりて夢野

茄菱 ひの部菱取の条〳〵〳〵、

九月 **柚** 説文 柚ハ橙ゐ似て酢し、柚の皮ハ苦く、橙の皮ハ甘し、

柚味噌 柚味噌ゝ云ものゝ作る、柚一箇と二片とあり、瓣核と去、熟湯ゐ投て輕くもみしめ、取出し乾〳〵置て、柚味噌ゐ用ふる所の味噌と其斤ゐ盛り包ミ編笠の形ふ〳〵よく蒸して用ふ、抵園の茶店関東何某始て制そる所ゝ、

行秋 行秋の こゝくゝせゝ 猪麻俗目こゝゝとゝもみぐゝ

め **七月** **益母草** 和漢三才図会 頭背翅尾黄の条ゐ出ッ、

眼白鳥 青ゝそ鮮明〳〵俗ゝいゐ淡朝黄色是ゝ眼の睫ゐ白圈あり、胸臆白くして、枝色と帯ぶ、腹白し、性ゝく群とゝそ、友と好て樊の中ゐ在ゐ亦一撰

八月 **名月**

ふ集り相依て至ふ推そ、其中一雙飛出群と拔るときは、餘きと相推そ又中より拔去初のごとく、毎ふ物こ好む

又 七月 鼠尾草

時珍曰鼠尾穗の形と以名ふ命ず○韓保昇曰鼠尾草の如し、花赤白の種あり、

水懸草

[増山の井]説々

ひろ、貞徳云

尾蓋の端ふ夏四五穗と生ず、車前の如し、花赤白の種あり、水影草ハ俗ハ七夕ふよめり、水懸草ハ稲の事ふり又或説ふ[illegible]聖天ふ水むくる心ず、

三井寺女詣

十五日 江州長等山崇福寺 又蓮福寺 地福院を大津の側よあり、園城寺又三井寺と称ず、園城寺ハ御園ふ隣ると以て名と、三井寺ハ西巖ふ天泉あり、天智、天武、持統、三帝即位の時この井の水と掬て浴湯ふ献ず、因て御井といひ、後ふ改て三井ふ作る、是三皇の浴井龍華三會の義こ、この寺平日女人結界の山ふ入ず、七月十五日女人の参詣を許し登山せしむ、これを女詣とつふ、當山ハ智證大師四珍の開基こ、

妙法寺の火せの部施火

の条ふ出ず、

御狭山祭

穂屋 其日 信多諏訪 郡諏訪明

神の祭こ、今在記上諏訪ハ建御方富命、下の諏訪ハ坂入姫命こ或説ふ御射山の祭ふハ、薄ふて神殿を造ず其外人の家も祭の程ハ皆薄ふて作る、又こゝを云もまきのたこ、日本紀才二野槌の神ふハ五百箇野蔓の八十玉籤と揉こむ、是ハ天照大神と天の岩戸ふ出し奉らん迚時のまきこ、うて信多諏訪ふを山祭ふハ薄と以幣とす故ふこゝを刈信濃とつふ、○此祭ふ遠笠懸を射て進らせ、其始田村将軍の安倍高麻呂と伐んとふ信濃國ふ至て此神ふ祈て申されふ握の葉の紋付し直垂着こ人胡の波上ふ馬と走らせて笠懸射こ神事こす、ろいこの所謂ありとうて翌波とも記て諏訪ともよめり、

縁起ふ出、當社ハ桓武の御宇、田村将軍の建立こと也、この神ふをつく田猟のこと主ごゝふこ、○穂屋御狭山ふ作る穂屋ありこの祭ハ貞徳説ふ八月こ藻塩草七月廿七日とも此説多し、まとぶき狭山の井ふハ七月廿七日とも此説多し、まとぶき狭むらいハ勅使と立らるふ穂屋といふハ、勅使尊敬のこと新ふ仮屋と設けるこ、今もその余風ふて穂屋と造るを、ぞ、新式秘抄ふ云穂屋つくるハ諏訪祭のこと、諏訪祭ハ

年ふ七十五度あり是その一ッ、みさ山祭ハ山城笠取の近所
しとらふ説あるど、名所方角抄哥枕秋の寐覚ホふハ信濃と
まど〇猿蓑 雪ちるや穂屋の薄のこゝろさし 芭蕉

蓑荷の花

周礼 燕氏喜草ところて毒
と除く宗懍謂喜草則蓑荷の花是ゝ〇時珍曰崔豹
古今註云蓑荷其子花根の中ふ生ず花のまゞ敗れる時
食ふべし、冬ゝき
ときハ肯爛ず、

兼三秋物

身ふ入

湛方生秋夜賦 氣入肌以凄凜
灑林薄以寂寥 甲子紀行 のぎらし

三日月

新月 朏魄 纖月 文選

とこゝろふ凡のふむ身ふ入る芭蕉
月賦ニ出ッ 礼記の注 月三日ふして魄をふむ向云朏ハ
盛明あり、魄ふ向て地と出て明生ス〇新月纖月玉鉤
蛾眉磨鎌ホ三日月といふ此外種々の譬喩詩々
ふ多し、〇何事のこゝろそ似ず三日の月 芭蕉

梨

水梨形ち青梨
う似ふく褐色、

蚯蚓鳴

歌女 釈名土龍地
龍子、寒蚓
ホの諸名あり〇時珍曰東方虬賦云其鳴くこと長吟
故ふ哥女と名ふく孟夏ものて出仲冬蟄結て雨ふ

ときハ虫晴るゝときハ夜鳴或ハ結ぶときハ化して
百合となる蟲魚と穴とおちる〜〜〜〜して雌雄とちゝふ、

蓑虫

鬼の子 和漢三才圖会 諸木の嫩葉漸〜舒老葉
巻ことあり中ふ小虫と生ず其虫枯葉と喰
ひとり糸と吐き用て窠と作る長さ寸ばかり婆娑こゝ
燃ゝとらる艾柱の如し毎ふ枝ふ縋る其虫も又黒色斑段
ありて首こゞる時々ふ首と出して嫩葉と食ひ其首と
動さ貌蓑著ふる公羽ふ彷彿ふり、 枕草紙 そのむ〜ふこ
哀くおふのうみ〜多こバあれふ似てこゝもおかしうきこゝち
そあらんとて親のいきなめいきなをせて今秋風のふくこゝ
ふゝこうんぞるまてよふらいふてふげていふるもちふ風の
音なもりて八月ばかりふ成ぬれば乳くゝ
いくゝうあらまこん 蓑虫説 素堂 ちゝむ〜〜〜声のゆゝぼつの
なさとなれむちよくくとなくハ孝ふ事ちるものゝ
いりふつくゝて鬼のふもゝんん清女ら筆のちゞ〜やう〜鬼
ふりとも聲曳と父として舜ふくん汝ハ虫の舜ふくん下 畧〇
季吟云蓑虫とゞりハ雑く鳴心あれば秋と、

八月三村祭

三村或ハ水村ふ作る泉

州堺の庄、塩穴の下条開口村ふあり、住吉旧記祭る神伊弉諾尊の御子、事勝食勝国長狭く、後ふ生玉牛頭天王と合せ祭る、乃ち住吉の外宮なり、故ふ朝廷二十年ふ一度住吉の社造て替とあるめふいき、當社も此義あり、社地も開口村木戸村原村の間ふ俗三村大明神と称し、大きな祭り、

泉州府志 社説云、密来山念仏寺、聖武帝の御願ふ依て行基僧開基せる所、社領八十石〇例祭八月一日二日と三村祭、又大寺祭とも、木戸村開口村原村の産沙神ふて、大念佛寺の鎮守なり、

三津八幡祭 十五日 摂州西成郡大坂三津の寺町ふあり三津とハ高津

敷津難波津是ふ傳へふ昔行基寺院を建て三津寺と号、後神託ふよりて八幡と勧請せ、毎年八月十五日祭礼ふ、社説ふ、当社ハ清和天皇の御宇、筑紫宇佐の神を男山ふ遷座のとき、西海より初て至りあふ洲中ふ之の旧跡ふ祝い祭るとふ、又一説ふ應神天皇行幸の地ともいへり、

〇摂州難波堀江の人月と此所ふ賞せ、各深更ふ及びて家ふ帰るこゝと月見と称せ、又難波の御祓と称せ、是八幡祭ふ、

水引の花 和漢三才圖会 水

引草高さ二三尺、葉楊櫨ふ似て細ふ、秋長穂ふ出小き花つく、紅色其莖円く、織く紙撚及び水引の如、故ふ名づく、

水始涸 月令ふ出ッ

九月

三度栗 本朝食鑑 上野

州下野州ふ山栗あり、極て小ふ、一年三度栗ふ収む故ふ三度栗と称せ、味佳あらぎとせ、古の所ぐりなり、

水木 和漢三才圖会 美豆木

木の葉ふ似て微厚く各渇れ花藤の花ふ似て黄色あり、一種土佐の山中より出る者高さ一二丈、葉粉團花の葉ふ似て小し、正月黄花を開く、攢簇て下り垂る子と結ぶ赤色呼て土佐美豆木ふつく、〇実と賞して秋ふ、

蜜柑 和漢三才圖会 太知波奈 紀

名ハ橘類の總名ふ、今單ふ太知波奈と称せるものハ包橘ふ專果ふ、其皮を薬ともし、乃蜜柑ふ、其実熟せるときハ蜜の如し、故ふ名づく、たちばな草 橘ハ淮と化して枳ふなるとふつきまろとふひゝふ此国ふてふ、こうん九年母をごつるもの、其樹を移して出羽ふ植るとも、枳殻とあるとふり、

水の紅葉

川の紅葉ふ同し、かの部ニるべし、

七月 七夕 七日の夜 といふ、二

星 牽牛 織女 犬飼星 月令廣義 焦林大斗記ニ云、天河鼓 彦星 たなばたつめ の河の西ふ星あり、煌々たる参く倶ふ出ツるを牽牛ニいふ、天の河の東ふ星あり、微々たる氐の下よりあり、これを織女ニいふ、世ふ雙星ニ倣

名抄 尓雅注云、牽牛一名河鼓 和名比古保ニ又伊奴加比保之 織女 和名太奈八太

豆女 和訓義解 ヒコ星ヒコハ男子の美称 織女の表号ニ故ふ男星ニいへり、

二星の屋形 唐の天宝年中、宮中七夕ふ錦繡ニて 結ひて樓殿ニふ 高ニ百丈数十人ニ容べ、花果酒炙ニ陳ね坐具ニ設け以て牛女の二星ニ祭る、○本朝式ハ少く異ニ七ツの棚ニかき花ニ折瓜果ニ備へ 空焼 ニ焼 ものの事あり、

七種の舟 七種の舟ハ色々の宝ニ七色舟ふ積て手向るニ、七夕ハ七の数ニ用ふ、

新吉原燈籠 一日より 享保元年江戸 三十日迄 吉原の遊女玉菊ニ追薦のため、一年七月中の町の揚屋各燈籠ニ出す、是より例ニ成りて毎年此事あり、その燈籠綾錦ニ以て禽獸諸物ニ造り奇麗荘観いとゞ〳〵もて、この節男女群集をそれと燈籠見物ニいふ、燈籠ふ玉菊ヶ来る夜

聖霊棚 たの部昊祭の条ふ出ツ、

鹿鳴草 異名分類 抄鹿鳴草 和名三々波木 故ふ此名あるべし、八雲異本ふ草、秋の草ニあり、教長集都ニも咲ふ、ども鹿のふく名あり、草、秋の山ニ

石蒜 大和本草 老鴉 赤くちびるれニいふ、四月或ハ八九里、月赤き花ニ咲く下品ニ此時葉ふて花ニ咲故ふ筑紫ニて、捨子の花ニいふ、○彼岸花ニも いく曼珠沙華の条のもとをいるべし、

秋海棠 名花譜 秋海棠一名 断腸花、嬌姿柔軟真ふ美人の粧ニ倣べし、性陰ニ好び日ニ見るふ即瘁く、九月枝上の黒子ニ收め地上ふ撒けバ明春枝ニ発ニ老根冬ニ過る者花発き更ふ茂る、 大和本草 寛永年中中華より初めて長寄ふ来る、それ以前ハ本邦ふハ色海棠ふ似ル、故ふ名づく 五五〇

椿材 時珍曰椿材、名漆材即ち材ふて車

秋海棠西瓜の色ふ咲ふ苣薫る者故ふこれを椿ニいふ、他の材熟するとき黄赤惟熟セとそれも亦青黒色搗碎き汁を浸もこれを漆材ニ食扇

諸物と漉べし、澁取 故ふ漆の名なり、

和漢三才圖会 柿澁造る法、柿一斗帯と去水二升五合ふ和確ふ搗こ搗ふ盛り宿を經てこれを搾て渣も又水ふ和て二日を經ふたびこれを搾る其用甚だ多し、

兼三秋物

ちら露

李白詩 秋露如白玉、伊勢物語 ちらくまの何ぞと人のとひしとき露とこたへて消なまし

物 みの部三日月と、新月 の条に注を、ちまほ〜 月の異名なり、

秘藏抄 朝敎ふらふらるみとりの空ふ凡ふけばぐぐたんまもを星の影、

常娥

准南子 羿不死の藥を西王母ふ請ふ、姮娥これを竊んで以月ふ奔る

後天文志 常娥ハ羿の妻、不死の藥を竊んで月ふ奔るなれと蟾蜍なり、

真如の月

法華玄義 清淨真如ハ雲外の月のごとし、○衆生の真如仏性ハ常に煩惱ふつまれても其体ハ少しも染ぬこと汚ぬこと喻ハ月の雲ふ掩ぬるとも其体ハ清く明らかなるが如しなどと真如の月とも云へり、真ハ不変の義如ハ不異の義、

篠芒

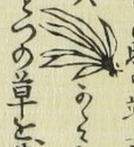
宗祇曰ものもきとハ穂ふいでぬ薄をいふ、

縦芒

縦ふ白しのべなり文あり、

忍草

真淵云忍のべ草ハ和名抄の苔の類ふ垣衣をものぶるみくり、古き築地朽たる物の端古き軒端あるべふ常ふ生る草なり、



とこゆかくもハ山中ふ多くものみて苔の類く後世の俗ものくるを云ハ古きところ得ぬかく偽名なり、○今云忍州ハ本草ふいへ石長生のくゆびあるべしまたこれを石長生ハ四時凋まぬ今俗の搗ふ掛るものく冬枯るく○後醍醐帝の廟前ふて 御廟年を經て忍ぶハ何とものぶ草 芭蕉是ハ垣衣ふよ

新澁

七月の部渋取 の条ふ出ッ、

鹿

格物論 鹿の性良草を別ッ他獸多くハ十二辰八卦ふ属ぬ惟鹿然らず一千年ふして蒼鹿となる又百年ふして白鹿と化し又五百年ふして玄鹿となる鹿ふ麋あり鹿あり麞あり、

大和本草 鹿の角ハ春生じ夏長じ秋堅く冬脱、牡鹿ハ鳴き牝鹿ハ鳴くなで七月の末より八月の中ふ九月末まで鳴く、○うせぎ、紅葉鳥、さをしか、夢野の鹿、肩抜鹿、まろる、各頭字の部ふこれを注ぬ、但まがるを鹿といつるハ誤なり、その部ふ注ぬ、

鹿笛

猟人鹿角の根及び胎

鹿の皮或ハ蝦蟆の皮と以笛を作て吹て牝鹿の音と偽る、牡鹿旬旬して来て竟ハ弥ハ羅て或ハ陷穽ハ入ル

つれ〻く草 女のもてる足駄也て作る笛ハ秋の鹿のめらぶるを入ることを防んためハ垣を設く是を鹿垣と云、

鹿垣 此獣田園ハ出て穀菽を食農ハ害と除く、

鹿狩 白虎通 王者諸侯田狩その所以ハ何ぞや田の為汎塗の間ハ在て鶉々速声をなす、村民ハ云田鶉の化する所、○時珍曰今田野の間ハ小鳥あり、いまだ雨らざるの時鳴く是なり

鶉 楊氏抄云之木一云田鳥 和漢才 和名抄

鶉 多識論 杉雞 喜斗志義○時珍曰杉雞按ずるに秋、○和と鶉ハ鶉の如く色青く背長ハ臨海異名志云、閩越ハ杉雞あり常ハ杉の樹の下ハ居頭上ハ長き黄毛の冠あり、頬青正色垂縷のごとし、

鳴 職業盡 下総国荻原辺原中ハ鳴の巣居く

突網 動物あるを、七八間隔て竿羅と持て鳴の正面ハ向ひ、ゆらいと付ちぐ〻ろ〻り〻くと廻て最初ハ大輪ハ廻て段々近寄まくハ小輪ハ廻て、止々六七尺ハ間近くなり

てかの竿羅と投てとる、六七尺の所とあるハあるまでも羅とうつ〻せてとる手練の業、是を鳴突とも山鳥の鳥羽辺多しとぞ、

荒野 鳴突ハ

萱津のあまの ひまこそ ハ潮文

鳴の羽搔 和州旅 鶏

羽ともぐく音の高く聞ゆれいとく其数もまた多し百羽ばかりとも数掻とも、暁ハ暁天ハ必ずくわれ者ハ直ハ暁の事ゆといふ、

古人 時の唱の

鶏と看経 羽ばきこゆ羽ばきこゆ君ゆこ夜ハ我を数く

和訓栞 俗諺ごとの田沢ハ居時の閑黙をもてたり、

鰐 和漢三才鬳会 正字未詳 俗云志比良長崎の人呼て比平といふ、按ずるハ鰐の状鰐ハ類して、頭ハ尾鱗細ハ味もまた鮫ハ似て大なる者二三尺九万尺と名く其多くこれ有ると以ていふ越中鰐養と上ゝ相傳て云中華の魚ハて四五月唐船多く入朝の時来て群遊を唐船帰る時、九州の鯛唐人肉食の腥き氣を慕ひ船ハ著て入唐を、夏月鰐日本ハ多く、冬月鯛中華ハ湊ハ多し

大和本草 シイラ又名 久ヒキ

筑紫ハて猫ソラといふ、味美〻

八月 白髭

開帳 五日 神祇正宗近江和歌白髭大明神八幡明彦也 社記 比良明神と同体之○昔八開帳あり元禄中より止む今八只内陣と開て宮殿を拜せしのみ

四月上の辰の日祭礼神輿渡御あり往古の神門石橋の邊八今水中二町ばかり湖水の沖ふかくなり縁起ふかき鳥居のありし所と鵜川より八社頭より二十町ばかり河あり鵜川と号す此川の北と鵜川領とく別當と白頭山延命寺福壽院と号毎年二月八講あり開帳八月晦日

賀八幡祭 十五日 淡海志 四十代天武天皇即位九年壬申近江國滋賀郡ふ垂跡八幡一の御前八幡大井八今の聖真子是之唐光僧の形聖真子八阿弥陀八幡大井の分身之○是山王七社の神わ て淡海国滋賀郡坂本村ふあり見瀬村の神社ふい 月令 秋社 ふ云 あ〻ふ今八山王祭の外神事ふきよ〻あり〻

廣義 暦書云立秋の後五戊の日と秋社を定ふ云 社八后土なり民ともてこれを祀らむ以て農と祈る

活祇祭 此祭八京都猪の熊三条の南湯速の神社ふあり 雍州府志 昔刑部省此辺ふあり獄と断じて死刑と行ふ故ふ刑死の人の為ふこの社を建て祭祀と後せり毎年八月神事あり之と死活杖の祭とい〻ふ○千本引接寺千生の地蔵ふあて毎春修する所の念佛會八元死刑人の為ふ修行せ〻ふ始れりとぞ

四手打、もろろ打 きの部碪の条ふ注も、 **紫苑** 鬼の灸 州

蘊頌曰紫苑三月の内地ふ布て苗と生ぜ其茎二四相連て五月六月の内黄白紫花を開く黒子と結ふ 万葉 萱草吾下紐ふ着有跡鬼乃志許草事行思安利家里 家持○鬼醜女草これ紫苑 袖中抄 鬼のもろ草ハ別の草の名ふあ〻ふ忘草八愁と忘るゝ草なんい意〻き人と忘れん料ふ下紐ふつけ〻れ〻更ふ思ふもろ〻と取〻忘草とふ名八只事ふあらん猶意〻ける鬼の志こ草〻〻しいろ〻ふ誠の鬼ふあ〻ふ〻ふ詞〻日本紀第一ふ不順也凶日汚穢之所云もとこわろ〻と嫌ハ詞〻山の字とあり 俊頼抄 昔人の親子と二人あるとき此草ふ孝行ものあるる親ふ母てのち歎き塚ふ詣て在ず如く有る年ものぬれど兄弟ものもつまて

ゆきぬ其兄公ふつゝて私とうりまるふ堪ぞ思ひそる
やう只ふ止む時ふ忘草ハ思ひをとゞまる物と塚ふ
こゝと植る弟ハくゝるまを恨て紫苑ハ忘れぬ草
くゝと植る兄ハいつの程ふうゝもれて行ぞ世ふ萱草を忘
草といふとまるゝ〻ハ弟ハまを絶を詣でぬある日親
の塚ふ声あり恐るべくゝぞわれハ君ゝ親の塚を守る鬼
神ゝ兄ハ忘草と植て公ふつゝ面つるゝゝ忘られ
家と思ひつゝ貫ゝ其許ハ思ひ草と植てまゝく怠られ
至孝ゝ天帝ハいまゝ給ひてこれよりゝむるハ今ゝ盈
あゝんゝと夢ふ告ゝまゝぞといひて止ぬ弟不思議ふ
おもひ帰ぬ忘れ盈あるてい夢ふ見るふ違ぞ徳を得
ゝゝとゝゝこの紫苑草ハ嬉しきてゝあゝゝ人ハ植てるべき
ふ歎くとゝあゝ人ハ植べゝゝぎる草ゝ故ふもあふ
とゝゝ鬼のとゝゝゝゝふと鬼の師子草と云なり

椎蕈 和漢三才畜会 麥蕈俗云

和漢三才畜会 推の木ようり生を大
あるもの二すぞとり大小叢生も

松露

松露沙地松樹ある陰處ふ生ぞ松の津液と秋濕と相
感して菌となる縞柄ふく状ち零餘子ふ似て円く大き

し外褪色内白く柔ふ淡く甘し香あり

濕地茸 和漢三才畜会 原野濕地ふ生ぞ故ふ濕地

茸と名く状松茸ふ似て小くすぐるふ異ぞ縞の肉灰
白色柔ゝく脆く破ぞ易し九月盛ふ出づ又縞の外黄
色の者あり並ふ食ふ

猪蕈 和漢三才畜会 本朝食鑑 標茅蕈 標茅ふ

茅ふ多く生ぞる地の名下野国黒髪山の下ふ標茅ふ原
あり此則其處あり此茸草ふ似て黒
卑湿の地ゝ生ぞ故ふ名づく

代ゝる雁 夜止宿ふ中

縞脂潤ひ其裏ふ穴
あり蜂の巣の如し毒ゝ
更毎ふ宮ふ換ふ
こゝと代ゝるゝゝゝ代とハ田

四十雀 五十雀 和漢三才畜会小

のゝゝ春の部黄代の条ふ注ふ
雀ふ似て大ふ頭黒ゝ両頰白ゝして白き円紋黒き圏頰
ふ至ゝ胸背灰青翅尾鶯黒ふゝく灰白の堅條あり腹
白色ふゝゝ胸ゝゝ尾ふ至て黒雲の紋あり其声清潤ふ
て多く囀る四十ゝゝゝゝゝゝゝ故ふ名づく其毛
るゝゝ毛を換色ゝ異ゝて形ゝ大ゝ雌ハ腹の雲紋幽微ゝ

鷦鷯 蘇頌曰 状ち母

雞ハ似て鶏の如し、胸の前ハ白き圓あり、て真珠のごとし、背毛ハ紫赤の浪の文あり、○時珍曰鷓鴣飛ときハ必南〈翥る晋南ハ懷南ならハ、江左ハ逐影ならハ、張華ハ注云飛と必南〈向く東西ハ回翔するとハ、いとも翅と開ハ、の始の必先ハ南〈翥る其志し南と懷ひて北ハ徂ハ、性霜露と良ま早晩ハ出るハ稀ハ、夜栖ハ木の巢ハ以て身と敵ハ、多く對し啼ハ、今俗其鳴と謂て行不得哥ハ、其性淒きを好む、和漢三才圖会 字彙云鷓鴣其飛數月ハ随ハ正月の如きハ一さハ飛で止む、蓋未知然るやいなや、近年亦中華より来ることあり、最も珍しとす、状矮雞の雌ハ似て頭ハ鶏の如し、

藻塩草 此鳥ハ寒うりをる鳥ハ仍て秋の末ハとハ紅葉の散ると背中ハ負ふて雪霜の寒をふせぐハ、故ハ奇ハも鳥の上毛の紅ゐとあり、

鴉 和漢三才圖会 今鴉青鴉一物とまるハ非ハ鴉ハ山林ハ在て原野ハ出ず形雀ハ似て黄赤色、翅ハ黑き絶の斑あり、脚掌黑し、

新酒 本朝食鑑 新酒ハ凡新稗の白米一斗と用てこれを釀し、須加利酒と瀝ハ布囊ハ填て舟ハ入其酒の水半滴る復布囊ハ入て壓ときハ酒ハ滴て出つ酒滴て尽て後汁と取滓と去、これと新酒とハ

○新走 中汲 醪醅 袋洗 各其頭字の部ハわもて注ス

九月

四の宮祭 十日

近江国滋賀郡大津の駅ハあり祭る神四座、大比叡大己貴、小比叡国常立尊 氣比仲哀天皇 小禪師火々出見尊 按ずるハ當社ハ日吉の神殿ハ故ハ四座と以この地ハ迁ず、里民云ハ神鎮座の日官幣使四位某の卿ハ故ハ四座と以四位の宮と号ずるハ、四神鎮坐のゆゑハ四位と号ずるハ、社説云祭る神五座、大比叡小比叡氣比小禪師塩土の老翁ハ小禪師ハ本社ハ手ハ故ハ四の宮とハ、例祭九月十日大津浦中の太祭ハ神輿三基ハ山十一邊物造花ホと出ず、夜ハ入て相撲有、

下鳥羽祭 十日

山城国宇治郡下鳥羽ハあり、祭る神半頭天皇と号ず、例祭九月十日下鳥羽及び横大路の土人本居神ハ、神輿一基ハあり、名勝志云神社ハ法傳寺の巽ハ、

白川祭 十三日

名勝志 天満天神の祭ハ、町むらハ森の中ハあり、て洛北白川の里南山の上ハあり、按社山王春日八幡 紀事神輿一基鉾立本あり、○社説云祭る神天満宮少彦名

の尊稱社ハ前に同じ天満鎮座ハ延喜八年十二月十三日也旅所ハ本社鳥居の前二町ばかり西にあり例祭九月十一日土人蓮沙神とす

十三夜

後の月、二夜の月、豆名月、栗名月、月見ハ我朝の風也高濃二十三夜の

ちると近世のえせ儒者に天遠将満一輪月又光彩遍空輪将満といへる詩又明の十二家詩に鄭少谷何大復が十三夜の月を詠ずといへる詩を引て異朝にも十三夜の月を賞すといへれど附會の説也信景云今彼集十二家詩をとくみるに是ハ八月十三夜にして九月十三夜にあらず其外一ツも九月十三夜の月を賞せし詩文なしたとへ一句一章ありともそれハ其人臨時の興にして天下の名月とする事ハ我朝のみ也旧風也【右中記】七十五代崇徳院保延元年九月十三夜今宵雲清く月明らか是むかし寛平法皇明月無双のよし仰出さる依て我朝九月十三夜を以明月の夜とす【常盤記】生態万里小路韶光卿の御説を引て云十三夜の月を賞せしはじめハ天暦七年九月十三夜始て月の宴を行ひ給ひしの遺例となり来りし也但此宴ハ本八月十五夜の御遊びをおくれて行ひ給ひしなり其由ハ八月十五夜ハ先帝朱雀の御国忌に當てあれバ擬しも後れて此九月に其遊を行ひたまへるハ此月とても十五日ハ猶其日次も忌ハしければとて十三夜に定て此月の宴を開き行ひまし〳〵○忠道公十三夜翫月詩云閑窓寂々月相臨従属窮秋望已禁潘室昔蹤凌雲訪蔣家旧徑踏霜尋十三夜影勝於古数百年光不若今馮前軒回首見清明此夕價千金○唐に冨士あるハかへの月も見よ素堂○後の月とハ十五夜に對していへ○二夜の月十五夜の月と十三夜の月とを賞すべし○栗名月豆名月ハ浪華の俗十五夜を芋名月といひ十三夜を栗名月豆名月といふべし

芝神明祭

十一日より廿一日まで

江戸芝増上寺大門の傍にあり神領十五石別當金剛院神主西東氏當社旧地ハ増上寺の山際にあり故に飯倉明神と号す祭礼九月十一日より廿一日迄にて神事あし此節時として秋雨多しこれを以て世俗神明のめくされ祭といふ祭礼の間社内に於て生姜を商ふ是を根勝生姜といふを誤りて一旨生姜といふ本朝醫方傳に云薑ハ織土を去神明に通ずと土俗あやまりの事と誤て傳へし生姜を賣なれどもこの外檜割篭に藤の花を畫き内に飴を盛りてこれを風木箱と称す但し

風味の餘りかそ作れるとそる謂ふべし、城南寺祭
泰詣の人必生姜と此ちき箱と買て帰る、

廿日 神社啓蒙 城南の社ハ山城国鳥羽の里にあり、祭る所
の神一坐鳥羽天皇、○社説云祭る所二十二社の内七社、
伊勢、石清水、松尾、稲荷、賀茂上下、平野、春日、以上城南神
と号す、例祭九月廿日神輿二基あり、この地人皇七十四代鳥
羽上皇の離宮にて王城の南
にあるゆえ城南の離宮といふ、鹿ケ谷祭 廿四日 紀事 浄土村
十禪師祭云、洛東銀閣寺の門前北の方ハ十禪師の
社あり、同所ハ八所明神の社あり、神号詳ならず、土人産沙
神とも、祭礼九月二十四日 今九 雍州府志 鹿ケ谷
天皇祭云云 今祭祀微にして記ふ及ばず、猩々菊
黄猩々ハ万重大にして、乱猩々ハ本紅にして葩
大にして、小猩々ハ猩々の如くにして小にして、女花 菊の異名之
女節 女莖の異名あり、
是ふるりてふふや、兼和の色 菊の異名之 藻塩
草 唐にて菊と
かてゆゆしとい陶淵明ふちづまり、我朝にて兼和帝
仁和天皇より始てにて遊びあひ故ふ兼和の色と申よ、此

ろいまく菊の品も分ともぞ、只黄なると用ひられしくし黄ハ
菊とそして兼和色とも蘇我菊と申ともや、云藻塩草の
説くの如くとしとも類聚国史ふ桓武帝の菊の御くと載
らるとれど兼和帝より菊とはもてて愛しみひしかあひ、
只此帝ひきて菊とかて遊びあひ
く後の哥ふハ多くちら菊をあり、ちら菊 和訓栞 菊ハ大要
黄を貴づり詩人の賞する所薬用ふ入もまと同じ、さるふ哥
ふ多くかくよくハ新羅菊の義ことなり、花史在編ふ菊品
新羅、一名倭菊千葉純白とそえり、芍薬の根分 芍薬其花肥大
あるとと欲を、蜜
瀼とくるへ毎年九
月根を取削り去る、柴栗 栃栗のこ
熟柿哉 支考 椎の實、椎柴、椎の葉、 大和本草 椎ハ闔
書ふこまと載て
本草ふこまとり 羅山文集 余幼年より椎ハ木の名子果
あるを太平御覽ふ在と聞く後ふ又考まて、蓋胡説狄頃国
書南山志を見るふ椎ハ科子と其末尖て錐ふ似とり、
故ふ椎といふ宋志ふ椎ふ作る木に従ふ之下 畧 和漢三才

會 椎子、鐵樹、其葉椄ハ似て鋸歯細ハ強く冬もまた葉落ず其実長く尖て筆頭ハ似て紫褐色仁白く両片とあるも云 凡椄鉤栗椎子の揀相似たり小椀の如し俗呼で供器といふ○季吟云堀川百首ハ椎柴と冬の題ハ出せり其故あや冬ともる一説あるべし実ハつきこ椎ハ秋季と持るゝハ椎柴も葉も実も秋といふ

松子

新松子

海松 大和本草 海松五葉あり、若水曰信州戸隠山あり、然るハ日本ハ本ハ多ハ松と訓ぜるハ非ふべし、松ハ大こ子ハ果〻食ふべし、日本の産ハ朝鮮より来るゆへ。

倭名抄 松子 漢語抄云五葉松子和名万豆乃美 ○青林を大坂の里語ハ新松子といふ

貞享式 此式ハ例の賞翫ハ奈何とあれバ菊ハ冬ハ枯て食ふ

新蕎麥

新米

食療本草 ハ秋なる前後の働と賞して、粳米新熟の者ハ気と動し、しも年を経る者ハ冷病を発す、

千首 かりのとも霜置て岡べの道ハ

霜踏鹿

さゝ〻〻らの声、称名院

の巢と戴く

夢華録 唐の時、立秋の日京師楸の巢を賣る、婦女児童剪て花の樣ふり

てこれ

一巢

桐一巢 淮南子 一巢落而天下知秋○一巢ハ桐とも柳ともつふ句体なるべ

と戴く、

一巢の舟

一巢の水ふ浮べると舟ふ

冷

御仆 初秋の事ハ

一巢の舟詩文ふ多し、

暮秋ふハ

彦星

去の部二星の条ふ出づ、

火取香

棚機ふ手向 江次第

西北机ニ居香爐一口、納殿の百和香四両盛之

蕓麻子

公事根源 机の上ふ火とりふ終夜空焼物あり、

唐胡麻ハ

楸

時珍曰楸葉大ふして早く脱つ故ふれの部ふ注も、

と楸とハ、

ふれと頽らふ

花軍 橅 品字箋ふ出ツ

ヒサキ、キサヾケ、カフ

蜩

大和本草 時珍曰小ふして色青

テコブラ、ライテンキリ、人家往々こゝとと栽高さ二三丈白鐵樹ふ類して皮赤龍の鱗の如し、葉ハ杉木ふ類〻〻大或ハ尖て或ハ三尖夏筒子の花とひら〻小ふして白色紫点あり、凋て莢と結ぶ数十簇とふて枝の間ふ垂ふ、長さ尺餘

七月楸

緣ある者、尔雅註云小青蟬也此せミ山中ふかく晩ふかく故ふ名く常の蟬より小ふして青赤ニ音聒〻〻ニ聞ふ堪へ寒き鳴く、

兼三秋物

引板

拾穂抄 板ふ木を添て綱とつけて引ふ

し鹿を驚

一本芒

天和本草 一稟ニ多く叢生して、

八月菱

ふ物あり

取

茹菱 時珍曰芰實一名菱或ハ沙角ニ角稜峭

これを菱とふ俗呼て凌角ニ云、中畧自潮中ふ生ず葉実ともふふく其角硬して人を刺其色嫩ふる者青く老る者黑し嫩ふる時剥食ふ甘美ニ老る時ハ蒸して食ふ、天和本草

穆

時珍曰穆苗芟柔の如し八九月茎を抽んづ三稜あり細花と八月九月これを採、

瓢簞、百生

千生 和漢三才畨 青瓢簞 会 苦瓠 俗

栗の穂の如し、

瓢簞

二云瓢簞壺盧と一類ふして別種ふる者明けし巣花小ふして壺盧ふ似て瓢の味食ふふ堪へ四大ふる者多く炭斗ふ作る長して細腰ふるあり酒樽ふ作るべし長五六寸の者あり俗百生と称ス三寸の者あり千生と称ス細

腰本末相均しき者俗呼て平蕈 和漢三才畨 会 平茸 山林の湿地ふ生ず 苦楝

て間夜とふ珍ふ、の樹多くこれと出ず十月盛ふ其形松茸ふ似て瘦傘薄く面し故ふ名く大き二四寸亦至て大ふる者あり灰白色裏白く細き刻こあり性柔ふ脆く其柄多くハ正中ふ生ず畏偏て生ず大小義最生ず味淡ふ甘、

鴻

和漢三才畨 会 菱喰状ち雁ふ類して大ふり背頸俱ふ灰色翮深黑其尾本白く末黑し腹白く脚黄黑色黑くして鼻の辺ふ黄の條あり其肉の味雁ふ劣らず脂ふまず多し臭香鶴の肉ふ似ることあり、

鵯

和漢三才畨 会 俗云比与土里状ち鸜鵒ふ似て尾長く蒼灰色頭上の毛乱れ起眼の辺ふ微赤色ニ帯ふ胸臆灰黑腹の下灰白く俱ふ黑き斑あり觜利く脚脛短く掌ふて蒼黑く常ふ群ニふて飛啼好て草木の實ニ食ふ或ハ云山茶花

鵁

古抄秋ニ貞享式ふ見ふ冬の部ふ入ル汪ず、

日雀

和漢三才畨 会 俗

と食ふ、

云比伽羅状四十雀ふ似て小く頭背赤色頰の辺ふ白黑相交る腹白く翅尾黑く其根澤ふ、

鶸

河原鶏 和漢三才圖会 俗云比和止里雀ようの小く全体黄色にして青と帯ふ頭背頸翅ふ黒を交ふ尾黒し腹黄白嘴灰白く脚黒し其声清滑よく轉る又河原鶏状鶏ふ似て稍大く頭背灰白く眼の後微黒く背ふ黒き斑あり翅蒼黒ふして黄と交ふ

大和本草 唐鶏 紅鶏 蓼鶏ホロロ状略之

鰹漬

和漢三才圖会 一二すむうりの小鰹を用て醢とす造法鮮鰹一升洗ハずして塩三合和し三日ありて後石を以ことと壓す或ハ同く茄子生薑穂蓼番椒ふ漬るも又佳く鰹の字未詳 本朝食鑑 鰹ハ小鰹あり

九月

賜氷

九日 公事根源 十月の旬のこふあらぎ今日を氷魚と給ふ例あり 年中行事 菊ゆみぢ折しく氷魚を取ていくさふ給ふこときこのちろぎ内侍

百菊

滑稽雑談 いまて草ふ云和朝よりおいて菊と愛する中ふ殊ふ百菊して百種の名あるもの有り傳へふ足利將軍義輝公御園ふ植らるる御寵愛あり義景藤孝両人ふ贈られ〳〵百種の菊あり百菊ハこの種あらら〳〵云云

鴨上戸

和名かの部ふ出づ

錐栗

時珍曰栗稍小きもの山栗ともいふ栗の四ろうして尖らざるを錐栗ともいふ

瓢の樹

和漢三才圖会 其木の葉女貞ふ似て厚く狹く長く微淡し三四月小細花を開く深赤色実を結ぶ大さ豆の如し自ら裂る中子細小ふして黒色別ふ其巣の面ふ子の如くなるもの脹出て中ふ小き蟲あり化し出づ殼ふ孔口あり壁埃を吹去ハ空虚となる大なる者ハ桃李の如し其文理梹榔子の如し人用ひて胡椒秦椒ふの抹と收る瓢瓢ふ代ふ故ふ俗瓢の木と云ふ或ハ小児戯ふ吹て笛とす駿州ふ多くこれあり祭礼ふこの笛と吹て神輿ふ供奉ふ

榼藤

時珍曰其子榼の形ふ象る故ふ名く紫黒色微光る大さ一三寸四ふして偏ふ人多く肉を剔き去り藁瓢ふ作て腰ふ垂る 廣川記 藤ふ似て掛ふつく通草のごとし

稽

字彙 秣再び生る稲文

古今 州ふて田ふ植るひちのわふ出ぬハ ぜと今こそらわきたてねとこう よそ人ぞ

百子姫

棚機七姫の内ふ百子の池より名くとい

百子の池

ふの部七子の池

七月

の条ふ

出ゞ、紅葉の橋 古今 天の川もみぢとはしわ
ゐせゞ、ゝちぶるゝ秋とも
あり、真洲翁云ゝ
ゝ紅葉の橋ハ秋ハもらぢと専とすれ
初秋ふて紅葉せぬ比ゆゑ
のこ、中暑此紅葉と橋ゝとつゝ
今ゝむかしあやまりゝ多し、○青藍云此古今集の
より天の川原ふもみぢの橋ゝる趣ふ古くよりあり
又棚機のゝるゝんとするとき、紅涙とおとゝを、
もみぢのゝゝとゝ説ハ、後ふ設けるゝ、紅葉
の帳 藻塩草 紅葉の戸ぢりとハ錦の戸帳ど七夕ふひ
よせゝゝ 天木 かゝぎの河瓦ゝぬたれゝの、
もゝぢの戸ゝ浪や
ゝゝん、後九条内食、文珠會 八日 公事根源 是ハ東
寺西寺ゝて行ゝ、
仁明天皇天長十年七月八日、大法師泰善ゝて文珠会
と修ゝ、大改官府 其略曰、文珠会ハ畿内都邑廣く此会
と設け、兼食ふと身じて貧者ふ施しゝふ是又文珠涅
槃経の文ふ依ゝ云ゝ若衆生ありて文珠師利の名と聞ん

ふ十二億劫生死の罪と除却せん若礼拝供養
ゝる者ハ生々の處恒ふ諸公の家ふ生まん云云、かゝぐ
つゝ 秘蔵抄ふ出 桃の子 時珍曰桃の性旱花植安く
稲妻とゝふ、ゝて子繁し故字木兆う
従ふ十憶と兆とふ

兼三秋物 望月 説文 望 八月の満
其多きをゝ
ゝる、日と相望む君ふ朝ゝる如し月ふ 紅葉鳥 鹿の異名
从ひ臣ふ从ひ壬ふ从ふ壬ハ朝ゝるゝ
ゝ 蔵王 ゝゝ田の山のゝ
ち鳥ゝゝの衣きゝゝゝ
藻ふ住虫音ふ鳴 本草約言 紫菜其中ふ螺蛳
ゝり 大和本草 約言ふ
哥ふゝゝ藻ふ付て殼の一片ある螺
分殼の意ゝ 古今栄雅抄 蛩の刈藻ふ付て此むし我ゝ
と身とほろぶふゝて名づゝ 古今 蛩のかゝる藻ふ
ゝむ虫のゝれゝゝ
朝臣○御傘 鵙 和漢三才圖会 鵙音臭兼名苑又鵙
ふハ雑ゝ
と用ふ日本紀百古鳥と用未詳鵙

鳩ふ似てふく、頭背尾ふ至て黄褐色、眼及び背顔の容小き鶉ふ似て、眼の辺ゑ黒く、眼上の白き條一条ふ引、嘴黒く、くちばし末曲る、頰腮白く、腹黄赤黒きと横斑あり、翼白く、羽黒し、脛掌黒く、爪利して毎ふ鳥と搏てこれを食ふ、其声高く喧しく、奇異ふつづ如し、

○秋ふ至てよく鳴く、

鵙の草莖、鵙の早贄 奥儀

抄 むかしある男、野ゑ行て女ふあひぬとのくかたらひつきて其家をとふ、女鵙のあるる草ぐきをさして曰、我家ゑ入れ草莖のもぢふ付れることをふ、男後ふ入れられどころ無ぐきよりと契りてさりぬ、その後心ふかなひあらはれ、ひけふつうまつり、私をうりうる法どふひとまれくてやもぢあるぬ、次のとしの春、ふくありし野ふ行てとふくく草とこるふ、霞こもりくく聳てもぢくく見えず、それもとあがめをむあるく帰さぬといひ、これ故将作の傳あり、

袖中抄 鵙の草莖とは、鵙の草くぐるとふまり、

哥林良材 鵙の草莖ハ、鵙ハ時鳥の沓ぬひて有るが沓手と取てうさぐるふ、ふりて其ふりふるゆうの物と、草の莖ふさしをさるとふとふ、是と鵙の早贄とふのふり、

澡塩草 鵙早贄とのふとをしてよろ所の草莖ふいとこるる虫かふ蛙ふどとりて、刺て時鳥の為ふとく、ふるぶふうるることふり、八要の鄙説ふ説ふ説々あり、此説ふ過べうらぶ、

日くらせゼ 鵙の性として、必蛙或ハとうげふどを取く、草木の立枝ふ刺貫き晒ふ、これを鵙の早贄とふ、人気疎き別荘ふとふまくあり、

○諸説くくふる本説ふとふくくも後の人取用ひくくふるる哥とあるべ、これむとふの説ふまてこひて句作あるべ、

鵙落 紀事 山林の間四ふ鵙の目と縫ひ架頭て居傍ふ竹竿と設て鵙鳥と執る是と鵙を落とす、

八月

木犀

花の条ふ出、

九月

百夜草

菊の異名ふ、

藏王 名ふ、

ふ翁が庭の百夜草花さきてことを白妙ふまるれ、大和の國三輪の里ふ老翁あり、彼庭ふ一本の菊とうゑて此翁かてあそぶ、この菊秋冬をきて、春夏までも花も葉もうくくぶ、所の者不審して委くくぶ聞ふ七月一日より毎夜菊の下露を器物ふうくくとし百夜あり、毎月此花を芯これふ依て此菊四季ふをぶ仍百夜草と号く、

紅葉

和訓栞 紅葉とよめり、

紅出しの義なり。の反ぢ、かとい、みぢ葉といへるを略し
てゆみぢ、のこいつり、中略、ことづるともかみぐもことおふとう、
ゆこぶるハとゆみぢをるまつ、ぢすの反つまりゆこぶるハ
ちまをこまりぢふの反たまり、○ゆこぢまる木ハ楓攝、椎、白
膠木、蔦、檀、柏、楢、柝、梅、櫻、正木ホ、各頭字の部ふとうちく
註も、○楓のゆこぢをぐまとる故、花とゝハ櫻とまるぐごとく、
ゆこぢといへハ楓のゆこうゆ、又ゆこぢハ山より染く里
へそめ下る花ハこゑとゝ、ふり、こゆいちり麓のゆこを
こぐるまでこぐ庭ゆふ
うゑきゆみぢ葉 玄旨法印、紅葉の舟 和訓栞 源氏ホ紅葉をゆこぐごとし
たる舟とゝも紅葉のゆこを
ゆこぢのをぶねゝもこゑとゝ、紅葉かつちる 青藍云 俳諧歳
時記ホ馬琴云、紅葉ゆこぢ
の花ゆどいふつふねゆ、をぐまてゑやきゆこゆ、
又陸佃が埤雅ホ茶褐色ハ黄黒色ゝといふ、樹々の下枝
ハ早く色つゝくるゆ、雨露のくるふゆ、黄黒と茶褐
色ふありてちまるとゝふゆ、故ホかつちる秋ゆ、
下ゆこぢゆつちる山のタ、ゆれぬてやひとり鹿の鳴ら、

家隆 家兄羅文云かつちるハ数々ちるゆ、古、此説ゆ
おぼつゆ、かつちるとゆつるハ盛ホ染ゆゆこぢのくろ
くいちりちゆるとゆふまゆくゆ、
のかつとゆふことゆハ此心ホて寄ぞし、紅葉狩 紅葉を尋
ると狩とゆふ 俊頼集 をぐれゆくゆの
原のゆこぢ狩、ゆのむ蔭ゆくふくゆらし歳、紅葉衣 桃華
藻葉 表黄、裏蘇芳、九月より十月まで 一説ホ面裏青、又黄紅葉、面
黄裏青、青紅葉表青黄、裏紅、其外櫨紅葉、紅葉、重、蝦手紅葉
等品々 鹿文云増山の井ホ重陽の下ホ出ぶ
これあり、紅葉土器 禁中重陽の宴まゆこをまあゆ
ゆこぢ、御厨子所の預り高橋氏ハもとひをぐまこ紅葉
土器の名目あゆとゆふ、按ずるホ菊の盃ホ對ゆこる名ホ
るゆ、紅葉鮒 和漢三才圖会 深秋その鱠ゆ
し、ゆこぢ愛ずるを紅葉鮒とゆふ

せ

七月

施餓鬼 施餓鬼棚 紀事 此月朔日より十
五日ホ至て、寺院の意ホ
任せてこゑとゝ修ゆ、その法門前ホ檀と四隅ホ構へこゑと須弥
の四州ホ比す、寺僧その上ホ座し経と誦し、中央ホ種々の供

物と備ふ是ハ鬼子母神の子とり食ふ故ふ佛戒めて今よ
り汝ら食ハ別ふ子へんと誓ひ給ふこの故ふ末せの仏才子ふ
勅して毎日浄飯七粒づゝを與へその飢渇をやくいもひと云、
○一説ふ目蓮の母餓獄の中ふ墮ようそこの功徳をまうけ、
諸の餓鬼をして食を得をしむ〻ようしとり、施餓鬼通覽
廣大施餓鬼の法浄き所と点定し地を掃ひ柵と作る長き
三尺ふ過ぐ〻まじ但桃樹拓榴の外用ふるこゝろ鬼神ゐを
ふとてこれを食ふことをとゝえぎ、或ハ浄地の上大石の上或ハ泉池
江海流水中、これ川餓鬼ふ用ふ東ふ向うて施をし、尤時と戌時定め
てこれを行ふ大幡二本これふ咒謁と書て云唵嚂呢喃唎
呼吒婆婆訶、これを宝樓閣經の咒く又七如来の幡とあぐ、
別ふ焦百鬼主を用ふるもれハ施食のそなへ、面前鬼ふ始ふ受、

倶舎論頌 鬼八月と日とをもて、五百 摂待 門茶 仏祖統紀 宗曉傳日

人間の一月と一日として壽五百歳、
義井と城南の櫟社ふ鑿法華水といふ以て行者ふ飲しむ、
亭とその上ふ作り施をふ湯茗と以す、屋と結ぶと數楹
創て摂待といふ○往来の人
ふ茶と施をまゐり門茶とも云、洗車雨、洒涙雨 天中記七

月の六日の雨と洗車雨といひ、七日の雨を洒涙雨といふ、漢
塩草 車と洗ふ雨といハ七夕の別といふ○この夕へ雨ふれバ天
の川水漲りて二星會ひまじとなる
俗説この洒涙雨となゆい誤りしなり、施火焼 大文字焼 鳥居の火

船形りの火 紀事 七月十六日今宵東山浄土寺の山上
妙法の火 ふ薪を以て大字と点ぜ、此字畫九筆の及ぶ
處ふあらぜ傳へ室町家繁昌の日、遠王遊觀の為これを
点ぜしむ故ふ一条通りと正面とも○一説ふ延徳元年七月十
六日、相國寺横川和尚始てこれと作る是將軍義尚追悼
のこゝろ、凡この月六日より薪を伐点火をるふ至るそこと
ふ預るもれ數十家あり、今日申の刻各伐乾ところの薪
を捨い山上ふ登る、凡大文字一畫長さ百五十間余五尺むり
と隔て薪木と積事一堆ゐる數四百八十余所各薪と積終り
て後日の没ると待て同時ふ火と点ぜ、この外北山松ぜ寄ふ
妙法の火と点じ、船岡山ふ船形りの火と点じ愛宕山うゝそ
鳥居形の火と点ぜ洛外所々の山岳并ふ原野ふ諸人集りて、
枯麻の枝樒の枝破子公卿基王の類を焼く、善福寺童
これと聖灵の送火とゝひ又施火とゝふ、

相撲 十五日 江戸麻布雑色町ふあり、麻布山と号す、開山了海上人の忌日ゆゑ故ふ寺内ふ祭る所の麻布山了海上人ハ、親鸞上人の弟子ゝ今日開帷現の社前ふて童相撲あり報恩のこころもゝ〳〵、

仙花 剪紅羅 剪沙花 剪秋羅 とゝ、ゝ

羽花 花の形刻ミ有て小刀或ハ鋏と以てきりなせるゞごゝ、俗ふせんといふゝ秋深紅の花をひらゝ種類數品あゝ、松本セン 小倉セン ブシセン フレクロ 眼皮ハ一類異種ゝ、カンヒ フレクロハ三四月九六月も咲依て剪春羅ことゝ云ふ、

兼三秋物 抽て此花和種ゝ昔嵯峨清涼寺の北ふ寺ありゝ仙翁寺と云ふ其寺絶て跡ふ珍花生ゝ時人仙翁花とゝ云ふゝ則前羅紅あり又紅梅艸とゝ云ふ、

千秋樂 盤渉調の曲也 体源抄 千秋楽 柏子八又 十六柏子 ○王子降誕七夜ふことゝ奏ゝ盤渉調ハ秋の野ふ萩女郎花風ふ吹〳〵ゞ如く吹ゝ〇俳書ふ千秋楽と出〳〵て万歳楽秋風楽と出さゝ秋風楽ハ漢の武帝の時出来て秋声の辞あゝと、秋本ふ一ふあゝゞきあゝ、

八月 釋奠 献能 続日本紀 聖武天皇天平二十八年八月癸卯釈奠服器及び儀式と改め定む〇二月ふ同じゝ春の甘の部ゝ公事根源あゝる日釈奠の胙とまゐゝゝ藏人持て朝餉の前ふ〇藏人答てふんやのつゝゝの奉ゝる昨日の釈奠の胙音と文字とふゝゝ〳〵ひて高く擎持て簾の中ふ入事ゝ此支ハ二月ふわゞきや胙と献ゝハ八月ふ限ゝゞ来ゝ猶有職の人ゝ尋ぬゝ〇釈奠の翌日わゝる事ゝ胙といひゝゞきのゝゝ、

鶺鴒 ひの部 稲負鳥 の条ふ注ゝ、

千振 胡黄連ゝと の部ゝゞし、

千生 ひの部 瓢薑 の条ふ注ゝ、

九月

泉涌寺舎利會 八日 洛の泉涌寺舎利殿ふおいて毎年九月八日舎利会と行ふ音楽あり、律師湛海宋の白蓮寺よゝ受持の仏牙あり、

仙蔘 珊瑚ゝさ の部ふ出、

梅檀の實 時珍曰其子金鈴の如し熟ゝる時ハ黄色金鈴と名ゝ形ふ象ゝる〇梅檀ハ楝ゝ夏のわの部ゝる

す **七月**

硯洗 つの部机洗の条下ふ出ゞ、

水灯會

十六日 城州宇治郡大和田黄蘗山万福寺ふかく當寺ハ華人黄蘗隠元琦禅師明暦中の建立〻 紀事 今宵宇治川の船中ゆゑ〻と修も水中施食の法事〻其式船三艘と双べ申の刻むうふ岡屋の前ふ出先ッ流ふ所ふて宇治橋の下ふ至る暮ふ及で船中数个〻燈臺を点じ僧徒左右ふ座と列ね七如来の牌を安し供物を備へ經巻を誦し音磬をうちて流ふ隨ひ下るまゝて後三百六十个の燈を宇治川ふ浮へ流ふもとゞひ水ふ頻ひ散乱すゝむ恰も蛍火の如しその灯白紙を以小蓮花を造りて内ふ艾心を竪その熟艾ハ焔硝を以て煮る火とその末ふ点ゞ先ゞ或ハ流ふもとゞひ伏見豊後橋の下ふ至るかのこゝ僧徒亥の刻ばかりふ岡屋の前ふ帰る其間遊覧の船数千〻 月令廣義 南国の凡俗中元の夜家戸各美飯と具へ齋供を門前ふ羅或ハ桐葉の所傷亡の野鬼を祝祀〻畢て水燈三十六〻〻けて流水ふむかひて浮む名づけて度〻とゝふ燈ハ紙燈ふ

相撲

部頭使 漢書注 兩々相當て力と技藝射騎ふ觝戲をを故ふ角觝とゝふ 事原

史記秦の二世甘泉宮ふ在て樂を角力戲俳優戲を設漢の武帝この戲を好む即チ今の相撲〻 垂仁紀 大和国當麻蹶速と出雲國野見宿禰〻力を撲〻む蹶速野見ふ勝をあくまで〻その腰を踏折らもて死せ〻野見ふ家の祖〻 扶桑畧記 柏原天皇の時より代々天子皆悉く相撲を好む貞觀以後寂然〻て無事〻今聖主〻〻捨で又無〻〻〻〻や〻〇先ッ三月のころ大将以下陳の座ふおゐて相撲使のことを定む諸国七道ふ遣そ相撲人を召さるゝと部領使とゝふ

公事根源 相撲 江次第 仁寿殿東廂の相撲と

あり藏谷ふ云南殿出御のとき仁寿殿ふ於て右合の抜出ふあり是ハ諸国の供御人供御人相撲を奉行まゝ人則諸国の防人〻をめ〻あつめて七月ふ相撲の節とゝひて天子の御覽むるとまゝ人先十六日の間ふ召仰あゝ上卿勅を奉ゝて左右の次將ふ相撲あゝぐきうゝと仰らる左右の近衛方と分て国々へ使と下して相撲と召もこれを巣ふこゝろゝ使とゝふり廿六日ふ内取とゝふとあり仁寿殿江才裏谷ふ五六の月八廿六日ふ内取とゝふとあり仁寿殿次御物忌のこゝ清涼殿ふおゐてこれと行ふ美とゝふ内取とゝふ〻〻近年御物忌と申ときこの故ふ左と左右と右相撲あり〻〻ふ出御あゝ左右の角力人東庭て角力十五番あり〻故障あゝとき仰ふ隨て進止も擯鼻の上ふ狩衣袴を着く

延元三年江記三云角力人三十人次第行列之事襲束烏帽子狩衣
犢鼻褌〇差細狩衣の上ハ帯と著て下衣袴と著て徒跣各三十人
おのおのきぬをとまつ取て勝負あり八日 七の月廿八九日 召合
小の月廿七八日
あり、裏書云召合技出ハ云右相撲相合〇江次第云勝方乱声
負ハ云左勝ハ左勝負右勝負ハ右先ツ勝留利ト奏ス左
時と決ス左勝負右勝負ハ技頭右勝ハ納曽利ト共ニ奏ス左ハ
綾三と奏ス又せんけいあるやうなる他の舞ヲ奏ス〇天長
四殿ニ出御、王卿参上ス、大将相撲の奏を執る十七番取て
勝方乱声あり、又廿九日技手として角力とりて御覧ぜ
らるゝ、神亀三年ニ始アて諸國より召上せらる、寛平七
年ニハ童相撲と御覧あり、まづて角力の起りと申ハ日本紀
垂仁天皇七年七月當麻邑ニ勇士あり云〇助手最手加
手あり云相撲ハ助手是と服手とハ江次第〇助手是と服手とハ
ゝゝゝゝ今関服ふどらふどらふ名と設け
ゝゝゝ欤〇童相撲辻相撲各頭字の部ニ分て注、

薏苡仁

和漢三才圖会 苗ハ黍ニ類し巣の間ニ枝とりもて穂を出
し、実と結ぶ其稍の尚ニ白花と開く凡草木ハ花を
て実と結ぶ此ハ花と実と別し形四く末ハ尖り端ニ白絲三條と
出て累乾くときハ絲脱去て孔とり上下通ずニ児絲を
貫きて念珠とす、

西瓜

和漢三才圖会 慶安中 黄葉隠元入
朝の時、西瓜扁豆ホの種と携へ来り
始て長崎ニ種 本朝食鑑 水瓜ハ西瓜〇俗ニ瓜ト水瓜
故ニ名く、大和本草 三月種と下し蔓延て地ニ布四五月
黄花と開く甜瓜の花のごとし、

鈴虫

和漢三才図会 金鐘蟲 月令広義
俗云鈴虫此ニ蟋蟀の類(真黒)
松虫ニ似て首小く尻大く背窄く腹ニ黄白色あり夜鳴
声鈴と振ガ如し、里里林、里里林とふぐゝ〇此鈴虫の
名、まの部松虫の条ニ出す、

すげの庭鳥

異名分類 うるい
あぐきの山ふくろやう
蓬ヶ杣のもけの庭鳥、

兼三秋物

芒 尔雅 薄ハ草の聚て生ず
と薄とハ又芒とハ杜栄〇時珍曰芒葉皆茅のごく
ゝて大く長さ四五尺甚快利ゝて人と傷ること鋒刃の
如し、七月長き莖を抽んで穂とあり、蘆葦の花のごと
者ハ〇縵芒、篠芒、鷹の羽芒、糸芒、簇芒、十二穂芒、
麻苧穂の芒、真蘇苧の芒、穂芒花芒、鬼芒等各頭字の部ニ出す、

相撲草

和漢三才圖会 野原湿地ニあり、巣地ニ布て叢生を、忍冬ニ似て
微扁く石菖ニ似て浅く秋莖と起て嶺ニ穂とあり、青白

色細子あり、豆どもうるはし、其莖扁〻強健長さ六七寸小児莖を取て穂を縮結て繼の如くし、二筒と用ひ其稍めおさ〻えとみ、両人莖を持て相引く、切るる方輸と云す、

すごる もぐと鹿といふるい誤り、先板の諸抄ふまつふもぐらひて、秋の部ふ出もふようでふ贅して其ところを注を、古今もぐらあり秋の萩原朝ぐもて旅ゆく人といろこころまこん、真湖翁云もぐるハ日本紀ふ螺蠃と書てもぐるとよめり、一ゆく似我蜂とも云、此蜂ハ桑の木の出を拭い来て、巳が巣おて七日咒ひぬるとバ巳が如き蜂とあれりといふ、さて其子ハ一度巣をこもて又帰来らぬよし、其如く今別ゆきて、又ろとももられぬ人まとバ帰るをいろこころまこんとうちなげきてこころまり、中畧此の何とももちれぬ〻萩原といふふつきてもぐるハ鹿の事ふもどいふらゐ説ともいつり、云、俳諧の書ハ後の誤ふし、

芋 芋の莖をいふ、大和本草唐の芋の整ハ煮て食し、生おて酢とくして食、鱸鮒 鄭樵

八月 胡

大和本草鮒魚大なる者二三尺、三月以後七月まて色暑月脂多くして味よ〻、八月より色もる夏秋さ〻こ鮗と〻

鮎 とあす、夏月腸の味よ〻、モロタとふ腸あり、脂多く味よ〻ふ、ふるとセイゴとふ松江ふるとい、中華松江の鱸ハ其大サ日本のセイゴの如〻と云、河鱸味尤よ〻、暑月の佳品ふ海と河との間ふあるもの味よ〻、漁人これを釣或ハ戈おて突てこふ、稀衰 鰒つる

こうをなるら〻 鱸つり半残

九月 任吉相撲会

十三日 宝の市 拾芥抄九月十三日任吉相撲會 社家説神

外市 興玉出嶋頓宮へ渡御、傳々供あり、津守の神主勅使代として宣命と讀畢て、相撲十三番童相撲三番あり、犢鼻褌の上ふ注連を纏ひて手合あり、是今日の神事ふ、○一説ふいふ〻ハ神前へ黄金の升と作て、新穀の稲を奉ることよりて農家用ふる処の升をこ此処ふ持来て賣ることふて種々の市人群集ふ故宝の市ふふ也、宮当社の別宮会ふ心得べ〻、今ハ神輿を別殿へ迁し奉りて、五穀新嘗の神膳ふ奉る相撲会の事中頃より沙汰あ〻、宝の市外市是ふ〇升買て

分別うせる月　見うめ　芭蕉

住吉の神送　晦日　九月晦日、摂州住吉の神輿、玉出嶋の仮殿へ渡御、即祓と修まて住吉の御菅の俊らふ祝祠あり、又北祭と称も、出雲石とつゝ所おて、祢宜出雲と遥ふ拝むこれを神送とつゝ今日四天王寺石の鳥居の邊ゑまて神送てあり、大坂所々の神社も又神送りの神度あり、

爵入大水為蛤　月令　此記、戌月之候爵為蛤飛物化為潛物、九月節

酔揚妃　百菊の内、大白入薄紅わゝて万重大々輪、

芒散　其花老る時絮の如く

あゝて、風ふきさがひて散乱もること鵞毛の如し

追加　は　八月

八朔梅　冬あふの部、冬の梅の条ハ注セ、

は　七月

星草　大和本草　穀精草、沢中水田の中ふ長生も、葉の中より一莖を抽んで其形其蘭ふ似て、莖の末ゝ白花の冠きあつゝ　○俗太鼓のブチとゝふ

り

七月

琉球芋　大和本草　甘藷　葉ハ番薯　蕷　菜の葉ふ似くゝ根ハ瓜樓根ゝ似くゝ根の下ふ短き蔓あゝ根の餘のひけあゝ又蔓元卵ふ似て大きゝあゝ、鴨の卵ふ似て小さゝあゝ、大ゝ重さ一斤あゝ、長きあゝ、四きゝ夏月蔓長く生も、中略此種元禄の末、琉球ゝ渡る、薩州ふ渡る、煖土ふよゝし、寒地ふ植もて生せも、

は　八月

鶺　大和本草　和品　鬼ツ　ぐゝとゝふ常のゝ

ぐゝとゝ三倍わて大ゝ、ほゝ多し、山中ふゝ、鶺の字頃の和名抄ふ唐韻を引けて、中華の書ふハ怪鳥くといへゝ

ら　九月

万年青前おき　此詞増山の井ふ出ゝ万年青のまゝ、牡丹の胴松の胴とて立花ふ用ゝるゝ、但し池の坊三ヶの傳受もて、ハ委ゝくハゝ

し　八月

鴫の羽盛　鴫の羽ゝ千鳥の羽ゝ、ゝゝ料理ふ、ゝる事ゝ、切ゝ、竜頭を以ゝ全体のゝゝ作ゝ、その脊のゝゝ焼ゝる肉を盛ゝ、これと鴫

の羽盛
とりつゝ

増補歳時記栞草秋之部終

中村俊定文庫